
愛する君へ

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛する君へ

【Nコード】

N1360I

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

主人公、榎本圭介 21歳。彼女にふられ、さえない日々を送っているときに、突然恋に落ちて・・・。「今 このときを 愛してる」の榎本圭介がわから見た物語です。

もし、あなたがあとわずかの命だと告げられたら、愛する人と別れますか？それとも、最期の時まで一緒にいることを選びますか？愛する人とともに生きて、奇跡を起こす感動ストーリー。

「今 このときを 愛してる」ではわからなかった圭介の思いや、エピソードをお楽しみください。

プロローグ（前書き）

「今 このときを 愛してる」の瑞希の彼、圭介がわから見たストーリーです。

「今 このときを 愛してる」と同時進行で読むのもよし、「今 このときを 愛してる」を読み終わってからでもよし、「愛する君へ」を読んでから、「今 このときを 愛してる」を読んでもよし・・、どうぞ、ご自由にお楽しみください。

「今 このときを 愛してる」では書かれていない、エピソードもあります。

ブローグ

奇跡ってあるよな。

そんなの信じてもいなかったし、

そういうの興味も無かったし…。

出会いとか、運命とか、そういうのも俺はずっと信じていなかった。

君に会うまでは…。

出会わなければ良かったって思ったこともある。

こんなに苦しくなるなら、会わなかったら良かったって…。

だけど、やっぱり君に会えて良かったよ。

君に出会って、俺はどんどん変わっていった。

いや、変わったんじゃないって、

俺が俺らしくなっていったのかもしれない。

君が、ありのままの俺を愛してくれたから、

俺は、ありのままの俺でいることができた。

強がってた俺のことも、弱い俺のことも、

君を愛してる俺のことも、

君が、どの俺も愛してくれたから、

俺は、俺でいることができた。

俺も、ありのままの君を、愛することができた。

きっと、君と出会ったことが、奇跡だったのかもしれないね。

1 突然恋に落ちた

冬…。俺の心は、ずっと寒かった。

なんでかっていうと、なかなか去年別れた彼女とのこと、忘れずに引きずっていたからだ。

女って、男よりもあっさりしてるよな。別れても、すぐに他のやつと付き合えちゃったりするんだ…。って、昨日、友達に元かのが男と腕組んで歩いたの見たぞって、言われたからなんだけど…。

俺はどつかで、また、戻ってきてくれるんじゃないかって、ひそかに期待してた。すげえ、馬鹿だったかも…、俺。

そんなこんなで、心の中まで冷えきってる…。ああ、もうすっぱり忘れられたらな。他に好きな人でもできたら、綺麗さっぱり忘れられるのかもしれないけど…。

でも、半年も引きずってる…。無理かな…。

気持ちちは暗い。でも、そういうの悟られないよう、明るく見せちゃうのが、俺の癖…。

「え？もうデートに？まあ、良かったじゃないの、お姉さん！」

おふくろが、なんか嬉しそうにさっきからずっと電話してる。

こっちは、落ち込んでるっていうのに、誰だよ、デートするやつ…。

「圭介、茂にいが見合いしたの知ってる？」

リビングで寝転がって、テレビを観ていた順平が聞いてきた。

「茂にいが？」

俺は、リビングのソファが定位置。やっぱり転がってテレビを観ていた。

「そう。今日、それで親父、出かけてたんだよ。でもさ、あんな仕事人間でまじめなやつと結婚なんて、相当結婚あせってる人じゃないの？」

ガチャン！

「ちよっと、順平！姉さんに聞こえちゃうでしょ、やめてよ、そういうこと言うの」

おふくろが電話を切って、ダイニングから順平にどなった。

順平っていうのは、二つ下の弟、今高校3年。で、茂にいつてのは、従兄弟。たしかもう、35歳くらいいつてる小児科医で、いまだ独身。仕事一筋のまじめな堅物って、親戚の間では有名。そんな茂にいが見合い？結婚なんて、絶対にしないと思ってた。

「で、相手ってどんな人だったの？親父」

順平は、さつきから興味津々だ。

「うちの会社の人だよ。なかなか綺麗で、気も利く大人しい雰囲気、素敵な女性だ。いまだに独身なのが不思議なくらいのね」

親父は、ダイニングで新聞を読むのをいったんやめてから、順平にそう言った。

「へえ、なんか茂にいいには、もったいないんじゃないの？」

「つい、俺もそんなことを言ったが、ほんというと、どうでもいいことだ。」

「でもね、もうデートが決まったんですって。それも明日よ。映画を観に行くらしいわよ。姉さんが喜んでたわ」

「良かったな」。今日の見合いの様子じゃ、すぐに断られるかと思っただけだな……」

「あなただったら、はじめから、うまくいかないと思うとか言ってたけど、わからないものよ、こういうのは。そうそう、何でも5重の塔の前で待ち合わせて言っただけ、何それ？知ってる？圭介」

「海老名じゃない？ショッピングモールのところにあるんだよ。でも、5重だったかな？その前で待ち合わせ？」

「うん、わかりやすいだろうかって、向こうから言ってきたらしいわよ」

「ふうん。いいね、デートか…」

「圭介も早く彼女作れば？元かの、引きずってないでさ」

「うっせえよ、順平。お前はひよいひよい、彼女変えすぎなんだよ！」

ああ。明るくしてても、こいつに何か言われると、あつたまくるんだよね〜。

「そうだ、圭介。彼女もいなくて、明日暇でしょ？ちょっと車出してくれない？たくさん買出ししたいのよ」

「ええ？俺？」

「そうよ。だって、正吾は絶対そういうの行かないから。また月曜にご近所さんが遊びに来るから、たくさん買いものがあるのよ」

「…ったよ。で、何時？」

「そうね、昼前がいいわね。お昼どつかで食べてきましょうよ」

「ああ、うん…」

はあ…。おふくろと出かけて、おふくろと食事かよ…。

気乗りがしないまま、朝が来た。寝坊したいのに、たたき起こされた。いって…。最近、朝、頭が痛いんだよね…。

「早く、朝ごはん食べて、着替えてきてよ、圭介」

「んん…。わかってるよ」

ぼりぼり…。顔を洗って、着替えて…。ああ、面倒くせえって思ってるからか、動きが鈍くなるよな…。

「ええ？なんだって？茂君、今さら何を言ってるんだ？」

ダイニングから、親父のでかい声が聞こえてきた。茂にい？

「病院にこれから行く？でも、柴田さんと約束の時間まで、30分くらいしかない。ってことは、もう柴田さんは、家にはいないんじゃないのかい？それも、携帯の電話番号を知らないって…」

なんだ？茂にい、ドタキャンか？

「こっちも、柴田さんの携帯は知らないんだよ…。え？ちょっと、

茂くん！」

「どうやら、電話、切られたんだな…。あゝあ。茂にい、もう断られるな、确实…」

「圭介！」

「え？」

「お前、今から出るところだろう？ちょっと、車で行ってこい！」

「え？俺？って…どこに？」

「柴田さんもう、海老名に向かっているんだよ。車でどうにか30分で行けないか？とにかく、これ、一万渡すから、映画でも代わりに観て来い。そそのないようにするんだぞ。これで、断られでもしたら茂君に…、いや、柴田さんに申し訳ない」

「え？でも、俺その、柴田さんって人の顔も知らない…」

「ああ、そうか。写真持つてくる」

「冗談だろ？何で俺？何で茂にいの見合い相手と、映画観なくっちゃならないわけ？」

「この人だ、右から2番目に写ってる…」

「…この人？」

「柴田瑞希さんだ。この写真持つて、行ってこい！」

「あ…、うん…」

「なんでだろう、冗談じゃねえって思ってたのに、写真見たらいきなり、気が変わった。思い切り、俺のタイプかもしれない…」

それから、俺は、車を急いで走らせた。おふくろの買い物につき合わされるのも、ほんと嫌気がさしていたし、別に茂にいの見合い相手なんて、興味もなかったけど、でも…。写真見て会ってみたって、思ったのは事実。

道が混んで、時間に全然間に合いそうもない。それどころか、10分以上も遅れるんじゃないのか…。気の短い人なら、帰っちゃうんじゃないのか…？

でも、俺は気が焦りながらも、少し、ワクワクしていた。柴田瑞希さんって人と会えるのを…。

五重塔の前…。一人、ぽつんと立っている人がいた。時計を見ながら辺りを、きよろきよろと見ている。ああ、あの人だ！

近づいていく…。横顔が綺麗だ。髪がストレートで、黒くって、綺麗だ。身長も俺の身長とちょうどいいくらいの高さだ。

ああ、やばくない？もろ、タイプだよ…。

「あの…。柴田瑞希さんですよね？」

「え？」

すごく驚いた表情。それに不信がってる。そりゃそうだよな。

茂にいが来るって思ってたんだもんね…。

「榎本圭介っていいいます。桜井茂の従兄弟です」

「ああ…。ええ？」

まだ、驚いてる。なんか、驚いた表情も可愛い…。

「あの、茂にいの代理で来ました」

茂にいが急患が入って、来れないことを言うと、やっと納得したようだ。

「何の映画を観る予定だったんすか？」

「アクションもの…」

「奇遇ですね。俺も、アクションもの好きです」

って、別にアクションでもSFでも何でも、そう言ってたけど…。

それにしても、緊張してのどがカラカラ…。

「のどが渴いちゃって…。スタバでなんか買ってきますよ。柴田さん何がいいですか？」

「キャラメルマキアートの冷たいの…」

「ああ、俺もあれ好きです」

って、他のを言われても、好きですって言ってたかもしれないけど…。

急いで、スタバに行つて、キャラメルマキートを二つ買う。
戻つてくるとき、ベンチに腰掛けてる柴田さんを見た。なんていうか、大人の女性だ。当たり前か。12歳も上なんだもん…。
でも、どこことなく可愛いんだよな。どこかな？ああ、やばい。
俺、浮かれてるかも…。

映画が始まった。すぐ隣にいる柴田さんの手が、俺の手に少し触れた。

ワッ！すげえ、ドキつてした。やばい、なんかわざと手に触ったなんて思われたら…。急いで、手をひっこめた。

さつきからすげえ、ドキドキしてない？俺。なんか映画の内容なんて入ってこないよ。

柴田さんは、なんかいい匂いがした。ああ、髪だ。髪が動くたびに、その匂いがする。今まで付き合った子は、タメだったり年下だった。こんなふうに、女らしさを感じたことってない。

ちよつと、視線が下に行くと、柴田さんの足元が見えた。膝が見えるスカートをはいてる。足を、組みなおされ、それだけで、ドキつてする。少し、横顔を視界に入れた。真剣に映画を観ている。

誘惑してるってわけじゃないよね…なんて、アホなことを考えてる、俺。

そつだよ。柴田さんは、茂にいの見合いの相手！何を馬鹿なこと考えてんの？俺…。

映画を観終わって、まだ一緒にいたくて、強引に食事に誘った。
どこの店に入っているかわからなかったから、目に飛び込んできたイタリアンの店に入ることにした。

「圭介くんって、お母さん似でしょ」

突然、柴田さんはそんなことを聞いてきた。

「いえ、おじいちゃん似です」

「イケメンのおじいさんなんだ」

え？イケメン？俺のこと…？まじ？

「あはは、俺、イケメンっすか？」

やべえ、そんなこと言われてあせる…。

「え？自覚ないの？そんなことないよね」

ええ？初めて会ったやつに、いきなり「イケメン」とか言う？

「瑞希さん、初対面でもまったく、大丈夫な人ですか？」

「いや、人見知りするよ」

「うそだ〜〜〜」

全然、平気で話してるじゃん！　なんだか、面白い人だな。親父が大人しいって言うてたけど、そうでもないし…。

ああ、これからドライブでもって誘っても、大丈夫かな？まだ、一緒にいたいな…。

「俺、車で来てるんで送っていきます。ドライブがてら…」

「いいの？」

やった！！！

それから、駐車場に着き、車に乗った。わ…。緊張する。助手席に柴田さんが座ってるってだけで、かなりの緊張…。

「あれ？」

「え？」

横を見たら柴田さんは、シートベルトを締めるのに悪戦苦闘していた。ああ、シートベルト、硬いんだよな…。

「それ、ちょっと硬いんです。俺、ひっぱりますから」

フワ……。あ、やべ…。また、柴田さんの匂い…。うわ、俺、真っ赤になってないよな…。

「家、どの辺すか？カーナビいれちゃうんで…」
って、手が震えそうだよ。しっかりしろ、おい。

柴田さんは、なんだか、落ち着いてる。男の人の車の助手席なん

て、慣れてるのかな？俺は、ドキドキしてるのを、悟られないように、歌を歌ってごまかしたりした。

でも、柴田さんの表情が気になって、信号待ちの間、顔を見たりすると、なぜか、柴田さんは決まって目をそらして、外を見た。わざと視線をはずすのか、偶然か…。

だから、表情が見えなくて、柴田さんの心のうちは、まったくわからなかった。でも、外を見ている横顔が、夕日に染まってて、すごく綺麗で色っぽかった。

「あ…」

ミスチルの「花火」の曲で、柴田さんが反応した。

「俺、この、曲好きなんです」

って、これはまじな話。大好きな歌だ。柴田さんは少し嬉しそうに、こつちを見ていた。きっと、柴田さんもこの歌が好きなんだな…。

柴田さんはなぜか、少し家から離れたところで、車を止めてと言った。

「楽しかった。ありがとう」

柴田さんは車を降りるとき、そう言った。それだけ？って当たり前か…。俺は代理なんだもん。まさか、また会えませんかとか言えないし…。

「俺も楽しかったです。それじゃ」

そう言って、俺は車を発進させた。バックミラーを見たら、柴田さんがずっと、見送ってくれていた。その姿が、目に焼きついて、離れなかった。

家に帰ると、親父に遅かったなと言われた。

「うん、ちゃんと映画観て、ご飯もおごって、車で送ってきたよ」

「そうか。柴田さんは、茂君のこと何か、言ってたか？」

「え？別に。聞かなかったし。俺も…」

「え？そうなのか？」

「何で聞かなくっちゃならないんだよ？」

「お前、代理で行ったのに、楽しんじゃってたんじゃないのか？」

「嫌嫌、付き合うよりか、いいだろ？」

そう言つて、部屋に俺は、さっさと行つた。

ボタン…。ドアを閉めて、ベッドに横になる。そして目をつむると、夕日に染まった柴田さんの横顔が浮かび上がる。

「もう、会えないのかよ…」

すごく、切ない、やりきれない気持ちになる…。

「やべえじゃん、俺。すごい好きになつてるんじゃないの？」

親父が朝、渡してくれた写真をポケットから出した。少し、くしゃくしゃになつてる写真を綺麗に直す。柴田さんの笑顔が、今日、俺に見せてくれた笑顔とだぶる。

「茂にいの見合いの相手だよ、好きになつてもしょうがないじゃん」
そうつぶやいても、その写真の笑顔から、ずっと目を離せないでいた。

翌週。カーナビに柴田さんの住所が入つて、それを見ながら車で、柴田さんの家の近くまで行つた。柴田さんが降りたあたりまで行つてみたが、家の前まで行く勇氣はなかった。

偶然を装つて会えないかとも思つたが、こんなところで、うろろろしてるのは、どう考えてもおかしい。

「これ、ストーカーだよな…」

自分でしていることが、すごく情けなく思えてきて、そのまま、また車を走らせ、家に戻つた。

もし、茂にいと駄目になつたとして、でも、もう会うこともないだろう…。

もし、会えたとして、でも、俺みたいな12も年下を本気で、好きになつてくれるとは思えない…。

ふと、気がついた。俺はずっと、柴田さんのことばかりを考えて、元かののことなど、すっかり忘れていることを。

「ああ、なんだよ。恋に落ちたかと思ったら、絶対に叶わない恋だよ…」

また、くらゝく、おもゝゝい気持ちになったが、やっぱり俺は、会社でも家でも、明るく見せ、自分を偽るしかなかった。

そして、早くにこの恋も、忘れなきゃって必死で思っていた。

2 運命の出会いなのか

仕事に明け暮れながら、2ヶ月が過ぎた。

茂にいと柴田さんが、なんとなくうまくいつていることを、おふくろとおばさんが電話で話しているのを耳にしたが、自分がそれを聞き、落ち込んだり、沈んだりしているのを自覚したくなくて、もう、柴田さんのことは関係ないって、思い込むことにしていた。

4月。3月いっぱい契約社員がやめたので、新しい人が来ると社長が話していたが、まったく興味がなかった。でも、いきなり親父に、

「ああ、そういえば、明日からお前の会社に、柴田さんが勤めることになったから、よろしく頼むな」

と言われて、俺はまじで、目が飛び出るくらいに驚いた。

「ええ~~~~？！今、なんつった？親父！」

「……。お前、驚きすぎだろ？」

親父を、逆に驚かせてしまった。

朝から、髪を綺麗にとかしたり、念入りに歯を磨いたり、ネクタイはどれにするかすごく悩み、いつもより遅くに出ることになった。「なんだよ、もう、来てるかもしれないのに！」

駅から猛ダッシュ。でも、汗かいて、息切らして会社に入るのもみつともないから、会社の近くに行ってから、息を整え、エレベーターに乗った。

オフィスのドアを開けた。そこには、あの柴田さんの、綺麗なまっすぐな黒髪が見えた。

「く~~~~！会えたじゃん！！！」

心の中で、そう叫んだ。

「やっべ~~~~。これはもう、運命的な出会いなんじゃね？」

って、勝手に俺は、盛り上がった。

柴田さんが、こっちを向いた。目が真ん丸くなって、しどろもどろになった。俺が目の前について、相当驚いてるみたいだ。

なんか、その驚きよう…。俺に再会して、喜んでるって思ってもいい…。？って、俺、自意識過剰…？

俺のほうはというと、絶対に、嬉しさを隠しきれなかった。もう、体中から「嬉しいっす！」って気持ちが出たんじゃないかな。

柴田さんも絶対、俺との再会を喜んで…。顔が赤かったし、なんか、嬉しそうに笑ってたし…。

って思ったのもつかの間…。昼ごはんを社のみんなで食べに行くと、柴田さんは、何だかよそよそしかった。時々、目が合っても、その次の瞬間には、ふって視線をそらされる。

席に戻っても、冷静で少し冷めた表情をする。パソコンの入力の仕方を、すぐそばで教えると、また、柴田さんの髪からいい香りが出て、嬉しくなって、顔を見るんだけど、目が合いそうになると、そらされてしまう…。

俺、嫌われてるってことは…、ないよね…？

時々俺は、知らない間に、相手を傷つけるようなことを言っているらしい。元かのに、それをよく言われた。無邪気すぎる。素直すぎて、相手を傷つけてることもわかってないよねって。

なんか、知らない間に、柴田さんのことを傷つけたのかな…。

不安はよぎったけど、だんだんと、柴田さんが笑ってくれるようになり、話しかけてくれたりするようになった。

そのうちに、柴田さんの好きな食べ物だったり、動物、映画、色、本、歌、歌手、テレビ番組、いろんなことを知ることができた。そのたんび、俺は心の中で喜んでた。

柴田さんのこと、思い切って、下の名前で呼んでみた。どう反応するか、本当は怖かったけど…。

「瑞希さん、ちょっとこれ手伝ってもらっていいですか？」

そう言つと、一瞬驚いた表情をした。あ、やべ…。嫌がつてる？「うん、いいよ。どれ？」

すぐに、にこつて微笑んで、いつもの優しい表情に戻っていた。ほ…。大丈夫なんだ、瑞希さんって呼んでも…。また、俺はそれだけで、有頂天になった。

有頂天のまんま、社内旅行に來た。今日の夜、そして、明日の朝まで、瑞希さんといられるんじゃない！

温泉に入つて、宴会だよな。でも、宴会っていつも長引くんだよな。どうせなら、途中で抜け出せないかな…。

そんな計画をひそかに練つて、お風呂に入っていたら、隣の女風呂から、瑞希さんと稲森さんの話し声が聞こえてきた。それも、だんだんと、瑞希さんの声がでかくなって、まる聞こえだった。

「子供っぽいから話しやすいだけです」

それ…、俺のこと？

「影で付き合つてると思つたわ」

つていうのは、經理の稲森さんの声だ。稲森さんは、ちょっと派手で、お化粧も濃くつて、俺の苦手なタイプ…。

「圭介は、私の今お付き合いしている人の、従兄弟なんですよ。それで、ちょっと親しいだけです」

ああ。やっぱり俺のこと…。

「彼氏？圭介の従兄弟？」

一緒に風呂に入つてた、社の人から、からかわれた。

ああ…。俺、ばつかじゃね？何、浮かれてたんだよ？瑞希さんって呼べたから、いろいろと瑞希さんのこと知れたから…。でも、それが何？俺は、瑞希さんにとって、子供っぽい、彼氏の従兄弟。た

だ、それだけだよ…。それが現実…。

いきなり、現実をつきつけられ、どんどん心が沈んでいった。
温泉から上がった。このまま、気持ちが沈んだままは嫌だった。

そんなに俺のこと、なんとも思っていないなら、これから、思ってもらえるように、アピールしたらいいんじゃないのか…？

それとも、ここは、思い切り男っぽく、いさぎよく身を引くか…？
いやいや、今は、瑞希さんと社内旅行とはいえ、旅行に来ているんだ。ここに、茂にいだっていない。チャンス到来じゃないか！

って、何がチャンスかわからないまま、俺は、コーヒー牛乳を腰に手を当てて、グググって飲みほした。それから、もう1本買って、ラウンジで瑞希さんのことを待っていた。

階段をあがって、瑞希さんがラウンジの方に来た。うわ！やっべ！浴衣だ！。また、にやけたりしているのを、悟られないよう、平静を装って、

「コーヒー牛乳、俺のおごりっす」

と言って、コーヒー牛乳を渡した。

「ええ？くす…」

瑞希さんが、笑った。俺もつられて、笑った。

瑞希さんは、よく「くす」って小さく笑う。それがすごく、可愛くて、女らしくて、俺はその笑い方が好きだった。その笑顔にまた、気を大きくした俺は、

「これで、卓球があつたら、最高」

なんて、口走っていた。

「あるってよ」

「まじっすか？あとでしませんか？」

「食事すんだらね」

「やった〜!!!」

「俺も、そのとき、浴衣になります」

「え？なんで？」

「浴衣で卓球っていうのが、いいんじゃないっすか」

「ふふ……」

ああ、この「ふふ」っていうのも、たまらないよな……。つられて、俺も「ふふ」って笑う。

それから、部屋に戻った。さっきまで落ちこんでいたのも忘れて俺はまた、有頂天になっていた。

宴会では、やっぱりみんな、死ぬほど飲んでいた。俺は、そこまです酒に強くないし、途中でいつも、ばつくれる。

ちようど、瑞希さんがトイレに立ったのを見て、一緒にばつくれちゃおうって思って、廊下で待っていた。

「卓球しましょうよ」

「え？でも宴会中だよ」

「いいんですよ！」

そう言って、強引に瑞希さんをひっぱって行った。

酒も入って、ほろ酔い気分。俺は最高に、気分が良かった。卓球も、瑞希さん相手だし、手加減したけど、たまに力が入りすぎていた。

で、あまりにも、浮かれてて、いつの間にか、「瑞希」って呼び捨てにしていた。でも、瑞希は全然、怒らなかった。それで、つい本音が出てしまった。

「瑞希、茂にいと結婚すんの？」

卓球を終えて、二人でラウンジに行くと、もう人気もなく、明かりも消えていた。しんと静まり返ったラウンジには俺と瑞希だけで、それがさらに俺の抑えてた想いに拍車をかけたみたいだった。

「俺、子供かよ？」

風呂場での話を聞き、子供扱いされてることが、無償に悲しくなっって、そんなことを言っただ。

そんな俺の、表情を感じ取ったのか、瑞希が傷つけてごめんって謝ってきた。

ああ、俺、何言っただろう……。瑞希を困らせてる。だいたい、瑞希が謝ることなんて、何一つないのに。俺は、茂にいの従兄弟で、瑞希は、茂にいと付き合っただ、真実を言っただ。

「俺、もう寝ます。おやすみなさい」

なんか、限界だった。そのままそこにいたら、俺の想いを全部言っちゃうかもしれない。もっと、瑞希を困らせるかもしれない。

そのまま、瑞希を残して、部屋に戻った。

その日は、朝方近くまで、寝れなかった。

朝起きて、気分を変えたくて、お風呂に入った。体を洗い、顔を洗い、ほっぺたをバンバンたたいた。瑞希を困らせたいわけじゃない。瑞希は、何も悪くないんだから……。

でも、瑞希の顔がどうしても、まともに見れなかった。だから、なんとなくよそよそしい態度になった。瑞希って呼び捨てにしそうでわざと、「柴田さん」って呼んだ。

帰りは、社長の車で二人で乗ることになった。はじめは俺が運転して、社長が後部座席で寝ていた。瑞希は助手席でずっと黙っていた。

何を話しているのか、言葉がまったく浮かばずラジオをつけた。

瑞希は昨日俺があんな態度をとって、どう思ったのかな……。もう俺の気持ちなんて、とくにばれてるんじゃないかな……。

黙って運転してても、瑞希が視界に入る。やっぱ、俺、瑞希の隣にいるっただけで、嬉しくなってる、瑞希の隣にいて、そのあつかい空気に触れていくうちに、俺の中で、気持ちがだんだんと変わっていった。

ああ、俺、やっぱり瑞希が好きだ。その気持ちには、偽りはないし、なんで、その気持ちを消さなくっちゃならないんだ。

そうだよ。俺が勝手に好きでいるのは、自由だ。瑞希を好きでいたって、誰にも迷惑かけない。告白もしない。想いが伝わってくれたら、嬉しいけど、でも、困らせたりはしない。

ただ、好きでいるなら、それでいいじゃんか…。

サービスエリアにつき、社長と運転を変わった。瑞希には隣にいてほしくて、社長の隣じゃびびるでしよって言って、後部座席に座ってもらった。しばらくは、外を瑞希も俺も見えた。

だんだんと俺は、瑞希の隣でそのあつたかさに包まれていって、いつの間にか俺は、瑞希の肩にもたれて寝ていた。

途中で気づいて起きたけど、どうしてもそのままでいたくって、わざと寝たふりをした。瑞希はあつたかくって、いい匂いがして、隣にただで、幸せな気持ちになった。

社長が、瑞希の家はどうちかを聞いて、瑞希が道がわからなくて困っていた。

「そこ、左です」

つい、道を社長に教えた。この辺にやけに詳しいんだなと社長に言われて、来たことがあるからって話したら、

「彼女でも、住んでいるのか」

って、聞かれた。…彼女？とんでもない！

「彼女っていうか、好きな人かな…」

って、思わず本当のことをばらしてた。

「ストーカーじゃないよな…」

社長に言われた。グサ…！

「げげ！やっぱ、ストーカーですか？俺」

ちよっと、笑って言ったけど、隣には瑞希がいるんだ。瑞希の家

に、瑞希に会いに来てたなんて知られたら、絶対に引いちゃうんじゃないかな？…。

社長に、どうしたらモテますか？何て言って話をそらしたけど、瑞希は、ずっと黙ってた。もしかして、嫌がってたんじゃないかなとか、ばれちゃったんじゃないかなとか、俺は頭の中ぐるぐるしてた。

でも、やっぱり、嫌われたくないし、変に思われたくなくて、いつもの明るさで、瑞希に接してしまう。

「お疲れ様、また、明日会社で！」
と、思い切りの笑顔を向けてしまう。

時々、不安になった。落ち込んでる俺の姿とか見られたくないけど、こないつつも能天気で明るいだけの俺、嫌がってたたりしなかった…。

あ、暗い…。本当は、俺、相当暗いやつなんじゃないかって、そんな気もする。

もたれて寝てしまったのも、嫌がってないか、気になって聞いてみた。

「重たくなかったですか？俺」

「うん、重たかったよ」

ええ？…まじで？

「すみません。図にりすぎてました」

そうだよな…。ちよつと、いくらなんでも、あれはなかったよな…。

「うそうそ、冗談、大丈夫だよ」
え？冗談？ほ…。

ああ、瑞希ってたまに、こういう冗談をそんなそぶりも見せないで、言ってくる。俺がその言葉を真に受けて、落ち込んだり、浮かれたりしてるってのに…。

瑞希にとっては、やっぱり俺って、子供なんだろうな。こうやって、からかって楽しんでいるのかもしれない。なんて、思うと、また、落ち込む…。

翌日、会社に行くと、なかなか、瑞希が来なかった。

「圭介」

「あ、はい、なんですか、社長」

「今日は、柴田さん、お休みだそうだ。なんでも、熱が出たらしくってな」

「え?!」

まじかよ?それって、俺のせいじゃねえの?

卓球につき合わせたり、帰りの車じゃ、ずっとよっかつたり…。重いつても、大丈夫って言いながら本当は、寝られなかったんじゃないの?重たかったんじゃないの?

あゝ。俺、浮かれすぎだろ!

夜、みんなが夕飯を食べに行ってる間に、瑞希の携帯に電話した。心配なのと、どうしても、謝りたかった。

だけど、瑞希は、全然気にしないでって、優しく言う。そうなんだ。瑞希は、すんげえ優しいんだ。だから、俺はまたすぐに、いい気になる。

「瑞希さんの声聞いて、すげえ元気でました」

「あはは、私も圭介の声聞いて、元気でたよ。ありがとう」

そう言って、電話を切る。やっべゝゝゝ!すんげえ嬉しい!それがたとえ、お世辞だったり、嘘だとしても、嬉しい!本当になんで俺ってこんなに単純なのかって自分でも、あきれるよ!

突然、同じ会社に入ってきた。会えないと思ってたのに、会えた!俺の声聞いて、元気になるの?もう、運命としか思えない!…つてアホなことを勝手に思い、また有頂天になる。

本当に単純で、馬鹿な俺。でも…。でも、本当に、運命の出会い
だったよね…。瑞希。

3 わ・か・れ・た！

その日は、浮かれててなかなか、仕事かはかどらず、結局終わったのは翌朝の5時。

「徹夜か。ふわ〜。でも、少し寝れるかな…」
会議室のソファで、ほんの少し寝る。

「おお、圭介。やっぱ、昨日泊まったのか？」

2時間くらい寝れたかな？社長が会議室で寝てる俺に気づいて、声をかけてきた。

「あ…。おはようございまふ。ふあ〜〜」

「これ、サンドイッチ。こんなこともあるかと思って、買ってきたぞ」

「あ！すんません！」

応接コーナーに移り、サンドイッチと缶コーヒーで、朝食を済ます…。っていうところに、瑞希が来た。良かった。元気になったんだ！

「もう、大丈夫っすか？」

なんか、俺の顔見て驚いてる。やばい。顔も洗ってなかったっけ…。よだれとかついてる…？

「寝てないの？」

「いや、寝ました。2時間くらい…」

「ええ〜〜？」

ああ、会社で寝たりしたのを驚いてるのか…。

「こんなのざらですから、そんなにびっくりしないでください」

「あ、じゃあ、これからお弁当とか作ってこようか？」

まじ？瑞希の手作り？って。そこまで甘えるわけにいかないだろ…。

「いえ、いいっす。適当におなかすいたら、コンビニに行くから」

「……」

あ、黙ってる。気悪くしたかな？

「俺、顔洗ってきます…」

顔を洗ってる間、考えた。これが彼女とかなら、お弁当も作ってもらっても、全然おかしくないけど、瑞希は、俺の従兄弟の彼女なんだ…。だよなあ…。はあ…。

あ、また、これ考え出すと、暗くなる。顔洗って、すっきりして、しっかりしろ！俺。

デスクに戻って、仕事を始めようとしたら、瑞希が話しかけてきた。

「圭介も1日たつと、ひげはえるんだ…」

え？ひげ…？

「それ、俺が子供だとも思ってたってことですか？」

「あはは。違うけど、あまりひげ濃くないから」

ひげが濃い方が、好きとか？

「はやそうと思えば、はえますよ。もっと、こつ…」

「似合いそうにないよね」

あ、そうなの…？

「そうすか…。じゃ、ひげはやすのは、やめとこつ…」

あああ。俺、もう瑞希の言葉一つ一つに振り回されてるじゃん。

パソコンに向かって、頭ん中ぐるぐるしてるのを、全部消し去って、仕事に集中した。

あ、まただ。俺がパソコン打つてると、瑞希が俺のキーボードたく手を時々、見てるんだよね…。ちよつと、緊張する。

それから、瑞希はパソコンをぼろろってながめて、しばらく何もしない…。いったい、何を考えているんだろう？何も考えてないのかな。それとも、仕事のこと？

あ！俺のキーボードを打つ速さに、見とれてるとか？ああ、私もこんなふうに、打てたらいいな〜とか…？

うーやべー思い切り間違ってるよ。何を打ってるんだ…。ああ、仕事に集中、集中！

あ、瑞希も仕事に集中しだした。パソコンを軽快に打ち始める。真剣に、パソコンの画面を見てる瑞希の目、好きだな。無表情になるんだけど、その顔が綺麗なんだよね…。髪をかきあげる仕草は、すげえ女っぽい。う、やられた〜！
って、ばつかじゃないの？俺…。なんて、一人であほなことを思っていると、瑞希の手が止まった。

「熱、下がってよかったですね」

「うん」

「病院行きましたか？」

「ううん、寝てただけだよ」

「ああ、なんだ、茂にいの病院にでも行ったかと思った」

「小児科でしょ〜。私子供じゃないし…」

「はは、じゃ、俺が風邪ひいたら、茂にいのとこ、いかなきゃ、子供だから」

「ふうん、子供だって自覚してるんだ」

「え？やっぱ俺、子供〜？」

「くすくす…」

あ。それ、その笑い方がすげえ、好き…。

ああ、でもやっぱ、瑞希にとったら俺って、子供？

「瑞希さん、いくつくらい年下でもOK？」

「へ？」

「なんでもない…」

やべえ。俺、何聞いてんの？口走ってんの…？

もし俺が、瑞希のこと好きって言ったらどうするかなって何回か、空想したことがある。

「ごめんね、茂さんがいるし…」

って言って、困惑した表情をする瑞希。

「何冗談言ってるの？まだ、子供のくせに！」

って、笑い飛ばす瑞希。それが、

「冗談はやめてね」

って、くすくす笑う瑞希…。どれをとっても、いい結果の空想じゃない。はあ…。そんな空想をしては、勝手に落ち込む俺…。

「私も、圭介のことが大好きだったの！」

ないない。ありえないっつゝの。そんなことがもしあったら、天と地がひっくりかえるんじゃない？俺、嬉しさのあまり、おかしくなっちゃうかも…。

6時、定時にだいたい、瑞希は仕事を終える。

「おつかれっす」

正社員の俺らは、今日はまた、夜中近くまでかかりそうだ。眠い目をこすり、パソコンに向かう。ああ、そういえば、昨日非常食のカップラーメン食っちゃったし、何も無いな…。

「あ！」

瑞希、今帰るところじゃん！

「コンビ二行くんで一緒に、いいですか？」

「うん」

やった…。って何がやったのかわかんないけど、まだ、一緒にいられるのが嬉しい。

エレベーターに乗り、あ、昨日風呂はいつてないじゃん、着替えもしてないしって、いきなり気になった。

「俺、汗臭くないですか？」

「大丈夫、圭介の匂いはするけど」

え？俺の…？

「なんすか？俺の匂いって…」

「わかんない」

わかんないって…。俺、なんか匂う？クンクン、嗅いでみたけど、なんか、汗臭いだけで…。やっぱ、汗臭いんじゃない？

「臭いすか？」

「ううん、前にね、テレビ観たけど、10人くらいの男性が1日Tシャツを着て、それをそれぞれ、ビンの中に入れるの。それを10人の女性が匂いを嗅いで、1番いい匂いのTシャツを選ぶんだ」

「げ？くさそ〜」

「それが、いい匂いがするって言うんだよ。草原のような匂いとかって…」

「へええ！」

「DNAが近い人は、臭く感じて、遠い人は、いい匂いがするんだって」

「まじっすか！あ、じゃ、俺が臭くないなら、遠いってことじゃないっすか？」

「そうだね、そういえば、草原の匂いがするよ」

「え？まじっすか？」

「うそ」

……。って、なんだよ〜〜〜〜！ぬか喜び？俺…。

「なんだよ、喜んだのに」

「あはは、草原の匂いって言われて喜ぶの？」

「そうじゃなくて、瑞希さんと相性がいいのになって…」

瑞希、やっぱ、ずれてるよ…。

「より遠い方がいいんでしょ？強い子孫残せそうじゃないっすか…」
「くす…」

あ、笑った…。

「圭介は、どんな相手でも強い遺伝子残せそうだよ」
カク…。何それ…？俺ってどんなやつよっていうか、誰とでもって、なんかひどくね？

さつきから、また、落ち込んでるよ、俺。でも、そういうのを隠して、明るくするいつもの癖、出るんだよね。だけど、さすがにへこむことを、瑞希はズバズバ言うてくる…。

「圭介の好きな人は、圭介のこと…」
「え？」

ドキ！好きな人？

「その人も、いい匂いがするって言うてくれたらいいのにね」
何…？それ…。ああ、クラッてきた。明るくするのも、限界がある。

「うちの近くに住んでるって言ったでしょ？その人に会いに来たりしないの？もう…」

「もう行つてません、っていうか、一回だけっすよ、行つたの」

「そうなんだ…。会えたの？そのとき」

「いえ、ずっと待ってたらまじ、ストーカーですよね」

「じゃあ、会えずじまい？」

瑞希、やっぱり瑞希のことだって、わかってないんだ…。

「いいんです。もう…」

「いいの？あきらめたとか？」

「いえ、会えてるからいいんです、もう…」

ここまで言ったら、いい加減気づくかな？って、いきなり恥ずかしくなつて、その辺の雑誌を適当に取り、ペラペラめくつた。

瑞希は、急に黙りこくつた。私のことかなとか、気づいたのかな…？

レジで支払いを済ませると、外で待つてた瑞希が、

「じゃ、仕事頑張って」

と、ちよつとクールにそう言った。そして、くるりと後ろを向き、さっさと歩いていってしまった。

あゝあ。これ、気がついて、わざと、冷たくしてたり、知らない振りしてたりしてるんじゃないかな…って、また、俺の心は沈んでいった。

土曜の夜。俺にとって、いきなりのビッグチャンスが訪れた。ビッグチャンスっていうかなんていうか、すげえ、嬉しいことだ！

親父が夕飯も終わって、風呂から出て、ビールを飲みながら、ダイニングでおふくろと話し出した。俺は、何も用がないと、リビングのソファで、ねっころがってテレビを観てることが多い。部屋に行ってもテレビもないし、家でまで、パソコンに向かうのも嫌だったし…。

「あら…。残念だね。姉さんがっかりしてるわね」

ピク！俺の耳が確実に動いた気がする。それまで、テレビの方ばかりに夢中になり、親父とおふくろの会話は入ってこなかったけど…。今度はテレビでなく、親父たちの会話に耳が、集中した。

「理由はなんなの？茂、何て言ってた？」

「結婚観が違うとかなんとか…。まあ、きつと、断られたんだろうな。それも、仕方がない。何しろ、しょっぱなのデートからして、すっぱかしたんだからな…」

やっぱ、茂にいいこと！

「別れたの?!」

思わず、でかい声で、聞いてた。

「あ、圭介、あまりこれは人には言うなよ」

「うん。言わない。で、別れたの？茂にいい」

「うん、駄目だったようだな。まあ、見合いをする前から、駄目に

なるだろうって思っではいたけど……」

っていう、親父の言葉を半分も聞かないうちに、俺は有頂天になり、自分の部屋へと駆け上がった。

別れた！なんだよ！瑞希、フリーになったんじゃないか！！！障害はもうないよ！ガンガンにアタックしても、いいんじゃない？

いや、待てよ……。でも、12歳も年下の俺なんて、やっぱ、なんとも思ってくれないか？

いや、待てよ……！そんなの決め付けてもしようがないんじゃない？当たって砕けるだよ。こんなチャンスねえだろ？

そうだ！よっしゃ……！明日は、瑞希をデートに誘うぞ……！

すげえ張り切って、ワクワクしたり、また、不安になったりしながら、その夜はなかなか寝れなかった。

朝、ドキドキしながら瑞希に電話をした。

「もしもし……」

「あ、俺！」

うつ、ハイテンションだ俺……。でも、瑞希の反応が鈍い……。

「寝てた……？」

って、瑞希に聞くと、

「早いね……」

って答えが、返ってきた。早い？でも、もう8時過ぎてるし……。早かったかな？

「今日、暇してますか？」

「はい、暇してますよ」

「ですよ」

そうじゃなきゃ、困る！

「ドライブしませんか？車で迎えに行きます」

ああ、言っちゃったよ。俺！

「え、うん、いいよ」

「じゃ、10時でいいですか？」

「はい。こっちも支度したらそのくらいの時間になるかな」

やつり~~~~！デートじゃん！

急いで、バスルームに行く。昨日風呂に入っただけど、一応またシャワーを浴びる。髪を整え、歯を念入りに磨く。いや、別に下心はない。

うん。いきなり、茂にいと別れたからって、俺、そこまで、せめまくるつもりもない。って自分に言い聞かせながら、内心、ドキドキしてる。

Tシャツにパーカーをはおう。あ、でも、もう少しあれかな、大人っぽい服がいいかな。って服をあれこれ出したけど、どれも、似たようなものだった。まさか、休みの日にスーツはないだろうし…。

ま、いつかって時間に間に合うよう、慌てて車に乗り込む。

「え？圭介！どっか行くのか？」

「ああ、わりい、兄貴。車今日、使っよ！」

「ま、いいけどさ…。俺は仕事でこもるし…」

「んじゃ、行ってきます」

俺の車は、兄貴の正吾と共有している。早く自分だけの車が欲しいけど、でも、買っても駐車場がない。

今日は、どうどうと瑞希の家に行ける！すげえ、ドキドキしてる、っていうか興奮状態なんじゃね？これ…。

デート！やっぱ、海っしょ！ドライブって言ったら、海しかないっしょ！

いつか、犬とか連れて、好きな子と海を散歩…ってなんとなく妄想してたことなんだよね。

瑞希と、海。犬もいたら最高！

瑞希の家に着いた。さすがに緊張する。バックミラーを見て髪を直し、車を降りて、チャイムを鳴らす。

「は〜い」

あ、え？男の人の声？お父さん？にしては若いような…。

ガチャ…。

「え？」

誰？起きたての、ぼさぼさ頭に、よれたスエット…。

「おはようございます。俺、いえ僕は柴田瑞希さんと同じ会社の、榎本圭介といまして…」

「ああ、おはよう」

ほ…、瑞希だ。瑞希が奥から顔を出した…と思ったら、ワンワン！え？犬…？奥から瑞希を追い越して、犬がやってきた！
うわ…！ドッスン…！それも、いきなり抱きついてきた。

「あら、まあ、クロちゃん。すごい喜びよう」

あ、お母さんかな。瑞希にちよつと似てる…。

「クロっていうんですか？すげえ、可愛い」

ボーダーコリーだ。黒いからクロか…。わかりやすい。俺は、可愛い…って思わず、ぎゅって抱きしめてた。

3年前にうちで飼ってた、柴犬が死んで依頼、犬を飼ってなかった。なんか、犬臭さも、あつたかさも、久しぶりだ。

「俺、散歩連れてっちゃ駄目っすか？今日ドライブ連れてったら駄目っすかね？」

「あ、いいけど、海とか好きだし、こいつ」

名前聞いてないけど、多分、瑞希の弟だろうな。そう言ってくれた。

海！犬と、瑞希と、ドライブ！すげえ！！！！

「じゃあ、クロ借りますね。あまり遅くならないうちに帰ります」

「今日、外でバーベキューするのよ、よかつたら一緒にどうかしら」
ええええ？バーベキューを家で？あ！すげえ！

「あ、ウッドデッキあるじゃないすか！」

そっぴいのも、すげえ、あこがれてたんだよね！うちは、家の中でこじやれた食事をするけど、（何せ、母親が料理教室の先生だし…）でも、こっぴい庭で、バーベキューとかつてこっぴいは、したことがない。嬉しすぎる！

「はい、早めに帰って、俺、手伝います」
俄然、張り切るぞ！

「それじゃ、クロ行こっか！」

クロは、尻尾をぐるぐる回して、喜んで車に乗った。俺にすっぴになつてゐる。可愛いよな〜。…って、後ろを振り返ったら、あれ？瑞希がいない？

「あ、すみません。瑞希さんもお借りします」

「ぶぶ〜」

え？弟さんが大笑いをした。なんで？あ。借りるって、何言ってるの、俺。やべえ…

「えっと、あの瑞希さんとドライブ行ってきます。いいでしょうか

…？」

「ぶぶっ」

え？なんで、お母さんまで笑う？俺、また変なこと言った？

「榎本部長の息子さんなんだって？部長によくお伝えください」

ああ！お父さんだ！なんか、優しそっぴい人だな〜。

「はい」

でも、すげえ緊張。これ、瑞希の一家がそろってることかな

…？

「行ってきます！」

車に乗り込んで、発進した。バックミラーを見ると、みんなが手を振って見送ってる…。

「素敵な家族ですね」

「圭介がいたからじゃない？」

「え？」

「それか、もしかすると、みんなで気を使って…」

「それ、茂にいのこと？」

「あ、やっぱり部長から聞いた？」

「はい、昨日の夜」

「それでまた、部長から頼まれた？」

「何をですか？」

「今日のドライブ」

ええ？親父に言われて来たとか思ってたの？

「頼まれてじゃないですよ。俺の意思で決めたことです！」
きっぱりと言ってみた。

「なんで？」

「なんでって…」

ここまで、言ってもわからないの？

「もしかして、落ち込んでると思っただ？」

「…はい」

って、いや、そうじゃないだろう、俺。

「で、慰めようとか、元気出そうとか…」

ああ、違っって！

「違いますよ、これはチャンス到来って、デートに誘ったんじゃないんですか！」

ああ、ここまで、言わないとわかんないのかな？

「あはははは、何それ…」

って、笑われてるし、落ち込むな…。

あ！落ち込んでなんていられないじゃん。

「海だよ！海！」

海が見えてきたよ！

「すげえ、海だ。やった、犬と海を散歩だよ！」

それも、瑞希と一緒にだよ！すげえ~~~~~！

超ハイテンションな俺！横を見ると瑞希が、少しクールに笑っていた。あ、やべ…。またやった。子供だっと思われた…？

4 海を瑞希とデート

車を止めた。うつ…。やっぱり、いてもたっても、いられない。

靴を脱ぎ捨て、Gパンの裾をまくり、クロを連れて走り出した。

クロもすげえ、喜びよう！

「ああ、気持ちいい～～～ってクロ！速すぎ！」

さすがに、犬！追いつけない～～～！

クロが波うち際まで、走っていった。バシヤン！しょっからかったのか、ペッペッて吐き出していた。

「あははは、クロ、ばっかじゃん！」

後ろを見た。瑞希が、石段のところに座って、俺とクロを見ている。今日の瑞希は、これまた、すげえ可愛い！海が似合ってる。

真っ白なブラウスに、膝丈のジーンズ。瑞希の足首って細いつて車に乗ってるとき、ドキドキした。

なんか松田聖子の歌で、あったよな。なんだっけ…？

ハアハア、ゼエゼエ、息が持たなくなってきた。それは、クロも同様。

水…！瑞希、さっき、自販機で水買ったよな…。瑞希のところへクロと行くと、瑞希がクロに水をあげた。

ああ、水…美味しそう。

「プツ！」

「え？」

今、笑われた？俺…。

「はい」

瑞希が、水のペットボトルを渡してくれた。待ってましたとばかりに、ゴクンゴクン、飲んだ。

「うつめ～～～！」

瑞希が、水を飲んでる俺を見てた。なんか、また、子供っぽいと

か思ってたのかな？

「何？」

いや、何って言われても、あ、そうだ。

「松田聖子の歌で、こういうのなかったですっけ？」

「え？」

「白いパラソルとかっていう歌」

「古い歌だね。知ってるの？」

「はい、おふくろがカラオケで歌うから。瑞希さん、今日パラソルとか似合いそう」

「うっっん、日傘考えたんだけどね…」

「帽子とかも似合いそうですよね。白とか、麦藁帽子とか」

「麦藁？」

「可愛いじゃないですか。似合いますよ。瑞希さん、可愛いもん」
「つて、俺、何言っちゃってんの？瑞希にまた、笑い飛ばされるよつて、あれ？笑わないの？」

「つていうか、あれれ？なんか、赤くなってるじゃない？うそ。照れてる？もしかして…。やつべっべっ。超可愛すぎるでしょ。それ…。そんな反応されたら、俺、どうしたらいいんだよ？」

「思わず、くるって、海の方を向いた。」

「やばいっすよね…」

「つて、わけもなくつぶやいてた。そんなの聞き逃すって思ったのに、何が？」

「つて、瑞希は聞いてきた。うっっわっ。そこはスルーして欲しかった。」

「なんていうか、その…」

「なんて、説明したらいいんだ？」

「すげえ、嬉しいっていうか、俺、はしゃぎすぎててやばいっていうか…」

「？」

瑞希の顔を見たら、わけわかんないって顔をした。ああ、わかんないのかな、俺が瑞希と一緒にいて、すげえ喜んでるの…。

「瑞希さんて、絶対に鈍いですよね。どっか抜けてる」

「ええ？悪かったわね。そっちこそ、いつもやばいやばいって何がやばいんだか、わからないわよ」

「俺があれです。やばいって言ったときはあれです…」

「あれって、何？」

だ〜か〜ら〜。察してよ。

「だから、やばいときです」

「どうやばいの、なんでやばいの、何がやばいの」

ええ〜？

「ん……。と……」

瑞希さんいて、嬉しいっていうか、嬉しすぎるっていうか、すげえ好きだっていうか…っていうのを、口の中だけで、もにもよにと言った。

「え？」

聞き返してきたけど、また、言うつもりはなかった。

ドカ…って座って海を見た。っていうか、照れ隠しだ。

「海って6月ですっけ、解禁」

「そうだったかな」

「泳ぎに来ませんか？」

「…私、かなづち」

「え？」

「だから、泳げない…」

「まじっすか？」

瑞希、それ、可愛すぎる！なんで、クールな大人のところがあるのに、そういう、可愛いところがあるんだよ。そういうギャップに

弱いんだよね。ああ、やべえ…。やばすぎて、なんか、また照れ隠しに大笑いをした。

でも、そんなに可愛いのに、なんで一人身なんだろう。ふと、不思議になった。

「なんで、今まで一人身なの？」

なんか、以前すげえ好きな人がいて、ひきずっているとか、そういうのかな？それとも、すげえ理想が高いのかな？それとも？

「なんで、茂にいは、瑞希さんのことふっちゃったのかな？」

こんなに、可愛い人と見合いできたら、俺だったら絶対ふらない…ってか、あ、そっか。瑞希がふったのか？

「あ、でも、そっちの方が、俺にとっては、ラッキーだけど…」
って、また何を言ってるんだ、俺…。

あれ？何も反応がない…。俺、あほなこと言った？

しばらく下を向いたまま、瑞希は黙っていた。

「なんで黙ってるの？」

なんか、すごい不安になってきた。

「ね。なんで？」

思わず、瑞希に近づいて顔を覗き込んだ。

「わ！」

瑞希が驚いて、顔をあげた。嘘！泣いている…？なんで？俺、泣かせた…？？？

「ごめん、俺…」

頭の中フル回転中だ。どの俺の言葉で、傷つけたんだろう。茂にいのこと？

「ラッキーなんて言ってごめん…」

馬鹿じゃね？の、俺。俺にとってラッキーでも、瑞希にとつちや、何も、ラッキーなことじゃないじゃんか。

「いいよ、冗談言つて、励ましてくれようとしてるんでしょ？」

ええ？なんで、そんなこと言う？なんで、そんな簡単に許すの？俺、励ますどころか、喜んでたんだよ？

「俺、そういうところが鈍いって言うか、相手の気持ちも考えないで、自分の言いたいことだけ言っちゃうところがあつて、知らないうちに傷つけて。素直すぎるとか、正直すぎるとか、無邪氣すぎるとか、元かのに言われた」

「そこが圭介の、1番いいところなの？」

「え？」

「私は、そういう圭介の、無邪氣さとかに救われてるよ」
まじで…？

なんか、びつくりした。そんなことを言ってくれるなんて、思つてもみなかった。胸の中がすんげえドキドキした。

「無邪氣で、素直で、かわいい、人懐こくて、うん、犬みたいだね」

「あ、え？それ、ほめてんの？」

「ほめてるでしょ〜」

瑞希が、思い切り笑つた。

「あ、よかった、笑つた」

俺のこと、子供つて思つてるかもしれない。でも、瑞希は、俺のこと、嫌つたりはしてない。そんなことがはつきりと、わかつた。

俺の、1番いいところつて言つてくれた。その無邪氣さに救われてるつて言つてくれた。俺は、瑞希の何か、役に立ってる？支えとかになることもあるのかな？

なんだか、心の奥底が、喜んでいた。好きだつて言われるより、なんか、このままの俺を、そのまま瑞希は見てくれてて、ちゃんと認めてくれてるつてそんな気がして、すごく嬉しかった。

俺は、瑞希への思いが、今までとは違った思いに変わつていつてることに、気がついた。今までは、恋だった。ときめいて、ドキド

キして、俺のことをどう思っているのか、そんなことばかり気になっていた。でも、瑞希が、俺のことを認めてくれてるってわかったら、なんだか、だんだんと気持ちが落ち着いていった。

クロと、瑞希と海に見える和食屋さんで、昼ごはんを食べた。犬もOKの店で、クロは大人しく俺の足元になっところがつていた。

俺は、どうも話しながら食べるっていうのが苦手で、食べる時には、食べることだけに集中してしまう。食べてるものを、味わいたいっていうのがあるのかな？

瑞希は、黙って、俺に合わせて、静かにご飯を食べる。時々、箸をとめて、俺の食べるところを見ていた。

なんていうか、がつついてるのが、幼いつて思ってるのかな…とも思ってたけど、でも、もう、子供って思われるのが嫌だとか、そういうのは、なくなっていた。

ふと、視線が合った。前ならすぐに瑞希は目をそらしてたけど、今日は、そのまんま、俺を見ていた。その目が、やけに優しく、あつたかくつて、俺のほうが、照れて目を合わせられなくなった。そして、ふと、思い出した。さっき、海で俺を見てたときも、こんな目だった。あつたかい、俺のこと包み込むような目だった。食べ終えて、海を見て、それから、瑞希を見た。黙って、瑞希を見てた。なんか、あつたかい、優しい気持ちになった。なんなんだろう？これ…。

店を出ると、瑞希が、

「コーヒーが飲みたいな」

と、言うので、クロと一緒に、そのへんをぶらついた。駅のほうに行くと、マックがあつた。

「あ、ここなら、外にイスがあるから、クロがいても、大丈夫かな？」

そう言つて、瑞希は、マックにコーヒーを買いに行った。それから、いすに座つて、のんびりと、コーヒーを飲んだ。なんだか、瑞希とこうしているのが、とても自然のことのように思えて、いつの間にか、俺は敬語を使わなくなつてた。

海に好きな子と、犬連れて来るつて夢が叶つたと言つと、私も夢が叶つたと瑞希が言つた。

「俺との、デート？」

茶化してそう言つと、あつさりと違つて否定された。

長年の夢らしいけど、いったいどんな夢なんだろう。内緒、そのうちに教えると言つてたけど、なんで、今、内緒で、そのうち教えてくれるんだろうか…。

すごく気になつたけど、もう一つ、気になつたのは、俺が、

「好きな子と、犬連れて海に来る」

の、「好きな子」のこと、わかつてるのかなつてこと。あ、そうだ。

瑞希、

「半分叶つたね」

つて、言つてた。半分つて何？ああ、そこんとこ、聞き逃してた…。

瑞希の家には、日が沈み、辺りがうつすら暗くなつたところに、着いた。

庭のウッドデッキには、すでにバーベキューが準備されていた。

ああ、俺、手伝うとか言つて、なんもできなかったな…。でも、焼くのはしっかりと手伝おうと、張り切つて焼いた。

「圭介も、飲めよ」

瑞希の弟さんの修二さんが、やたらと酒を勧めてきた。

「でも、車なんで」

「泊まつてけ、泊まつてけ、明日の朝1番で帰りゃいいじゃん」

ああ、どうやら、断れそうもない…。ビールを少しだけ飲むことにしようかな。何せ、あまり俺は酒に強くない。過去、会社の人た

ちと飲んで、何回記憶をなくしたことが…。

だけど、修二さんはすごく楽しい人で、いつの間にかそのペースにはまり、一緒のスピードで、同じくらいビールを飲んでいた。

いつの間にか、お父さんも、お母さんもリビングからいなくなっていた。瑞希もいない。自分の部屋にでも行ったのかな？

「圭ちゃん、お風呂はいつたら？今日は海で、よこれちゃったんじゃない？」

お母さんが、バスタオルを持ってやってきた。…圭ちゃん？親にも呼ばれたことがないので、なんかくすぐったかった。

「あ、はい。じゃ、入ってきます」

「え。お前そんなに飲んでて、入れんの？」

「はい、すげえ、しっかりしてるんで、平気です」

いや、足元は、すでにふらついてた。でも、まっすぐに俺は歩いてるぜって自分で思い込みながら、歩いてた。こういうときには、もうすでに、かなり酔っているときだ。

バスルームの前に、立った。ちよつと、頭がふらつてしてたけど、ま、大丈夫だろうって、ドアを開けかけたとき、いきなり、ドアが勝手に開いた。

「わ。びつくりした！」

瑞希だ。パジャマ姿だ。かわいい……。ああ、すっぴんだ。すっぴんもかわいい……。っていうか、もう少し早くに俺、ドア開けてたら、やばかったんじゃないかと、一瞬、もう少し早くにドアを開けるところを、妄想してた。

ああ、パスパス！そんなの妄想したら、俺、絶対に風呂でゆであがる…。

妄想をパツパツって頭から追い出して、きりりとした気持ちで、風呂に入る。でも、

「ああ……、さっきまで、瑞希が入ってたんだよね！」

って、デレデレになる。風呂中、瑞希の髪の毛の匂いがした。きつと、瑞希が使ってるシャンプーの匂いだ。

「これかな？」

ちよつと、高級そうなシャンプーの匂いを嗅いでみた。

「あ、これだ！」

思わず、そのシャンプーで自分の髪を洗った。洗っていると、瑞希の匂いで包まれ、それだけでドキドキした。

お風呂を出て、2階にあがった。階段を上がってすぐの部屋からは、大きな修二さんのいびきが聞こえた。ってことは、瑞希の部屋は、こつちかな？

「あの…」

声をかけてみた。

「おやすみなさい」

中から、瑞希の声がした。うゝゝわゝゝゝ。なんか、それだけで、ドキドキする。

「うん、おやすみ」

って、言っただけ、どうにも瑞希の顔が見たい。

「今日は、すげえ楽しかったです」

ドア越しに話をした。開けてくれないかって期待しながら…。

「うん、私も…」

ドアは開かなかった。

俺は、そのまんま、もう一つのドアを開けた。お兄さんの部屋らしいその部屋は、綺麗に整頓されていた。

ベッドに横になる。本棚には、いろんな本が並んでいた。きつとお兄さんのだ。本の題名だけを目で追っているうちに、知らない間に俺はぐうすか、寝ていたようだ。

5 幸せな夢を見た

朝…。

ドンドン！！

「起きて、圭ちゃん。早くに起きて、家に一回帰るんでしょう？」

って、お母さんの声で目が覚めた。ぼけ～ってしながら、しばらくベッドでぼんやりした。

あ…。なんかすげえ幸せな夢見てた。俺…。そして、夢を思い出した。すげえ、ハッピーな夢だ。

瑞希が俺のことを、好きだって言ってる。俺も、同じ気持ちでいることを瑞希に告げてた。ドキドキしながら、俺は瑞希に告白してた。

「ああ～～～～。夢か～～～～」

夢でも、嬉しかった。

一階におりた。瑞希はまだ、いなかった。

「圭ちゃん、トーストでいいかしら？あと、スクランブルエッグと、目玉焼き、どっちがいい？」

「あ…。目玉焼き…」

まだ、頭の中がぼ～ってしてる。少し、ゆらすと痛い…。二日酔いだ…。

トーストを食べ始めると、瑞希がダイニングに来た。

「おはようございまふ…」

トーストにくいついたまま、挨拶をすると、

「おはよう…」

と、返事をしたが、そのまま目も合わさず、瑞希は席に座った。

「ぐ～～～～～わ～～～～～」。あつまいて～～」

修二さんが、ダイニングに来た。そうだよな、あんだけ飲んでりや、二日酔いにならないほうがおかしいよな。

瑞希が、トーストにジャムをぬって、食べ始めた。それから、コーヒーを飲む。なんつか、それだけの瑞希の仕草に、つい見とれてしまう。

ああ、結婚とかして一緒に住んだら、いつでも、こんな光景目にするんだ、俺…。

「圭ちゃん、うちの子になっちゃいなさいよ」

と、いきなりお母さんが言い出した。

「養子にでもなるんですか？」

ああ、そうすりゃ、瑞希のこういう姿、いつでも見れるな〜、ってあほなことを考えながらそう答えた。

「違うわよ。圭ちゃんが瑞希と結婚するの。そうしたら、息子になるわけ」

ぶ〜。瑞希が、コーヒーをふき出した。俺も、おなじタイミングで、食べてたオレンジが、器官の方に入ったかも。

げぼ、げぼ…！なんつう冗談を言うんだ。どう答えたらいいんだ。どうリアクションをとったらいいんだ。

「そんなのありえないっ〜の。なあ、圭介」

修二さんが、あきれた顔で、そう言った。瑞希はというと、黙っていた。そこへ、お父さんが来た。

「おはようございます」

「あ、おはよう」

お父さんはいつも、温和な感じの優しい静かな、印象がある。でも、怒ると怖いんだろうな〜…。

「圭ちゃん、昨日は寝れた？」

お母さんが、聞いてきた。

「はい。寝ました」

「それは良かった」

「あ、でも髪乾かさないうで、寝たみたいで、すみません。シーツと

か枕、ぬらしちゃったかもしれない」

さつき、トイレに行って、出たところにある鏡で見たら、髪の毛爆発してた。ああ、この寝癖からして、濡れたまんま寝たなっていうのがわかった。

「俺、風呂はいったんですよね。で、髪洗ったんですよね。そのへんは覚えてるんです。でも、そのあとの記憶が無くて…」

「ええっ?!」

すごい大きな声を、瑞希があげた。

「どうしたの?」

お母さんが、その声にびっくりしてた。俺も、びびった。

「風呂場の前で、会いませんでしたっけ?」

瑞希に聞いてみた。その辺はなんとなく、覚えてる。

「会った…」

瑞希が、そう答えた。その辺、ちゃんと思ひ出さないと、やばいんじゃないかって、そんな気がする。

確か…。ああ、そうだ。風呂はいろいろうって思ったら、ドアが開いて、瑞希が出てきた…。あ、そうだ。もう、パジャマだった。で…。で…。風呂に入った。

瑞希の匂いがした。そうそう。それで、俺、喜んで…。で…?

そのあと、部屋に戻った。いや、その前に瑞希におやすみって言ったような気がする。

…あれ? 瑞希の部屋、なんで、俺知ってるの? すぐ落ち着いてる部屋。ああ、瑞希がお休みって言ったとき、開けてくれて、それで、挨拶したんだっけか?

何か、大事なことが、ぼこって抜け落ちてる気がする。だけど、幸せな夢を思い出し、また、ぼこってした。

って、そんなぼこってしてる場合じゃない。慌てて髪をとかし、顔を洗い、車に乗り込む。だけど、車の中で、また、夢を思い出す。

なんて言ってた？夢の中の瑞希…。

そうだ、すごく好きな人がいるって言ってて、俺が、
「それ、俺だよね」

って、言ったら、コクンってうなずいたんだ。って、ずいぶん、
自意識過剰な夢じゃね？

ま、夢なんてそんなもんか。それで、俺も、瑞希が好きって、言
ったんだよ。って、あんまり覚えてないけど。そうだ、最後にキ
スをしようとしたんだ…。で…？目が覚めたのかな？

ああ。くそ、いい夢だったのに、なんでそこで終わるわけ？

道が混んでいて、家に着くのが遅くなった。急いで、スーツを着
て、ネクタイを結ぶ。

「圭介、ご飯は？」

「ああ、食べてきた。んじゃ、行ってきます」

おふくろがなんか、言ってた気もするけど、聞いている暇はない。
駅までダッシュ。電車に乗り、横浜に着き、またダッシュ。うっ、
くらくらする。二日酔いだよ…。

10分遅刻して、会社に着く。そおっと入ったけど、やっぱり、社
長に見つかった。

瑞希はもう、来ていた。なんか、すごい涼しい顔で、席に座って
た。

その日の午後、瑞希が、昼から戻ってきたらいきなり、聞いてき
た。

「あのね、昨日のシャンプー」

「はい？」

「本当に高いの。美容院でしか売ってないのよ」

……？

「なんのことですか？」

「え？だから昨日圭介が使った私のシャンプー…」

「え？俺が？使ってないっすよ」

何言っちゃってんの？瑞希。

「髪から、匂わないかな？」

瑞希の…？じゃないよね。

「誰のですか？」

「いや、君の髪から、その…」

「自分の髪の匂いなんてかげないっすよ。短いし」

「え？そうなの？」

何を言っちゃってんの、瑞希……。

「だいたい、かいでる男がいたら変態ですよ」

…俺の、髪の匂い？

しばらくして、トイレに行くふりをして、廊下に出た。ブルブル

ブル！頭を左右に思い切り振った。

クラ…。

「う、頭いて…」

でも、その場に残る、瑞希のシャンプーの匂い…。あれ？

……。ああ！……！思い出した。俺、使った！瑞希のシャンプー！
が……ん。

っていうか、それを瑞希、知ってんの？あれ？いつ？いつわかった？俺の髪から匂ったの？

それから、なんとなく瑞希が冷たくなった気がする。いや、俺の気のせいかって思ったりもしたけど、話し方がつつけんどんだった
り、わざと、冷ややかに言ってきたり…。

「なんか、嫌われてる？俺…」

瑞希のシャンプー使ったから？まさか、それだけのことで、怒らないよね…。

それとも、それとも…？なんか、とんでもないことをしてしまっ

たのか。記憶がないその時間帯。俺は瑞希を怒らせるようなことをしてしまっただんじやないだろうか？

どうにか思い出そうとする。でも、思い出せない。だけど、鮮明に思い出すのは、瑞希の部屋。部屋…。入ったのかな俺…。

くっそ～～～！思い出せ！俺。って、頭を抱え込んで、無理やり思い出そうとしても、思い出すのは、夢のほう。ああ、幸せだったよな…。って、夢だから、それ！

瑞希に、冗談を言ってみても、

「ふうん」

って、返ってくる。目が合うと、あからさまに避ける…。

や、やばいんじゃないの？なんで、怒ってるの？俺のこと、避けてない？何か、やばいこと俺しちゃった？

何回も聞いてみようとした。でも、勇気が出ない。嫌いだとか言われたら、俺、それこそ、立ち直れそうもない…。

もう少し様子を見よう、そのうちに、瑞希もとに戻るかもしれないと、思っているうちに、6月も半ばになった。

「契約社員にもボーナスが出るそうですよ」

さすがに、瑞希もボーナスの話は喜ぶよね。

「あ、そう」

「え？嬉しくないんですか？」

「……」

なんで、なんで無言？あああ、どうするよ、俺…。

あ！そうだ！ボーナス出たら、奮発して食事誘つか！それだ、それ！

ボーナスの日、早速銀行でお金をおろした。どう誘おうか…。今日はどうも、早くに終わりそうもないから、明日か、あさってか…。そんなこと考えながら、トイレから出てくると、瑞希がエレベー

ターを待っていた。ああ。チャンス到来！

「今帰り？」

「うん」

「ボーナスでたし、今度一緒にご飯でも…」

「ああ、柴田さん、待たせたね」

…え？社長？

「笹おじさんとお出かけっすか？」

あ…。あまりの驚きで、社長を笹おじさんって呼んでるよ。俺。そう、社長は親父の大学時代の後輩で、よく、家に遊びに来てて、笹おじさんって呼んでたんだ。

「ああ、食事だね」

ふ、二人でかよ…。

「今度、俺も連れてってください、社長」

「ああ、また飲みにも行くか」

ああ、またわざと、明るくしてるよ、俺…。

「じゃ、お先にな」

何が？二人で食事に行くのが？

そうじゃん…。笹おじさんも独身じゃん。俺よりも、釣り合ってるんじゃない？

「はい、お疲れ様です」

さすがに、声が沈んだ…。ガク……………。

いろんな悪いことが、頭の中をぐるぐる回りだす。パソコン打つてても、今頃、社長と瑞希がどんな話をしているのが、すごい気になる。

俺を避けてる理由が、社長ってわけないよね。俺の気持ち知って、わざと、避けてるんじゃないよね。

ああ！ちきしょう！思い切りそういう考えを、頭から追い出しては、仕事に集中する。

時計を見ると、8時半を過ぎてた。6時半には出てたし、もうご飯終わってるかな。気になってしょうがない。瑞希の携帯に電話をする。でも、何て言う？お疲れ様とだけ、言ってみるか？

ブルルル…ブルルル…。5回、6回、出ない…。

「auお留守番サービスです」

なんだよ…。あゝあ…。

仕事が一区切りつき、残りは明日にするとして、会社を出た。まだ、社長といえるのかな…。大人同士だもんな。お酒でも飲みに行ってるのかな…。

ああ、俺、ものすごいやきもち妬いてる。やきもち妬くような、立場じゃないのに…。

ブルルル、携帯が振動した。あ、瑞希だ！

「もしもし」

なんとなく、声が沈んだままになった。

「あ、柴田です。電話くれた？」

「……。社長は？」

「今、別れたところ」

「ふうん」

やっぱ、今まで一緒だったんだ。あ…。ビルのガラスのドアから、瑞希の姿が見えた。会社に戻ってこようとしてた？

「圭介は、まだ仕事？」

「もう、終わりました」

「今、圭介どこ？」

「え？」

瑞希の方からは、見えてないの？

「今、どこにいるの？」

「ここ」

瑞希のまん前のドアを開けた。

「わあ。びっくりした！」

電話をしたまま、瑞希がでかい声をだしたから、耳がきょろんつてした。

「声、でかすぎつすよ」

「あ、ごめん……」

瑞希も俺も、電話を切った。

瑞希の顔が、ほんのり赤かった。

「顔赤いつすね、酔ってますか？」

「わかる？」

「飲んでたんだ、社長と」

やっぱり……。なんか、腹が立ってきて、つつけんどんな態度をしてたら、

「もしや、妬いてる？」

つて、瑞希が、言った。その言葉にまた、むかってきた。

「妬いちゃ悪いっすか？」

「え？」

「冗談ですよ」

あゝあ。そうだよな。妬くような立場じゃないもんな、俺……。

「だけどさ、妬くようなこと、なゝゝんもなかったけど」

そう言われると、それはそれで、なんかしゃくにさわる。

「社長に口説かれて、喜んでたんじゃないですか？」

「……」

あれ？なんで、黙るの？え？凶星じゃないよね、それ。

「今のも、冗談ですよ。そんなわけないですよね、いくらなんでも

……」

そつだよ、そんなことあつてたまるかよ……。

「社長は最近、私が元気がなくて、お見合いを断られたからって、

心配してくれてただけです」

「え？」

「それから、私の好みの男性を聞いてきて、誰か紹介してくれるって」

好みの男性を、紹介？冗談じゃない。そんなの大きなお世話じゃん。笹おじさん！

「それだけ」

「それだけって…。で、なんて言っただんですか？」

「は？」

「だから、好みの男性」

「ああ、そうね、渋くって、年上で、頼りがいがある紳士」

「……」

嘘…。なんか、それって笹おじさん？ってか、俺と正反対？きつ…。ああ、やば…。俺が落ち込んでるの、ばれる。笑わなきゃ…。

「で、社長はなんて？そんな男紹介してくれるって？」

「そうね…」

「そうね…？」

「……」

だから、なんで黙るわけ？笑ってるのも、限界あるよ、俺…。

「嘘だよ、嘘」

「え？」

「好みの男性、まったく逆」

「え？え？え？え？じゃ、渋くなくて、年上じゃなくて、頼りにならない、そんなやつ？」

「ふふふ、そんなやつよ」

んだよ、それ、ふざけてんじゃない。

「それ、冗談っすよね」

「…そうね、本当は好きなタイプなんてないですって答えました。好きになった人が、タイプ」

「ああ、そうっすか」

なんか、どこまで、本気で嘘かわかんねえよ、もう…。

6 現実だった

「おなか空かない？」

瑞希が俺に、聞いてきた。

「はい、ぺこぺこです」

「なんか、食べようか？」

瑞希は、何か飲むだけでいいって言うから、そのへんのファーストフードに行くことにした。

それにしても、社長もちゃんと、瑞希のこと見てるんだな。最近、元気なかったって…。そうなんだ…。笑い声も少なかったし、なんか、様子がおかしかった。でも、それって茂にいが原因だったのか？

「やつぱ。元気がなかったのは、茂にいが原因ですか？」

ハンバーガーを食べながら、思い切って聞いてみた。

「元気ないように、見えてた？」

「はい。俺のことも避けてましたよね…」

あ。言っちゃったよ、俺。でも、こうなったら言っちゃったほうがいいかな。

俺は、コーラを飲んで、ハンバーガーを流し込み、話し出した。

「すみません、俺、気になってたけど、俺のこと避けてませんか？
て、聞きづらくて」

「そうだったの？」

「なんか、怒られるようなことしたかなとか、なんか嫌われるようなことしたかなとか、気になってたんですけど…」

瑞希は、黙って俺を見ながら、聞いてた。

「でも、もし嫌いになったなんて言われたら、俺、立ち直れそうもなくて…」

ああ、俺、正直すぎない？これじゃ、情けないやつじゃん…。

「茂にいのことで、元気なかつたんですね。」

「うん」

え？違うの？

「違うんすか？」

「うん」

瑞希は、まっすぐ俺を見てる…。

「あ、じゃ、やっぱ俺なんかしましたか？」

「うん、君、なんかしちやったのよ」

「ええ？」

まじ、俺？やっぱ、俺…？

「何だろう？えっと…」

何？何やった？俺…。

「すみません、思いつかないんです。何したかなってずっと、考えてたんすけど…」

「考えてたんだ」

あああ…。なんか、瑞希、怖い…。冷たい…。

「やっぱ、あれっすか。俺が飲んで記憶なくしたとき、とんでもないことしたとかつすか？」

違うって、言うて欲しいけど、それしか思い浮かばない。

「あら」

「あら？あらって？」

「いい線いつてるなつて…。で、何か思い出した？」

…う、う……………わ……………。

ま、待てよ…。待てよ。部屋…？俺、瑞希の部屋はいつて、そこで、とんでもないことした？えええ？

「そうそう、お風呂にね」

「え？」

「出たときに、圭介が入ってきて、そこは覚えてる？」

「はい、覚えてます。瑞希さん、ちゃんとパジャマ着てました」

「覚えてるんだ」

「その辺は、しっかりと思い出して…」

「じゃ、そのあとは？」

「2階にあがったんです…」

「うん」

「それで、お兄さんの部屋に入って、寝ました」

「だよね？瑞希、そう…だよね？」

「え？」

「え？」

えって…？あああ、やっぱ、そのへん？そのへんでなんかした？
俺…。

「何か、俺、しましたか？」

「私の部屋に来たかな。そういえば」

「え？」

「覚えてない？」

「部屋…、覚えてるっす…。ああ、もうこうなったら言っちゃおう？」

「俺、瑞希さんの部屋だけ、思い出して」

「部屋を？なんで、部屋の中を知ってたのかな？」

「中にはいったからですよ…」

怖い、瑞希。なんか尋問されてるみたいだ、俺…。

「でも、部屋しか思い出せないんです。その…」

まさかと思うけど、思うけどさ…。

「俺、襲ってないですよね？」

うわ…。瑞希黙った。え？でも、顔があきれてる…？

「大丈夫、圭介はただ、ベッドに座っただけだし」

「え？ベッド？」

なんで、俺座ったの…？

「髪が濡れたままだったから、私がドライヤーで乾かしてあげて…。

それで少し、話をして、部屋に戻っていったの」

「髪？俺の？」

「うん」

え？まじで？まったく覚えてないよ。髪？うわ〜。

「そうなんすか。うわ、覚えてないや…」

やべ、俺、赤くなつてね？やべえ。なんか照れるし。顔にやけるし…。ああ、でも、覚えてないなんて…。

「ちょっと、悔しい」

「なんで？」

「だって、そんなラッキーなこと覚えてないなんて
つて、また言っちゃってるし、俺。

「髪を乾かしたただけだよ。美容院に行ったら、してもらつてしょ」

「そうだけど…」

美容師と瑞希じゃ、全然違うつて…。

「瑞希さんに、髪触られたと思つたら、俺…」

つて、だから言っちゃってるつて、はずいこと…。

「何？何よ。ちょっと、こつちまで恥ずかしくなるからやめてよ」

瑞希が、いきなり動揺した。真っ赤になった。え？なんか、すんげえ可愛い。

「でも、なんでそれで、瑞希さんが怒ってるの？」

「それは、あまり関係ないの」

「え？」

「会話のほうかね、まあ、いろいろと、なんで覚えてないのかなつて…」

「そうなんすか？俺、大事なことを忘れてる…とか？」

「ああ、いい線いつてるね」

「え？」

またそれ？あああ、何？何だよ？思い出せ〜！俺！

「やつべ〜。だめだ。まったく思い出せない。俺、何を話したんすか？」

「教えない」

「え？なんで？」

「なんか、悔しいから」

ああ…。たまに瑞希はこうやって、俺をじらす。そう言うときの瑞希の顔は少し小悪魔みたいな、そんな顔になる。くそ。そんな顔も好きだからまいっちゃうよな。

「それ、結構重要っすよね。相当なこと、俺言ったんすか？」

「言っただというか、聞いたというか…」

「瑞希さんも、何か話したんすか？何か大事なこと」

コクン。瑞希が、黙ってうなずいた。少し、恥ずかしそうに…。

あれ？この顔覚えある。そうだ、夢でだ。夢の中で、瑞希がまったく同じ表情をした。ほら、瑞希の好きな人って、俺？って聞いたときの…。あのときの、顔…。

「それ、俺が、喜ぶこと？」

まさか…ね。

「さあ、どうかな」

ああ。まだ、しらを切る…。

「俺が、シヨックなこと？」

「どうだろう、たいしたことないかもね、だって、忘れちゃうくらいだし」

「ま、待ってください」

ドクン、ドクン、心臓が爆発しそうになった。瑞希が平然を装って、意地悪く言う。でも、少し目が、優しくなってる。

慌ててコーラを飲んだ。のどがカラカラだった。げほ…。慌て過ぎて、むせた。

「俺、夢だと思ってたんですけど、ずっと…」

も、もしかして、夢じゃないのか？

「え？」

こんなこと言って、引かれる？笑われる？それとも、夢じゃなくて、現実だったとかってそんなことある？

「瑞希さんに、こくられてる夢です」

すんげえ、勇気をふりしぼって言うてみた。

「なんて？」

「う……。その、はっきりと言葉までは覚えてないんですけど」

瑞希の顔が、真剣だった。笑いもしなけりゃ、あきれてもいない。えええ？

「告白されて、俺がすげえ嬉しくって。それで、俺も瑞希さんのこと好きだって言うてて」

「それで？」

「それだけなんすけど。こう、もやがかかった感じで、はっきりとしないんですけど、でも、とにかく俺が喜んでるのは確かなんです。で、朝起きて、すんげえラッキーな夢見たなって」

「いつ？」

「え、瑞希さんの家に泊まった、翌朝」

「ああ、ああ、そっか……」

瑞希が、頭を抱え込んだ。

「あ、あれ、現実？」

なわけ、ないよね……？

コクン。瑞希が黙ってうなづいた。

「まじで？」

……。まじで……？

「あ……、なんだよ。俺一ヶ月もいい夢見たって思い込んでたの？」

うっそだろ……！

「え？じゃ、そこんとこ、俺が忘れてて、瑞希怒ってたの？」

コクン。瑞希は、また黙って、恥ずかしそうになづく…。何それ、可愛すぎるよ、瑞希。

「可愛い…」

って、俺、声に出てるし…。っていつか、そこじゃなくって、えっと、あ、そうだよ、夢じゃないってことは何？

「両思いなんだ、俺…」

「うん」

「まじ？」

「…まじ」

ぐ…わ…！やった！！！！…ってか、ってか、

「これも夢ってことないよね？」

これも夢でしたなんて、そんな結末嫌だよ、俺。って思い切りほつぺをつねる。

「いて…。まじだよ！」

「あの、圭介、声のトーンを下げようよ。みんな見てるよ」

「え？」

周りを見たら、店の中にいた人みんなが、こっちを向いてた。やべ…。って、コーラももうないし…。慌てて、コップに入ってた、氷をほおばる。

ガリガリ…。冷たいのが、俺ののぼせあがった頭も冷ましていく…。

「店、出ましようか？」

外に出ると、雨が降ってて、会社に傘忘れたって言うと、瑞希が傘に入れてくれた。

俺のほうが背もあるし、傘を持つことにした。でも、女物の傘で小さくて、瑞希の反対側の肩が濡れそうになってた。瑞希が濡れないように、傘を瑞希の方に向ける。そうすると、肩が当たる。肩が

当たるたびに、俺の胸がドクンってなる。

ああ……。なんか、まだ夢心地だ。

「夢じゃ、なかったんだ」

そう言っ、かみしめる。

「夢だっと思っ、た。だっ、てそんなことありえないっ、て……。12も年下だし、ありえないっ、て……」

「私も思っ、てたよ。12も上で、好きになっ、てもらえるわけないっ、て」

「そっ、なんすか？」

そんなこと、瑞希も思っ、てたの？

「だから、絶対に思いを告げることもないっ、て、思っ、てただけだね」

「はい」

「でも、やっ、ぱり、きちんと気持ちを伝えたくなっ、たんだよね」

そっ、か……。瑞希も、勇気出してくれ、たんだ。

「ありがとう、ございます」

「え？」

「きちんと、気持ち伝えてくれ、て」

伝えてくれなかつ、たら、俺、いつまでうじうじしてたんだろっ、か……。

「すみません、それなのに俺、覚えてなくて」

「覚えてたじやない。ただ、夢だっ、て勘違いしてたけど」

瑞希、俺がずつと忘れてたんだもん、な、そりゃあ、怒るよ。無理ないよな。

「怒るの、無理ないですよ、ね」

「まあ、ね」

「あ、すみません、ほんと、俺、馬鹿ですよ、ね」

「ふふ、もういいよ」

ああ、それ。その笑い方…。瑞希の隣にいて、ドキドキしながら、それと同時にあったかい気持ちになる。瑞希の優しさに包まれて、あったかくなる。

「今度は、あれですよ。瑞希さんが夢だったとかって思わないでくださいよ」

「あはは。大丈夫、そんなに飲んでないし」

「じゃあ、ここで」

「はい、お疲れ様」

瑞希が改札に入っていった。その姿をずっと見ていたくて、瑞希のことをずっと、見ていた。ふと、俺の視線に気づいたのか、俺の方を瑞希が見た。なんか、その顔も姿もすんげえ、愛しく思えた。瑞希って、呼んでもいいかな。もう、俺、恋人気取りしてもいいのかな…。

その帰りは、雨に濡れて帰った。

ふわふわ夢心地のまま、風呂に入って、そのまんまベッドに入った。今頃、瑞希も俺のこと思ってるかな…。なんてすげえ、あほなことを考えてたら、なかなか寝れなくなった。

瑞希も、俺のこと、思ってたくれたんだ。でも、いつから？もしかして、そういうの、きちんと瑞希の部屋で教えてくれたんだろうか？ああ、しっかりと告白の言葉も、思い出さなくちゃって思ったら、そのとたんに、眠ってたみたいだ。

7 「瑞希」

翌朝、会社に早くに着いた。朝、すごい早くに目が覚めて、少し頭が痛かったけど、会社に早々と着いてしまった。そして、今か今かと瑞希が来るのを待った。

ドキドキしてた。俺の片思いでもなく、従兄弟の彼女とか、単なる同僚とか、そんなのじゃなくって、もう瑞希とは恋人同士になるんだ。なるんだ…。だよな？

もう、瑞希は俺のことどう思っているんだろうって、悩んだり、瑞希の言葉で一喜一憂しないでもいいんだよね？俺…。堂々と胸張って、俺は彼氏ですって思ってもいいんだよね？俺…。

っていうか、それでもやっぱり会社じゃ、内緒にしとかなないと駄目なんだろうけど…。だけど、二人の間じゃもう、恋人なんだよね？ね？

あー来た！瑞希は、今日は、紺のブラウスを着ている。それに、白のパンツ。なんか、大人な感じだ。

瑞希は、会社には大人な感じの服を着てくる。でも、休みの日にはカジュアルだった。ジーンズ姿の瑞希も、大人な感じの瑞希も、どっちも好きだな、俺。

瑞希は、あんまり化粧を濃くしてこない。そういうところも、好きだな。ネックレスとかも、小さめのをしてて、ピアスもしてるけど、髪から時々きらって覗く程度。

俺は、どっちかっていうと、化粧が濃かったり、ネックレスとかじゃらじゃらつけてたり、長いピアスをしてたりする女性って苦手。本当はすっぴんでもいいくらい。香水の匂いじゃなく、時々、ふわって匂うシャンプーや、石鹸の匂いがいい。

爪も、最近みんな、いろんな色にしたり、きらきらさせたりしてるけど、基本綺麗に切ってあるほうが好きだ。瑞希は、あまりのば

さないで、綺麗なピンクの薄い色のマニキュアをしてる。

パソコンを打つてるときの瑞希は、りんとしてる。電話の応対も、しっかりしてる。でも、なんていうか、穏やかな優しい印象を与える話し方だ。

俺という時には、けっこう楽しそうに声をあげて笑ったり、いろいろな表情を見せてくれるけど、他の社員とは、意外と話さないほうで、話しても聞き手にいつもまわってる。

そういえば、人見知りをするって前に言ってたっけ。あれは、本当みたいだった。でも、俺の前では明るかったり、すねてみたり、小悪魔みたいになってみたり、いろんな瑞希を見せてくれてるから、それだけでも、俺は嬉しかった。

瑞希が席に着く前に、急いで瑞希にメールを打った。瑞希は、パソコンを開き、そのメールを読む。

<おはよう。瑞希。昨日のことは、覚えてる？

わざと、呼び捨てにした。反応がすごく気になった。ときどき…。

<おはよう。昨日のことって、なんだっけ？

ああ、またこうやって、じらす…。まだ俺、振り回されてるじゃん…。

<それ、冗談ですよ。

って、メールをしたら、少し間を空けて、

「ちよつと、びびった？」

って、瑞希は聞いてきた。ほら、そういうことを言うときの瑞希の目、いたずらっぽくて、小悪魔の目になる。

「ちよつとどころか…」

実は、けっこうびびったけど…。でも…。

<覚えてないって言っても、俺こくりますから、何度でも。

もう、今までの俺とは、違うぞ、どうだ！ってメールを送った。だけど、心の奥じゃときどきだけど。どう返事が返ってくるか…。

<仕事しなさい。

なんで……。瑞希は、こうやって、時々、お姉さんぶるんだ。

「へ〜い」

ま、そついうところも、好きなだけどさ。

午後、やけに気分が悪くなった。やべえ、吐きそうだ。トイレに行つて、吐いちゃって、応接コーナーで少し休むことにした。

ああ、去年の秋にもあったな、同じパターンだよ。これ…。

ぐったりしていると、社長が、そばにやってきて、帰っていいぞと言ってくれた。それも、瑞希に、タクシーで送ってもらえと、タクシーチケットまで、くれた。

あ、ありがたいけど、瑞希にも迷惑かけちゃう。だけど、瑞希は、さつさと帰り支度をして、俺の鞆まで持つて、付き添ってくれた。

エレベーターを待つてる間、瑞希の顔を見る。なんか、驚くほど、しっかりとした顔つきの瑞希がいる。こんな表情もするんだ。

タクシーに乗り込んで、どうにか行き先を告げる。瑞希がよっかかってもいいと言うので、甘えさせてもらった。まじで、辛かった。余裕なんてなかったし…。

瑞希は、ずっと黙ってた。車が揺れるたびに俺に気を使い、力を入れて、揺れないようにしてるのがわかった。瑞希の優しさと、力強さを両方感じた。

タクシーにそのまま、乗って帰るかと思つたら、瑞希は家にまで着いてきてくれた。申し訳ない、って気持ちと同時に、瑞希がいてくれて、安心する自分がいる。

俺、相当瑞希に甘えてるんじゃないのかな…。瑞希の優しさに。

どうにか、2階まで、自力であがった。上着とベルトをはずして、横になった。ああ、ほっとする。

「ズボン、しわにならない？」

「うん、脱ぐ」

そう言って、もさもさ脱ぎだした。あ、パンツ瑞希に見られちゃうって思ったけど、もう、どうでもいいかってなってた。本当は、脱がして」

と言いたいところだったけど、それはさすがに、甘えすぎだろう…。そのまま、布団の中に潜り込んだ。

「は~~~~~」

長いため息が出た。ああ、だいぶ楽になった。

ふと、横を見ると、瑞希が俺の脱いだ上着とズボンを、椅子の背もたれにかけていた。

「なんか、奥さんみたい」

「お母さんみたいって、言われなくて、よかったわ」

瑞希は、そう言ってふふって笑った。

まじで、なんか奥さんみたいだと思って思った。言ってから、照れくさくなった。でも、瑞希が笑ってくれたから、なんか嬉しくなって俺はもつと甘えなくなった。

「そこにでかいクッションあるでしょ。それを持って、こっちに来て座って」

そう言くと、瑞希はクッションを持って、ベッドの直ぐ横に座った。それから、俺が、

「手」

と言つと、俺の手の上に手を乗せて、手をつないでくれた。

ああ、これじゃ、犬の「お手」みたいだと思って、なんか自分でおかしくなった。だけど、犬は瑞希じゃなくて、確実に俺のほうだよな。

瑞希の手は、あつたかくって、柔らかくて小さかった。

「ちよつと、こうしてて」

「うん」

瑞希の手のぬくもりも、すぐ横にいる瑞希の俺を包んでくれる優しさも、俺を安心させてくれて、俺は、いつの間にか、そのまま眠っていた。

なんとなく、夢を見てた。いや、うすぼんやりと、途中までは意識があつたのかもしれない。瑞希が俺の顔のすぐそばに顔をくっつけてきて、俺の顔をずっと見ていた。

視線をずっと、感じながらも、俺は目を閉じてて、瑞希のその優しい視線の中で心地良さを感じていた。

なんで、こんなに優しいのかな。あつたかいのかな。ほっとするのかな。そんなことを感じながら、すぐ横にある瑞希の髪の毛が頬に触れるたび、ドキッてしたり、瑞希の息が顔にかかるたびに、ドキッてしていた。夢と現実の狭間のような、不思議な感覚…。

瑞希の匂いに包まれて、嬉しくて幸せな気分になると、さっきまでの気持ちの悪さも消えていった。

気がつくと、部屋は暗く、瑞希の姿はなかった。瑞希のいたあたりを、触ってみたが冷たかった。

「帰っちゃったんだ。なんだ…」

急に、迷子になった子供のように、一人で孤独になった。暗いままの部屋の中で、しばらく天井を見ていた。

ガチャ…。ドアが静かに開いた。おふくろ？ 違う。暗い中に見えるシルエットは、瑞希だった。

「瑞希？」

「起きてたの？」

「うん、ちよっと前に」

瑞希がいる、そう思っただけで、こんなにも喜ぶ。

また、瑞希がベッドの横に来て、クッションの上に座り、俺の手をにぎってくれた。不思議だな。不安も気持ち悪さも、いっぺんにふっとんでいく…。

暗さの中で、瑞希を見てた。もっと、瑞希の顔がちゃんと見たくて、電気をつけてもらった。瑞希の顔がはっきりと見えた。

瑞希の目、まつげ長い。瑞希が少し視線をはずす。瑞希の瞳、少し茶色がかってる。

おふくろが部屋に来て、ご飯ができたことを告げた。まだ、瑞希、家にいるんだ。俺も一緒に一階に行きたいけど、そこまでは回復してないかも…。

瑞希は、軽く俺に手を振り、おふくろについて下におりていった。

しゅん。さっきまで、瑞希の声がしてた部屋が静まり返る。ポカリを持ってくると言ってた、おふくろがなかなか来なかった。多分、忘れてるんだ。

どうやら、誰かリビングに移動したらしい、リビングと階段がつながってるから、リビングで話し出すと、けっこう声が聞こえてくる。

「圭介なら家族サービスとか、よさそうじゃね？」

あ、順平だ。俺の話をしてんのか？

「げえ、まじで結婚させようって思ってたの？」

誰と、誰をだ？すげえ、気になる。

ベッドから立ち上がると、あ、もう大丈夫そうって感じだから、下におりていった。

「あら、圭介、もう大丈夫？」

おふくろが聞いてきた。

「うん、うるさくて、寝れないし」

「あら、2階まで聞こえてた？」

「圭介、信じられねえよ、この夫婦。圭介と柴田さんくつつけようともくろんでやがる。やばいから、ここらで一発言とかかないと…」

順平がなんか、嬉しそうに言ってくる。ああ、俺と、瑞希のこと…？

「ああ、なんか聞こえてた」

「圭介、冗談よ…」

おふくろが、申し訳なさそうに、言い訳をする。うーん、なんか、あまり元気なくて、話をしっかり聞く余裕もない…。

「ああ、圭介、柴田さんは正吾に送らせるから」

親父が、突然そんなことを言い出してきた。

え？兄貴に？

「……」

なんか気になって、兄貴のほうに行って、兄貴に聞いた。

「兄貴、彼女いたよね」

「ああ、うん」

「じゃ、大丈夫だね」

「何が？」

「でも、彼女年上だっけ？」

兄貴、年上好みだっけ…。やばくない？

「何が言いたいんだよ、お前」

「瑞希のこと、駄目だよ。好きになっちゃ」

「はあ？お前、あほか、なんで俺が」

なんでって、わからないじゃんか。瑞希、可愛いし…。

「あ、すげえ、まじなんだ。圭介は、柴田さんのこと」

って、順平が俺の顔を覗き込んできた。ああ、ちょっと、うざいかも。

「おふくろ、ポカリは？」

「あ、ごめんなさい、忘れてた」

やっぱり…。

玄関に行った兄貴と、瑞希。どうも、気になる。

「兄貴、頼んだよ」

「ああ」

兄貴は、そうクールに言っただけ、さっさと玄関をあとにした。瑞希は、俺に微笑んで、出て行った。

はあ…。俺が元気になってたら、送っていったのに。なんか、あの空間に兄貴と瑞希の二人だけにいるってだけで、嫉妬してる俺がいる。俺、こんなに嫉妬深かったっけ？

兄貴にとつて、瑞希は…。いや、瑞希にとつて、兄貴はどう映るんだろう？俺よか、年上で、しっかりしてて、大人でクールで…。ベッドに入り込む。瑞希はいいたい、俺のどこが好きなのか考え込む。12も下だ。子供っぽい。能天気で、そうだ。犬みたいって言ってた。

瑞希は、俺のどこに惚れてるんだろうか…。そんなことを考えているうちに、また、気持ちが悪くなってきた。

朝起きると、頭が割れそうに痛くて、熱を測った。37度。微熱だ。気持ちも悪くて、また吐いた。

「大丈夫なの？圭介」

おふくろが、心配そうにトイレで吐いてる俺のところに来て、声をかけた。

「うん。ちょっと、休めばなんとか…」

そう言っただけ、自分の部屋に戻ると、親父が来て、

「今日は、病院に行つてこい。前に茂君がいた大学病院。つてがあるから、すぐにでも診てくれる」

って言ってきた。え？？病院…？

「病院？面倒くさいよ。休んでたら治るって」

「一回、ちゃんと診てもらえ。なんでもなかったらそれでいいんだし。な？」

「うん…」

仕方ない。一回行けば、親父もあれこれ言っただけになるだろうし、行ってくるか…。

1時間も横になっていたら、なんとか動けるまで回復した。それ

から着替えて、病院に行った。

「げ、何この混みよう…」

しばらく様子をみてたけど、いつこうに、人が減らない。時計を見たら、9時半過ぎてた。

「あ、やべ」

病院の外に出て、携帯で瑞希に電話をした。

「もしもし」

「あ、瑞希？俺だけど」

「どうしたの？」

あ。俺、「俺だけど」って名前を言っていないじゃん。ってか、それだけで、俺ってわかつちゃうんだ、瑞希…、ってちよつと嬉しくなった。

「今、俺、病院にいるんだけど。なんかまだ、調子悪くて、親父が一回診てもらえって言うから、来てるんだ。すんごい混んでて、会社に着くの昼過ぎそうだから、社長にも言っておいてもらえる？」

「うん、わかった」

瑞希の声、なんか沈んでた。心配したのかな…。そりゃ、そうだよな…。

去年もあつたっけ…。具合悪くなったの。彼女と別れて、すんごい仕事に打ち込んで、会社に泊まりこんで仕事して…で、ぶっ倒れた。あゝあ。情けね…俺って。

「榎本さん、3番にお入りください」

やっと、呼ばれた。で、たったの5分で診察は終わった。2時間近く待ってたのに…。それも、胃カメラ？それ、おおごとじゃね？胃カメラなんて、すんの？俺…。

あゝ。へこむ。へこみながら、駅のうどん屋にはいり、うどんをすする。

会社に着くと、俺の席で、社長が俺の依頼された仕事をしていた。げ…。やば。この前瑞希に送ったメール、消してないよ！慌てて、社長のところに飛んでった。

「あ、社長、すみません！」

「いいよ。それより、どうだった？病院」

「はい、胃カメラの予約してきました」

「おお、そうか…。なんだか、おおごとだな」

「そうなんすよね…」

まじ、まさか、胃カメラで検査までになるとは、思ってたかったよ…。

社長とバトンタッチして、席に座る。

「社長、メールのところ、見てなかった？」

瑞希に聞いてみた。

「うん、多分ね」

「やべー、この前瑞希に送ったメール、見られたらどうしようかって思った。消しとこ」

「消さなかったの？」

「瑞希消したの？」

「うん、それより、呼び捨てになってるけど」

「あ、やば」

会社では、一応さんづけで、呼んでた。付き合ってることも、隠している。あ…。すんげえ、動揺してない？俺。って、胃カメラで、かなり、落ち込んでるんだ、これ…。

6時、社長が来て、

「今日は、圭介、帰ること！」

って、言ってきた。俺の体を心配してそう言ってくれたのが、嬉しいけど、だけど、なんか俺って情けないなって思う。社長が、俺の仕事、かわりにするんだよな…。

瑞希と一緒に、ビルを出た。

「なんか、気が重いな」

「え？」

「社長に申し訳ないっていうか、俺って使えないやつだよな」
「って、なんで俺、瑞希にこんな情けないこと言ってるの？」

「そんなことないよ。でも」

「でも？」

「でも…何？」

「お母さんも言ってたけど、もつと自分の体は大事にしくちや。
食べるものに気をつけたりとか」

「ああ、言ってた？俺もよく言われる」

「なんだよ、おふくろのやつ、そんなこと瑞希に話してるのかよ。」

「じゃあさ、コンビニのお弁当とか、カップラーメンとかじゃない
ご飯にしたら？」

「外食でも栄養は偏るよ。それに高いじゃん」

「お母さんのお弁当は？」

「ええ？おふくろの？そこまで俺、ガキじゃないって…。」

「うっっん」

頭を掻きながら、何て言ったらいいもんかを、考えた。

「いいんだけどな…、でもな…。抵抗ある。だって誰も弁当持
つてきてないし、それも親の作った弁当ってなんだか…」

中坊みたいじゃん。

「彼女とか、奥さんならいいの？」

「え…？奥さんって、俺まだ、独身っていうか、彼女ってことにな
ったら、瑞希でしょ？作るの…」

「そっか、それもありだよな」

「瑞希が、作ってくれるって…ことかな？って期待していいの？俺
…。」

「そうだよな〜」

瑞希が、奥さんになったら、毎日瑞希の弁当……。瑞希が奥さんっていうのも、ありだよな〜。って俺は勝手な妄想をしていた。

8 情けない俺

翌日。朝、起き立て、頭痛がする。最近ずっとだな…。でも、しばらくするとおさまったから、飯食って、電車に乗った。

そしたら、混んでて、蒸してて、暑くて、一気に気持ちが悪くなった。

「駄目だ…」

駅のトイレに駆け込む。やっぱり、吐いた。あ……。どうなっちゃってんの？俺の胃。ますます胃カメラのむのが憂鬱になる。

会社にかどうにか、たどりつく。でも、すぐには仕事できそうもない。しばらく応接コーナーで休んでいると、瑞希が出社した。

「どうしたの？」

「うーん、電車混んでて、暑くて、蒸してて…」

「気持ち悪いの？」

「うーん、めまいも…」

瑞希の顔を、ちよつと見た。あ。やべ…。すんげえ心配してる…。

「ちよつと、ここで休めば、治るから」

「どうした？圭介」

あ、社長だ…。やべ、社長にまで心配かけちゃう…。どうにか、笑顔を作ったけど、

「木下、お前圭介のサポートできるか？」

って、社長が言った。ええ？木下さんだって、ここしばらく夜遅くまで、残業してるのに。

「はい、こっちの終われば、できます。多分午前中には終わるか…。」

「ああ、そっか。悪いけど頼むわ」

木下さんに迷惑かけちゃうじゃん。

「社長、俺、大丈夫です」

「じゃ、あまり根詰めしないで、仕事にかかってくれ」

「はい」

くそ。力はいんない。でも、どうにかデスクに戻んなきゃ…。

やっとこさ、席に座り、パソコンを開くと、瑞希がすごい心配そうに聞いてきた。

「大丈夫？」

ああ、俺、しっかりしろ！心配かけてる場合じゃないって。

「うん、大丈夫」

そう言っつて、必死に仕事に集中した。う、まだ、むかむかする。

午後は、さすがにへたばった。木下さんが、自分の仕事を区切りをつけて、俺の分を手伝ってくれた。あ、ありがたい。

瑞希が、お昼をどつかでさっさと食べてきたらしく、すぐに戻ってきて、ポカ리를くれた。嬉しかったけど、ポカ리를飲む気にもなれなかった。

「頭いて…」

「今度は、頭痛いの？」

「うん」

ああ、なんか、瑞希には甘えなくなっちゃうんだよね、俺。でも、すぐに瑞希が、席を立とうとした。

「瑞希…」

「ん？」

瑞希が、すごい優しい声で聞いてきた。

「もう少しここにいて」

瑞希は、そつと俺の手をにぎってくれた。あつたかい。優しいぬくもり。ああ、それだけで、なんだか癒される。

6時になって、社長が帰っていいぞって言うてくれた。瑞希も、

「送ってくよ」

「って…。でも、

「大丈夫」

って断った。いや、本当は、ついてきて欲しかったんだけど。

「いいから、あ、でも今日は電車で帰るからね」

「遠回りじゃん」

「いいよ、金曜日だし」

ああ、そつか…。金曜か…。

「じゃ、俺んち泊まってけば？」

「無理無理、着替えもないし」

「俺のパジャマ貸すよ」

「無理だつて…」

ちえ…、本気だったんだけどな。そうしたら、瑞希とずっといられるのに…。

電車に乗ったら、瑞希がずっと手をにぎっててくれた。ああ、瑞希のぬくもりって安心できる。駅に着くと、瑞希が、

「タクシーに乗ろうか？」

って言うてきた。歩けそうにないし、タクシーで帰ることにした。

家について、お金を払い、タクシーを降りた。

「瑞希も！」

って、強引に腕をつかんで降ろした。このタクシーで帰られたんじや、瑞希と一緒にいらなくなる。もしかしたら、このまま、俺んちに泊まっていくってことにも、なるかもしれないしって淡い期待を胸にいだきながら、瑞希と家に入った。

おふくろが、瑞希と帰ってきたんで驚いてた。

「夕飯食べていってね」

「いえ、もう帰ります」

え？何言つてんの！瑞希。

「遠慮はしないで。また誰かに送らせるから」

そうだ、おふくろ！瑞希を帰らせるな！

「電車でもそんなに時間かからないですし、今日は電車で…」

ああ、もう！瑞希は何言ってるんだよ！

「だから、泊まってればいいんだよ！」

じれったくなつて、つい言つてた。

「あら、いいわね。そうしなさい」

「でも、着替えないし、化粧道具も」

「私の貸すわよ。お化粧道具は合わないかしらね。ま、なんとかするって」

ブラボー！おふくろ。俺は心の中でガッツポーズをした。おふくろなら、そう言つて思つてたんだよね。なんか、瑞希のことすげえ、気に入ってたし…。そういえば、この前瑞希がきてから、やたらと、

「また、連れてらっしゃいよ」

つて言つてたつけ。

瑞希は家に電話をした。それも、途中でおふくろが「貸して」つて言つて、瑞希のお母さんと話し出し、強引に泊まっていくなにしてたみたいだった。

おふくろのあの強引さ…。誰も勝てやしないんだ。瑞希のお母さんも、負けたみたいだ。

かくして、瑞希は今日、俺んちに泊まっていくなになった！やり〜！

リビングのソファに寝転がっていると、どんどん体調がよくなつていった。いや、瑞希がいてくれたからかな？

瑞希が電話を切った。

「OKだった？」

つていうのは、電話のやりとりで、なんとなくわかつてたけど。

「もちろんよねえ。さてご飯作るわね。あ、そうだ。瑞希さん、お風呂入る？まだお湯入れてなかったわ」

おふくろはそう言うと、バスルームに向かった。

「お風呂…」

瑞希が、少し呆けていた。

「パンツ、俺のはく？」

冗談で言ってみた。

「い、いいよ！」

あ、パンツと言えば…。

「瑞希、この前俺のパンツ見たでしょ？」

「え？」

「この前、送ってくれたとき」

「見てないよ」

「うっそ。俺が着替えてたとき、部屋にいたじゃん、エッチ、すけべ」

「な、何言ってるの？見るわけないじゃん。後ろを向いてました！」
え〜？なんか、すげえ動揺してない？瑞希。可愛い。

「冗談だよ。そんなにむきになるなよ」

ああ、なんか、ほんと、可愛いよね〜。

部屋に戻って、着替えをした。ベッドにゴロンって横になった。

さて、瑞希が今日は家にいる。どうしようか…。きっと、下の客間に泊まるはず。そつと、夜中にしのびこむ…。ああ、和室の隣が親の寝室っていうのが、難点だ。

あ、そうだ。風呂…。瑞希風呂入るって…。

そうだ！今度は俺が、髪を乾かしてあげるってのは、どうかな〜。この前の髪を乾かしてもらったのは、すっかり記憶が飛んじゃってるけど…。今度は、俺のほうが…さ。

って、早速、瑞希の髪を乾かしていると、妄想する。また、すっぴんの瑞希が見れる。すっぴん、可愛いんだよね。って、化粧

濃くないから、あんまり変わらないけどさ。

そんなこんなを妄想してて、下におりるのが遅くなった。ああ、部屋で妄想して何してんの、俺。せっかく瑞希本人がいるってのに……。

一階におりていくと、瑞希がおふくろとキッチンにいた。

「あれ？何してんの？」

「お料理を手伝ってもらってるの。瑞希さん、お料理好きだって言うから」

「へえ、そうなの？意外」

瑞希、何やつてもとろそうだし、料理もあまりしないのかと思っ
てた。そっか、料理好きなのか。

「なんで？」

「え？なんか、何やつても、とろそうじゃん、瑞希って」

「ひどいわね、圭介！それにあなた、さっきから呼び捨てはないんじゃないの？年上の女性に向かって、失礼よ」

「あ、そっか。ま、いいじゃん、会社じゃないし」

「ってか、おふくろ、少し鈍いんじゃないの？俺らが付き合ってるの、わかるでしょ、普通……」

「ご飯の用意ができて、兄貴もちょうど2階からおりてきて、夕飯を食べ始めた。」

「圭介、もう大丈夫なのか？」

「兄貴が心配そうに聞いてきた。」

「ああ、おなか減ってるし、元気になったみたい」

「まじで、今日会社であんなに、気持ち悪かったとは思えないほど、回復してる。瑞希マジックか？」

「親父は、接待でいなくって、順平はバイトだった。俺は、瑞希と一緒にるのが嬉しくて、なんかおふくろの話にもって、笑いながら話してた。兄貴も、それを聞きながら笑ってたし、瑞希も、嬉しそ

うだった。

食事が終わって、おふくろが、瑞希にお風呂どうぞって着替えを渡してた。

「あ！」

瑞希が入る前に、バスルームに飛んで行き、急いでドライヤーを持ち出した。それを隠して、リビングでテレビを観ながら、瑞希が出てくるのを待った。

瑞希は意外と、早くに風呂から出てきた。う……。髪、洗ってないとか？

瑞希が、ドアを開けて、リビングの方に来た。振り返ってみると、髪が濡れていた。

「あ、髪も洗ったんだ」

良かった…。

「はい」

って、ドライヤーを渡すと、瑞希は、

「あ…」

って言って、ドライヤーを受け取った。何か言いかけてたけど、早く俺の部屋に行って、乾かしたくて、

「俺の部屋で乾かしたら？」

と、瑞希の言葉をさえぎって、言った。

「うん」

瑞希は、俺のあとをついて、2階に来た。部屋に入り、

「そこ座って」

と、ベッドを指さして、ドライヤーをもらい、コンセントにつないだ。わくわく、ドキドキ。

「今日は俺の番ね」

そう言つと、瑞希が、きよとした顔をした。ま、いいや。

瑞希の髪を、乾かし始めた。ああ、瑞希の髪、今日は違う匂いだ。

あ、そつか。うちにあるシャンプーだもんね。

「髪、綺麗だよ」

瑞希の黒いサラサラの髪が、俺、好きなんだよね…。

「圭介の方が、黒くってサラサラだよ」

え？俺…？

「う…ん。あんまり嬉しくないかな、髪ほめられても」

なんか、座ったまま、俺に全部まかせっきりの瑞希…。ああ、やばい。ドキドキしてるよ、俺。瑞希のうなじとか、見えちゃってすげえ色っぽいし…。

「具合は？大丈夫？」

黙ってた瑞希が、口を開いた。ああ、このまんま黙ってられたら、俺、やばかったかも…。

「あのさ、すげえ、気持ち悪かったのに、瑞希がそばにいと、俺治っちゃうみたい」

瑞希が、また黙った。

「もしかして、魔法かけてない？」

「魔法？」

「そう、俺が元気になる魔法。瑞希がいると安心するんだ。なんかこう、ほわってあったかくなって、すげえ優しい空気に包まれてるようになる」

「それ、私もだよ」

「え？」

瑞希も…？思わず、ドライヤーを止めてた。

「圭介といると、あったかいの。圭介のほうこそ、魔法かけてない？」

「うん、かけてる」

「え？どんな？」

「う…ん、どんなって」

口に出して言うのが、恥ずかしかった。でも、ドライヤーの音で、ごまかせるかな？ドライヤーをかけて、わざと、音がなるよう動かして、

「やっぱ、愛の魔法でしょ」

って言ってみた。あ、自分で言ってる、照れた。でも、瑞希も顔が赤くなってる。いや、俺の顔も熱いつて…。

「もう、下に行くね。圭介の部屋に入り込んでたら、なんか、変に思われちゃう」

「ええ？うちの息子がおそわれてないかしらって？」

「違うよ。何言ってるの？」

って、言う瑞希の顔が、また赤くなった。

危ない。おそわれるどころか、俺のほうが危なかった。ギリギリのところ、どうにか、理性を保ってたようなもんだ。

瑞希は、下におりて行った。俺は、しばらく部屋で呆けてた。さっきまで、瑞希が座ってたベッドに横になる。なんか、あったかい。「グワ~~~~~ッ！」

今頃になって、キスのチャンスだったんじゃないのって気づいた。

「俺、どうしてこういうチャンスを、逃すのかな…」

髪の毛乾かすので、精一杯だったよ。いや、でも、待てよ。さっきの状況でキスしたら、絶対、やばいか…。

でも、今日は、瑞希いるんだよ、ずっと。そうだよ。キスのチャンスは、まだあるんじゃない？

9 瑞希の真剣な想い

親父が、帰ってきた。おふくろが、どうやら、今日は瑞希さんが泊まることになって、と、説明している。リビングでの会話がだんだんと、聞こえなくなった。

多分、おやじもおふくろも、リビングから、いなくなったってことだよな。そつと、一階におりていった。おふくろも、親父も、瑞希もいない。

リビングのドアを開けると、和室から電気がもれてた。あ。瑞希、和室にいるんだ。聞き耳を立てた。声がしない。きつと、一人でいるんだよな…。

「圭介、どこ行くの？」

「うわ~~~~~！びびった！おふくろ、どつから沸いて出た？」

「え？いや、瑞希、さびしくないかなって」
「って、俺、どういう言い訳してんの？」

「あなたみたいに、さびしんぼうじゃないわよ。それより失礼ですよ。もう、お布団だつてしいてあるのよ」

「え、まじ？」

「布団…。」

「え？まじじゃないわよ。夜中でも駄目よ。寝室の隣なんだから、寝込み襲いにきてもばれるからね。瑞希さんは大切なお嬢さんなの。今日はお預かりしてるんだから、わかってるの？」

「み、見抜かれてる。」

「はい…」

「これはもう、退散するしかないよな…。あ〜あ。」

一人さびしく、テレビでも観てるかなって、リビングのソファになつころがって、テレビを観だした。まさか、もう瑞希、寝ちゃっ

たかな…。

テレビでは、なんかわかんないドラマをしてた。金曜なんて、たいてい、終電近くまで会社にいるし、ドラマなんて観てないから、何がなんだか、わからなかった。

ただ、ぼくって、眺めてた。同じ屋根の下に瑞希がいることを、嬉しいような、ちょっと惜しいような、そんな気持ちでいた。

ガチャ…。リビングのドアが開いて、瑞希が入ってきた。

「あ、瑞希。まだ寝てなかったの？」

「あああ。嬉しいかも！」

「だって、まだ10時…」

「そうだよな、寝るには、早すぎるよな！」

寝そべってた体勢を直して、ソファにちゃんと座り、俺の横に瑞希が来れるようにスペースを開けた。「ここ、ここ」って感じで、俺の横をぼんぽんたたくと、瑞希が横に来て、座った。

「ああ……。瑞希だ。まじ、嬉しい。」

「俺、ここであつて、よくテレビ観るんだ」

「ふうん」

「あ、確か瑞希は部屋に、テレビあつたよね」

「うん。たいてい部屋で一人で観るかな」

「そうなんだ。でも、一人でさびしくない？」

「くす。さびしがりやなんだ、圭介」

「え？」

「俺が？」

「さっき、お母さん言つてたでしょ」

「あ、聞こえてた？」

「じゃ、寝込み襲いに行くつてのも…。」

「ふふ。寝込み襲いにきちゃ駄目よ。」

「あ、聞こえてたか…。」

「なんだよ。ちえ。チャンス到来だったのにな」

ちよつと、バツが悪くて、そんな冗談を言った。

ゴホン。

うわ…？

振り返つたら、兄貴が立つてた。音もなく2階からおりてくるなよ。びびった。

「風呂誰が入ってる？」

「今、親父が入ってる」

「あ、そう」

なんだよ。邪魔すんなよ……！とつとと、2階に行け！

「あのさ、なんかいい感じだけど」

「え？」

まだ、いたの。

「だから、恋人同士みたいだけど、あんまり仲良くしてるとき、やばいんじゃないの？圭介」

恋人同士みたいって、見てりゃ、わかるっしょ。そのとおりなんだよ。何がやばいわけ？

「おふくろ、勘違いするよ。それに喜んじゃうよ。なんか、たくらんでるっていうか、もくろんでるっていうか、あの人、怖いよ、何考えてるかわかんないけど」

たくらんでる？おふくろが？何を…？

「気をつけて、柴田さん、あの人、強引だから」

だから、何が？

「なんのこと？」

瑞希にも、わけがわからないらしい。俺だつてさっぱり…？

「あら、瑞希さん、起きてた？」

今度は、おふくろかよ……。

「まだ、10時だよ。寝てるわけないよ。ねえ」

「じゃ、お酒飲まない？ビールか、ワインもいいわね」
酒？ああ、おふくろ、どっかりと居座る気なんだ…。

おふくろは、ワインとグラスを持って、意気揚々とやってきた。

「私、ワインは甘いのが好きで、フルーティーなのよ、これ」

俺は、胃カメラの検査が終わるまで、酒はおあづけらしい…。ちえ。

「乾杯」

おふくろはそう言うのと、瑞希の持ってたワイングラスに、自分のグラスをくつつけた。

「何に乾杯？」

そう俺が聞くと、

「そうねえ、瑞希さんとの出会いにかしら」

おふくろが、そう答えた。

「瑞希さんと気が合うのよ」

そりゃあ、良かった。それからも、おふくろは、瑞希とあれこれ話し出し、俺と瑞希の時間は、おふくろにのつとられたも同然だ。ちえ…。

そのうえ、俺が途中で口を挟んだら、

「圭介、あなたね。せつかく二人で話が盛り上がってるのに、邪魔しないでくれる？」

と、きたもんだ。

「おふくろの方が邪魔してるの、わかんないの？せつかく二人で、テレビ観てたのにさ」

すげえ、いい雰囲気だったのに…。

「そんなこと言って、瑞希さんはあなたみたいな子供、相手にしてるの、大変なのよ。ねえ」

グサ。傷つくじゃん、それ。けっこう気にしてたりするのに…。

「いえ、そんな・・・楽しいです。圭介くんといるのは」

瑞希！もつと言って！

「あら、そう？圭介といると楽しい？」

「はい、すつごく」

「な？な？」

俺は、有頂天になった。

「そう、それはもしかして」

そのとき俺は、おふくろの顔つきが変わったのにも気づかず이었다。

「この前から主人と話してたんだけど、瑞希さん良い子よねって
本当にお嫁さんに来て欲しいくらいよねって」

嫁…？

「主人もお気に入りなのよね」

「はあ？」

瑞希の顔が、呆けてた。

「私もなのよね〜。ね、圭介」

「え？そうなの？」

ていうか、何が言いたいんだか？

「茂にはもつたいたいいわ。ほんと良かったわよ。破談になって、ね、
圭介」

そりゃまあ、そうだけど…。

「もう、お見合いはしないわよね〜」

え？見合い〜〜？

「はい。する気ありません」

ああ、良かった。瑞希、きつぱりと言ってくれて…。

「じゃ、誰か周りで良い人とか、いないわよね。あ、好きな人とか」
ん？なんで、瑞希黙ってんの？俺でしょ、俺！

「あら？その間は何？いるの？」

「あ…」

あつて、だから〜。俺でしょうが…。

ゴホン。

わあ、びっくりした。だから、なんで兄貴は音もなく、おりてくんの！

「母さんさ、強引なんじゃないの？そんな聞き方して、困ってるじゃん。それに好きな人がいるんでしょう。柴田さん、はっきり言った方がいいよ。じゃなきゃこの人、たくらんでるから、やばいよ」

兄貴、さっきからなんだよ、たくらんでるって…。

「ちよっと、変なこと言わないで」

「本当のことでしょ？」

瑞希も、困った顔をしてる。そうだよ。何がなんだか、わかんないよ。

「はっきり言わないと、圭介とくつつけられるよ」

ええ？んだよ、それ。もう付き合ってたんだよ！

「この前から、二人はお似合いだの、圭介には、ああいう人が必要だの、圭介は、とつと結婚させないとだの、怖いよ、聞いてても…」

け、結婚？

瑞希の顔を見た。ああ、瑞希もびっくりしてる。

「だから、そんなことになったら、いいわねってそういう話よ。別にたくらんでいたわけじゃないのよ。ただ、圭介はどうも、瑞希さんのこと気に入ってるようだし、でも、圭介じゃ、進展しそうにないし」

し、進展…って、何？

「いや、だから、ちよっとだけ、こうなんていうのかしらね。キューピッド役？っていうのかしらね」

「わ、こえ〜」

…？キューピッド？

「柴田さん、気をつけてって言ったでしょ。ちゃんと断って、じゃなきゃ、圭介もその気になるから」

んだよ？それ！兄貴何を瑞希に言っただんだよ！

なんなんだよ？くつつけるだの、結婚だの、断った方がいいだの……。なんで、周りが勝手にそんなこと言っただの？俺のこと無視だよ！

「ああ。なんかこんがらがる！」

ああ……。頭まわんない。

「風呂親父出たよね。入ってくる」

風呂でも入って、頭さっぱりしないと、わけわかんないよ。

「って、おい俺が先」

兄貴が、とつと着替え持って、風呂場に行った。

「早まりすぎたかしらね」

おふくろがため息混じりに、つぶやいた。

「圭介には、お似合いって本当に思ったのにな」
結婚のことか？

「俺、まだ、21だよ」

まだ、結婚なんて考えらんねえよ。

「そうよ、でも、あなた一人じゃあぶなっかしいのよ」

「何、それ？」

俺が、ガキってこと？

「今だって、体壊すまで働いてるし、自分で自分の体、ちゃんとみれないでしょ。管理できないでしょ？」

ええ？

「母親の言うことは聞かないし、あなたには、ずっと年上の、面倒見のいい女性がいて、早くに結婚でもしたらいいと思ったのよ」

「んだよ、それ」

何か？俺の面倒を瑞希に押し付けようとしても、思ったのかよ。っていつか、俺、そんなに頼りねえやつ？

「すげえ、むかつく。俺、そんなに子供？っていうか、じゃ、なんのために結婚するの？俺の管理するため？」

「そうじゃないけど、でも、圭介は仕事でもなんでものめりこむから、セーブして、守ってくれる人が必要なのよ。21歳でもね、結婚はできるわよ」

「でもさ、結婚ってそういうもんなの？」

「そうよ、お互い支えあって」

「お互いじゃないじゃん。なんか、瑞希にばかり支えてもらうみたいじゃん。情けなくね？俺」

「そんなことは…」

おふくろが黙った。やっぱ、俺が情けないやつって思ってるんじゃないん。

「ごめんなさいね。心配すぎね」

心配？俺が情けなさ過ぎてかよ？

「心配って、何が？」

「圭介の体だよ」

瑞希が、少し怖い顔で言った。

「俺の？」

「だって、圭介、あまりにも、うとすぎるんだもん。お母さんが心配してるの、わかってないんだもん」

心配してるのなんて、わかってるよ！

「自分の体なんて、自分が1番わかってるよ！」

「わかってないよ！」

え？

「圭介、わかってないよ。人の気持ち！」

瑞希がすごい、怒ってる。こんな瑞希はじめて見た。

「人がさ、心配してるんだよ？無理ばかりして、強がってばっかで、無茶ばっかで、少しは、自分の体大事にして欲しいのに」

……！瑞希が、泣いてる？

「瑞希さん…」

おふくろも、驚いてた。

ああ、瑞希、そんなに俺のこと心配してたんだ。俺、それなのに、なんもわかってなかった。

「ごめん。俺、そんなに心配かけてるって知らなくて」

いや、心配してるっていうのは、わかってた。だけど、そこまで思っでてくれてるって気づかなかった。

「ごめん、俺全然わかってなかった。瑞希の気持ちわかってるようで、全然」

それなのに、俺、瑞希に甘えて…。

「なんか、全然駄目だよ。俺、心配ばっかかけて。甘えてばっかで。やっぱ、ガキじゃん」

ガキだって、思われて悔しかったのに、てんでガキだったんだ。俺…。

「やっぱり、釣り合わないよ。俺じゃ」

瑞希のことを守ってあげたり、幸せにするなんて、俺には無理なんじゃないかな。支えになるなんてさ…。

「おふくろ、やっぱ、俺じゃ…」

ああ、情けねえ。

「瑞希さん、もしかして、そんなに圭介のこと、思っでてるのかしら」

え？何、聞いてんの？

「あ」

瑞希、なんで泣いてんの？

「圭介、あなた、そんなに落ち込まなくてもいいのよ」

「？」

「やっぱり、あれね、私が邪魔したのね。二人いい雰囲気だったのに」

「あの…」

瑞希が、何か言いかけた。

「私、圭介のこと、責めるつもりはなかったんです」

「？」

「ただ、お母さんが圭介を思う気持ちが、伝わってきて、痛いほど、伝わってきて、それで」

「瑞希？」

おふくろの…思い？

「それで」

瑞希が、今度は俺に向かって、話した。

「私も、すごく大事なんです」

「え？」

何が…？

「私も、圭介がすごく大事なんです。だから…、結婚とか、そういうの今考えるんじゃないくて、ただ、大事だから、一緒にいたいし、支えになりたいし」

「瑞希？」

え？俺のこと？大事？支えになりたいって…、一緒にいたいって…本当に？

わ、やべ、泣きそうだ。俺…。

「だから、圭介がお互い支えあうってさっき、圭介が言ったけど、圭介がいてくれるだけでもう、私の支えになってるの」

まじで…？

「やべえ」

まじ、泣きそうだよ。俺…。

「そう、そうなの？12歳年下の、圭介でも？」

おふくろが、そう聞いた。

「はい…」

瑞希が、そう答えた。

瑞希、本当に？そんなに俺のこと、思ってくれてたの？真剣に思
っ
ててくれたの？

ああ、嬉しいやら、驚いたやらで、なんか、俺は本当に涙が出て
きてて、瑞希やおふくろに見えないように、ソファに座って顔を伏
せていた。

10 結婚しようよ

「じゃ、私もう寝ようかしらね」

おふくろはそう言って、リビングをあとにした。親父と、兄貴が
どうやら、ドアの外で、聞いていたようだ。おふくろに見つかって、
すぐごと部屋に戻っていった。

瑞希とリビングで、二人きりになった。

瑞希が、俺の隣に座った。瑞希の顔を見た。涙で、目が濡れてて
色っぽかった。

「手…」

瑞希の、手をにぎった。俺より小さい手。

俺がいるだけで、支えになってるって言うてくれた。そんな瑞希
のそばにずっといたいって思う。そして、守ってあげたらって本気
で思う。

この手を他のやつに渡すのもいやだ。ずっと、こうやって瑞希の
手を握っていたい…。だったら、結婚をいつか瑞希とするなら、今
だっていいんじゃないか？

瑞希は、結婚を考えているんじゃないくて、ただそばにいたいって、
一緒にいたいって、言うてくれた。でも、それって結婚したい人
ってことだよな。だって、俺も瑞希も前に話した。

「結婚するなら、ずっと一緒にいたいって思う人と」

って…。あれ？いつだったけな。いつこんな話したっけ？

ああ、そうだ。俺が瑞希んちに泊まった日。ああ、忘れてた記憶
がいきなり戻ってるよ。

瑞希、俺も瑞希がすんげえ大事。ずっと、一緒にいたい…。こん
なに誰かを思うことって、きっともうないよ。

「結婚、しようよ…」

俺は、瑞希にそう言った。本気で瑞希と結婚したいって、そう思った。

「…え？」

瑞希がすごく、驚いた。

「おふくろの、思惑通りってというのが、嫌なんだけど」
「……」

瑞希は、まだ驚いてる。でも、顔が赤くなってる。

「俺、絶対、瑞希を他のやつにとられたら、後悔する」
瑞希の目がうるんできた。

「それに、結婚するなら、絶対、瑞希だって思う」

瑞希の鼓動が聞こえてきた。

「それから…」

なんか、俺、すごい恥ずかしいこと言ってるよね。照れくさくなってきた。

「早くに結婚してあげないとき、ウエディングドレス、似合わなくなるし」

思い切り、これ照れ隠しの冗談だ。

「え？どういうこと？」

瑞希が、やっと声を出した。

「あはは、冗談だって、うそぞそ」

なんか、目をつるませてた瑞希も、ちょっと怒ってる瑞希も、すげえ可愛かった。

翌朝、早くに目が覚めた。体調もよかった。これなら、瑞希のこ
と車で送っていける。それどころか、デートもできそうだ。

着替えて下におりた。もうダイニングには瑞希がいた。ああ、まだすっぴんだ。

「おはよう」

なんか、すげえ嬉しくなった。

「おはよう、気分は？大丈夫？」

「ああもつ、全然大丈夫、すげえ気分いいし」

まじで、瑞希マジックだな。

「朝食食べたら、俺が車で送るね」

「圭介、大丈夫なの？」

おふくろが、コーヒーを淹れながら聞いてきた。

「うん、全然。今日は頭も痛くないや」

朝食を食べて、顔を洗って、髪をとかして、車のキーを持って、リビングに行った。

「んじゃ、そろそろ行く？」

瑞希も、少し化粧をしたみたいだった。

駐車場に行き、車に乗り込む。瑞希は、またシートベルトがしめられないようだった。

あれ、この前、兄貴に送ってもらったときも、兄貴にもらったのかな。気になって、シートベルトをしめてあげながら聞いてみた。

「できたよ〜、ちゃんと自分で」

って、瑞希は少し、自慢げに言った。

あ、この位置だと、瑞希にキスができるじゃん…って、思わず、瑞希の唇にそつと触れた。それはほんの一瞬で、本当に唇の先が少し触れただけだった。

でも、瑞希は黙り込んでしまった。え？なんで？なんか、こっちの方が焦るし、照れるし…。なんで、そんなに固まってんの瑞希…。

「瑞希さん」

って、思わず、さんづけかよ、おい、俺…。

「初めてのキスじゃないでしょう…」

って、何聞いてんの。俺。

「…！」

あ、瑞希の顔が少し怒ったような、照れたような焦ったような…。

「やつべ〜、なんかそうやって意識されると、照れる」

思わず、言っちゃった。そうしたら、瑞希がちょっと冷静な顔になって、

「今のはね、キスに入らないから。触れただけじゃない」

なんつうか、そんな強がってかわいすぎるよ、瑞希。

「へえ、そんなのでも、動揺しちゃうんだ」

「もう、なんか、にくらしい」

瑞希はそう言っと、俺の腕をぺちってたたいた。

「あはは…」

なんだよ、すげえ可愛いじゃんかよ〜。まいっちゃうよ。

俺が車を走らせたら、瑞希がずうっと、俺のほうを見てて、全然前を向かなかった。

「ね、さつきから、なんでずっと、こっち見てるの？見とれてるの？」

って、ちよつとまた、からかってみたくなった。

「うん、見とれてるの」

ええ？そんな正直に言っちゃうの？

「あ〜。見とれるのはいいんだけど、ちよつと運転しにくいかな」
冷静をよそおって、そう言ってみた。

「くす、そう？じゃ、見とれるのは、あとにする」

あ、あとって、いつ？瑞希の顔を見てみた。まっすぐ前を見ながら、ちよつとにやけていた。

「どっか、ドライブに行く？」

「うん！」

即答で返ってきた。瑞希が嬉しそうだった。それから、

「やばいよね〜」

って、瑞希がつぶやいた。え？やばい？って俺の口癖でしょ、それは。

「何が？」

「って、聞いてみた。」

「あ、そっか。もしかしてさ、圭介がやばいって言ってるの、同じ理由かな？」

「え？」

「そうなの？」

「そうなのって聞かれても、瑞希のやばいって言ってる理由知らないから、同じかどうかわかんないよ」

「ん〜」

「どうやら、理由を言うかどうかを、迷ってるみたいだった。俺は、すんごく聞きたかったけど。」

「あのね、私のやばいってというのはね」

「うん」

「あ、何？教えてくれるの？」

「圭介のことを、好きになりすぎて、やばいってええ〜」

「あははは」

「俺は思わず笑ってた。嬉しいやら、照れるやら、でも、おんなじ理由だった。」

「圭介は違った？」

「一緒！」

「なんだ、瑞希も同じこと思ったんだ。」

「だって、瑞希のこと、一つ知るたび、好きになるじゃん。どんどん好きになってやばいなって、俺、まじ思ってたもん」

「って、正直に白状した。」

「同じだ…」

「って、瑞希が、つぶやいた。」

それから少し車を走らせると、雨が降ってきた。

「これじゃ、海とか行ってもな〜」

と、独り言を言うと、それに瑞希が反応した。

「車、走らせてるだけでもいいよ。私」

「え？」

独り言のつもりだったから、返事が来て、びっくりした。

「圭介の隣にいられたら、幸せだから」

だ〜〜〜！何それ！瑞希、ちよつと、そんなこと言って、俺のことを喜ばせすぎ！でも、精一杯平静を装って、

「じゃ、このまんま走らせようかな」

って、言ってみた。けど、耳がどんどん熱くなるのが、わかった。思わず、音楽をかけた。なんか、照れくさくって、話も続かなくなつた。

ふと、走ってる道の先に、プラネタリウムがある科学館があつた。つけて思い出した。

「あ、この辺…。プラネタリウムがあるんだよ。寄ってかない？」

「プラネタリウム？見たい！」

瑞希が、喜んだから、見ていくことにした。

切符を買って、中に入る。

「ここ、よく子供のころ、俺と兄貴と、順平と親父で来てたんだ。おふくろは料理教室に行つてて、いなかったけど…」

プラネタリウムの会場に向かいながら、そう話すと、瑞希の返答が何もない。

「瑞希？」

振り返つてみたら、瑞希がいなかった。

「あれ？ええ？瑞希？」

土曜日の雨、家族連れが多かった。人ごみの中、迷子になつちやつてんの？

来た道に戻ると、プラネタリウムとは、まったく反対方向で、きよろきよろしている瑞希がいた。

「なんでそっちに行ってるの？プラネタリウム、こっちだよ」

そう言つと、瑞希は俺を見て、ほっとしながら、

「ごめん、下向いててわからなかった。あれ？でも、誰かのあとについていた気がするんだけど、別人だったかな？」

と、そんな、とぼけたことを言った。

「もう……。何それ……」

誰のあとをついて行っちゃってるの……。

「いつも手、つないでないと駄目だな」

瑞希と手をつないで、歩き出した。

「ちゃんといってきてよ。いないから、すんげえ、びっくりした。」

「ごめん……」

ほんと、しっかりしてるようで、おつちよこちよいだよね、瑞希つて。そんなところも、可愛いんだけどさ。

こんなとき、実は俺がいないと駄目なんだよな、瑞希は……。なんて思ったりして、嬉しかったりするんだけどさ。

プラネタリウムの会場は、けっこういっぱいになってた。その中で、隣同士が空いてる席を見つけて、二人で座った。

会場が暗くなり、天井一面に星空が浮かび上がった。

「わあ」

瑞希が隣で、小さな歓声をあげた。

「ね、けっこうすこいでしょ」

瑞希のすぐそばで、小声で俺は言った。近づくと、瑞希の匂いがした。瑞希の手からは、あったかいぬくもりが伝わってきて、なんかそれだけで嬉しくなった。

ふと、瑞希が手をぎゅって力を入れて、にぎつてきた。瑞希の顔を見ると、ちよつと不安げな顔にも見えた。

「ずっと隣にいるから」

なんでかな。そう瑞希に言ってた。いや、隣にいたい、瑞希を守

っていききたいって思ったからかな。

そのあと、瑞希が俺の顔を見た。そのまま、ずうつと空じゃなくて、俺の顔を見ていたのに気がついてたけど、なんか、照れくさいことを言っちゃったからか、俺は瑞希の顔が見れなくなってた。

あ、そっか。さっき、あとで見とれるって言ってたっけ。瑞希、俺の顔に見とれてるのかな。なんて、アホなことを思いながら、そのまま、俺は星を見ていた。

数千の星。この地球には、数億の人がいるんだよな。その中で瑞希と出会った。これって、偶然じゃないよな、絶対。

たっくさんの人がいる中、俺は瑞希を好きになった。他の誰でもない、瑞希を……。そんなことを思ったら、すごく不思議な気持ちになった。

プラネタリウムが終わって、外に出た。雨の中、一つの傘をさし、相合傘で駐車場まで歩いた。まだ、すぐ横に瑞希のぬくもりを感じていた。

「すごかったね。星。私、プラネタリウム、初めてだったんだ」

「……？ほとんど、俺の方見てたじゃん。星、見れてたの？」

「ちゃんと見れたでしょ」

「うん」

「あ、間違った。ちゃんと見とれることができたでしょ」

「うん？」

「俺、顔に穴があくかと思ったよ」

「え？何それ？」

「ははは。だから、俺の顔、十分、見とれることができたでしょ？」

「ええ？」

「思いつきり、見とれちゃったでしょ？瑞希」

「ええ〜？何よ！それ！」

そう言つと、瑞希は俺の腕をぺちつてたいた。あははは。可愛

い。

瑞希の家まで車で送っていく途中、瑞希と手をつないだ。ずっと、こうやって手をつないで、ずっと、瑞希の隣にいる。結婚したら、ずっと一緒にいられる！

俺は、すごく有頂天になって、わくわくしながら、瑞希を家まで送り、自分の家へと帰った。家に着くと、おふくろが玄関に飛び出してきた。

「圭介！ちよつとちよつと！」

ダイニングに連れて行かれ、席に着くと、いきなりおふくろが切り出した。

「瑞希さんと、お付き合いをしているのよね？」

「ああ、…うん」

「それで、圭介は、きちんと結婚のことまで、考えてお付き合いはしているの？」

「……」

いきなり、言われて、たじろいだ。でも、結婚しようって瑞希には言っただし、おふくろに隠しててもしかたがないかなと思い、

「うん。考えてるよ」

と、言うとおふくろの目が輝きだした。

「じゃ、挨拶とか、行かなくちゃ」

「挨拶？」

「瑞希さんのおたくによ」

「ああ、そっか」

「お父さん！リビングでテレビ観てないで、こっちに来て話に加わって！」

リビングにいた親父のことまで、引っ張り込んできた。え？ちよつと。おおごと？

「今日ね。瑞希さんと圭介が結婚するなら、いつくらいになるかし

らって、話していたのよ」

「……？」

だから、なんでそう話が飛ぶかな…。

「大安吉日ってすぐにうまるのよ」

「うまるって？」

「結婚式場よ！何のんきなこと言ってるの」

「ちょ、待って。まず、挨拶して、承諾得てっていうのが、先だよね？」

「そうだぞ。まったくお母さんは気が早すぎる」

「あら、だってね、1年くらいうまつてるかもしれないのよ、そんな悠長なこと言ってられないでしょ？」

「わかった！わかったよ。じゃ、挨拶も早めに行くからさ。それと、式場とか勝手に決めないでくれる？俺と瑞希で決めるから！」

「え…」

「じゃ、そういうことで。俺、部屋に行くから」

自分の部屋に行くと、どっと疲れが出た。確かに…。瑞希とずっと一緒にいたいけど、結婚しているんな面倒なことでもいい、あるんだろうな…。あゝあ。

ベッドに横になった。ぼけぼけって天井を見た。そして、結婚を想像してみた。まずは、瑞希のウェディング姿…。ああ、やべ…。絶対に似合う。

それから、結婚生活…。朝、瑞希に起こされる。

「おはよう、圭介」

って、優しく言ってくる。それで、カーテンを瑞希が開けると、朝の光が入って、俺が眠い目をこすって、

「おはよう、瑞希」

って、言っさ。そんで、もう朝食ができてて、お弁当もできてて、顔洗って、ご飯食って、で、

「行っってらっしゃい」

って、瑞希が玄関でキスして…。って、あ、そっか。そうしたら、瑞希会社辞めるのか…。

……。くくく！！！めくるめく、新婚生活くくく！

こりゃ、おふくろじゃないけど、悠長にしてられない。今、すぐにでも挨拶に行きたいくらいだ！

ベッドから立ち上がり、携帯を手にして、すぐに瑞希に電話した。

「瑞希？」

「あ、圭介…」

「今、何してんの？」

「ぼくってしてた。圭介は、家に着いたの？」

「うん。それで、おふくろにつかまって、一回瑞希んちに挨拶に行けて」

「え？」

「おふくろ、ノリノリで、結婚式の日取りも決め兼ねないよ」

「まじで？」

「うん。大安がいいだの、式場はどこにするだの、俺がいない間、親父と話していたみたい」

「えくく？」

あ、なんか、瑞希いやそうな声だ。

「困る？」

「私は嬉しいんだけど、うちの母親が…」

「え？俺のこと駄目だった？」

「いや、お付き合いしてるんだの、そういうのも、まだ、言ってないけど、ただ…」

「うん、何？」

「さつき、ぐちぐち言われて…」

「何を？」

「いやくく。いろいろと…」

「瑞希、瑞希の家族は賛成してくれるって、この前言ってたじゃん」
「そうなんだけど、お母さん、圭介のこと気に入ってたから。でも、結婚相手としては、わからないかも」

「年下だから？」

「うっくん。うちの母親、すごく世間体とか、気にするから。父は
そうでもないんだけど」

世間体？

「世間がどう言おうが、大事なものは、本人どおしだろ？」

「私もそう思うの。母もそういうことを言うこともあるの。でも、
たまーくに、近所のばあ、いや、奥さんからいろいろと言われる
と、とたんに世間体を考え出すの」

「そういうばあがいるんだ…」

「そっいうの、気にしなそうな、お母さんに見えたけどな…」。

「瑞希、俺、行くからさ。挨拶に…。もし、反対されても、何度で
も行くよ」

「本当に？」

「うん」

あつたりまえじゃなか…って、あれ？なんで黙ってんの？瑞希。

「何？何で無言？」

「うっくん、圭介、意外と頼もしいなって」

意外はよけいでしょ。

「じゃ、日にちどうする？」

「え？ああ、挨拶に来る日？」

「そっだよ。いつにする？」

「来週の週末、早すぎるかな？」

「わかった。土曜は仕事入るかもしれないから、日曜で」

よっしや~~~~！！来週だ！

それから俺は、やっぱリスーツでいかないととか、いったいどう

やって言おうとか、あれこれ考えた。

でも、あれこれ考えては、結局最後にまた、新婚生活を思い浮かべて、にやけていた。ほんと、あほだよな。俺って…。

その日の夜、ひさしぶりに笹おじさん（社長）がうちに遊びに来た。

どうやら、俺の体のことを心配して、寄ってみたようだったけど、おふくろは俺に体のことより、頭の中が結婚のことでいっぱいだったから、笹おじさんにも、いきなり俺の結婚の話をしだした。

「結婚？圭介が？いつ、誰と？そんな相手いたのか？」

「あつら。やだ、笹塚さん気づかなかったの？圭介と瑞希さん」

「……。瑞希さんって、柴田さんのことか？圭介！」

「う、うーん」

返答に困ってしまった。

「いや、仲がいいのは知っていたが、なんていうか、見てて、圭介がなついている感じがしてただけで…。ええ？だって、柴田さん、そんなそぶり全然…。っていうか、柴田さんはこの前、お見合いの相手と駄目になったって…。つい、この前…」

「あ、うん。そうなんだけど…」

「あら、そういえば、そうよね。早い展開だわよね」

おふくろが言うなよ…。くっつけようとしてたんじゃなか…。

「まあまあ、笹。驚くのは無理はないと思うけど、落ち着いてくれ」

「あ、ああ、はい。…で、結婚はいつ？」

「これから、圭介が向こうに挨拶に行つて、それから私たちが会いにいつて…。あ！結納とかもあるわね」

結納って…、何？

「そうだわ。笹塚さん。結婚しても瑞希さんは仕事続けられるのかしら？」

「え？あ、ああ。はい。それは、別に、かまわないですけど」

「あら〜、良かったわね、圭介。子供ができるまでは、働いてもいいわよねえ」

こ、子ども〜〜〜!?

「まあ、まあ、お母さん気が早すぎるよ。まずは、挨拶に行つてそれからだから、なあ、圭介」

「そうだよ。なんでそう、一人で盛り上がるかな…」

「これは、まだ、きちんと決まるまでは、会社の人には内緒にしておくからな、圭介」

「あ、はい」

笹おじさんは、そう言つと、うちで、ご飯を食べて、帰つて行つた。

それにしても、ほんと、うちのおふくろ、強引つていうか、気が早いっていうか、なんていうか…。

その週、胃カメラの検査をした。

朝からすごい憂鬱だったけど、やってみたら意外とそんな大変でもなかった。自分の胃の中を見るっていうのは、なんかあんまり、気持ちのいいものでもなかったけど、医者にすごい健康な胃だつて言われて、安心した。

会社に行き、そのことを社長に報告し、席に戻つた。瑞希もすごく、ほつとした表情をした。そうだよな。瑞希、心配してたもんな。周りのみんなにすげえ、迷惑をかけたから、仕事ばりばり頑張ろうと思つたけど、自分の体のことも考えながら、仕事をするにしたら。これでまた、倒れたりしたら、ますます瑞希に心配をかけてしまう。

それから、瑞希が、俺の分のお弁当を持ってきてくれるようになった。瑞希の手作り弁当！すげえ、嬉しい！

でも、周りにはまだ、俺たちが付き合つてることも内緒だったから、そつと弁当をもらい、そつと返していた。

11 結婚させてください

いよいよ、日曜がやってきた。朝から、すげえ緊張して、あまり食べれなかった。

おふくろが、新しいYシャツを出してきて、これを着ていけって言った。髪も、昨日の仕事の帰りに切ってきた。ネクタイもあまり派手じゃないのにした。

「は~~~~~」

バスルームの鏡を見ながら、ため息をつくとき、横から親父が、緊張してるな~~~~。大丈夫か？」

と、聞いてきた。親父もこんなときがあつたの？と聞くと、

「あつた、あつた。いや~~~~、頑固そうなお父さんで、結婚させてくださいと言つても、ずっと、むつつりしててな~~~~。緊張したつけない~~~~」

と~~~~。

「へえ、そうなんだ」

「でも、お母さんがあの調子で、両親を言いくるめちゃったんだよ。いやいや、ほんと、あのころから強引だったっけな~~~~」

「……まじ？」

「お母さんは、口が達者だからな~~~~」

「ああ、うん……」

す~~~~、は~~~~！今度は、深呼吸をしてみた。瑞希は、おふくろみたいに、両親を説得したりまるめこむほど、強くない気がする。俺の方がしつかりとしていないと~~~~。

それに、12歳も下のガキと違って思われたくない。頼りないやつに大事な娘を渡せるかって、思われたくない。

パンパン！ほったをたたいて、鏡に映った自分に向かって、
「行くぞ！」

と、気合を入れた。

玄関に行くと、おふくろがやってきて、

「もし、もし反対されたら、すぐに次にはお母さんが行くからね！」
ってちよつと興奮気味。

「いや、いいって。親が出てっただらもつと、駄目なやつって思われるっしょ」

「そうだぞ。圭介に任せておけばいいんだ。圭介だつて、もう大人なんだから」

「じゃ、行つて来る」

なんか、その「圭介だつて大人なんだから」って言葉まで、馬鹿にされてるようで、しゃくにさわったけど、そんなことで頭にきてたら、ほんとのガキだよなつて思つて、そのまんま、俺は家を出た。

ああ、緊張でのが渴く。でも、ここを越えないと、結婚にはたどりつけない…。あつさりと、瑞希のご両親がOKしてくれることを祈りつつ、電車で揺られて瑞希の家に向かった。

なんで、車じゃないかっていうと、兄貴がデートに乗つて行つちやったからだけど、でも、車を運転するのも、緊張のあまり、事故でも起こしたら大変だし、電車で行けつておふくろも親父まで言つてたからな…。

瑞希と約束の時間は、12時きっかり…。瑞希の家の近くに来たら、まだ、10分も時間があつた。それで、缶コーヒーを買い、近くの公園のベンチに座つてひと息ついた。

「は～～～～」

つてため息、そのあとに、また深呼吸をした。

「すげえ、緊張。あ、えつと、何て言えばいいんだっけ？結婚させてください。いや、お嫁さんにください。いや、幸せにします！いや…。あ～～～～！なんて切りだせばいいんだっけ？」

昨日の夜に考えた言葉が、全部ふつとんだ。時計を見たら、あと3分で12時だった。

「わ、やべー！」

慌てて公園を出て、自販機の横のゴミ箱に缶を捨てた。それから足早に瑞希の家に向かった。

玄関の前で、時計を見た。あと1分で、12時だ。ゴクン。また、のどが渴いてきた…。

ピンポーン！チャイムを押した。押しちまった！

「は～～い」

あ、瑞希のお母さんだ。

ガチャ…。ドアが開いた。と、その瞬間クロが、飛びつこうとして走ってきた。けど、なんでか、飛びついてこないで、止まってしまった。

う…。緊張で、顔がひきつる。

クロのあとからきた、お母さんが俺を見て、立ち止まった。

「おや、今日も仕事だったのかい？」

お母さんの後ろからお父さんが来て、そう穏やかに言った。

「いらっしやい、圭ちゃん。仕事帰りなの？大変だったわね」

え？ええ！？瑞希、俺が挨拶にくるって言っていないの？

廊下の奥にいた、瑞希の顔を見て、目で訴えた。すると瑞希が、両手をあわせて、ごめんって謝っていた。ああ、言っていないんだ…。

もし、瑞希が言ってくれたなら、ご両親もそれなりの心構えでいるんだろうとか、そこで、どう切り出そうかとか、それとも、ご両親の方から何か、言ってくるかなとか、思ってたのに。これじゃ、何？もう完全に俺のほうから、全部を言わなきゃならないって感じだよな。

リビングに行くと、お父さんが、ご飯と一緒に食べようと、言い

出した。いや、ご飯食いながらは、ちょっと言えそうもない。それに、この緊張じゃ、とても、のどを通らない。

「その前に話があつて…」

リビングのソファに座らせてもらった。瑞希は俺の隣に座った。お父さんはにこにこしていた。お母さんの方は、なんか、怖い感じだったけど…。

「あの…」

話し出そうとしたら、のどがからからで、のどの奥がいがいがした。お茶を飲むと、熱くて、思いきり、やけどをした。

ああ、もう、こうなったら、一気に言っちゃった方がいい！

「い、いきなりですみません。瑞希さんと結婚させてください！」
は~~~~~！言っただぞ！！！！

しばらく、沈黙が続いた。お母さんがようやく、お父さんの方を見て、

「お父さん…」

と、声をかけた。

「圭介君、その、何を言ってるのか、わかっているのかな？」

「はい」

う、これから、なんて言われるんだ…。でも、なんて言われようとも、くじけないぞ！

「瑞希さんとは、お付き合いをさせていただいています。それで、結婚を二人で考えて、今日、挨拶に来ました」

「お付き合い？い、いつからだね？」

「少し、前からですが…」

「そ、そうだろうね。瑞希はこの前まで、茂君と交際していたくらいだからね」

お父さんはかなり、動揺しているのか、少し声がうわずっていた。「お付き合いをしてから、まだ日も浅いんでしょう？ちよつと、結婚

を考えるには、早過ぎないかしらね、圭介君」

お母さんの方は、冷静だ。いつもの明るい、お母さんとは全然、雰囲気が違う。

「早すぎるとは、思っていません」

でも、なぜだか俺もどんどん、冷静になっていった。

俺は、真剣に瑞希との結婚を考えた。早すぎるだろうとか、そんなこともいっぱい考えた。でも、やっぱりこれから先もずっと、瑞希といたいってことと、ずっと、いるだろうなってことだけで、結婚を今しようとも、何年後かにしようとも、結局一緒にいることには、変わりないだろうって、そう思っていた。

いつから、そんなふうになんか真剣に思うようになったかって言えば、瑞希が俺の体を真剣に心配してくれてて、俺のことを真剣に思ってくれてるってわかってからだ。

それまでは、結婚のことなんて、考えられなかったけど、でも、瑞希のその気持ちに応えたいとか、瑞希の支えに俺もなりたいたとか、そんなふうにしたから、まじで、結婚のことを考えるようになったんだ。

そういうことを、瑞希のご両親に説明した。どれだけ、俺の気持ちを言えたかはわからない。もし、わかってもらえないなら、何回でも来て説明もするし、賛成してくれるまで、絶対あきらめないって思ってた。

お父さんは、今は動揺していて、考えられない、もう少し時間をくれと言った。お母さんも、今日は家族で話したいから、このまま帰ってくれと言った。

瑞希は、ほとんど黙っていた。何か言いたそうにはしてはいたけど、どう言ったらいいのか、考え込んでいたみたいだった。そして、お母さんの反対する言葉に、相当ショックを受けてたみたいだった。

玄関に行き、靴をはいていると、修二さんとクロと瑞希が来た。

「圭介、かつこよかったよ。俺は二人の味方だから」

修二さんが、こっそりとそう言ってくれた。すげえ嬉しかった。

瑞希はというと、かなりへこんでいた。

「あとで、電話するね」

瑞希の耳元で、そう言つて、俺は瑞希の家を出た。

帰り道、いろんなことを考えた。次に行ったら、なんて話そうかとか、もし、万が一ずっと、反対されたらどうするかとか、それでも、瑞希は俺についてきてくれるのかとか。かけおちでもしちゃおうかとか…。

家に着くと、やっぱりおふくろが玄関に走ってきた。

「圭介！どうだったの？」

「反対された」

「ええ〜？」

おふくろは、思い切りがつくりした。

「やっぱり、今度は私たちが行ったほうが…」

「いや、だから、それはやめてって…」

リビングに行くと、親父が、

「お帰り。反対されたか？」

と、静かに聞いてきた。

「うん、でも、また行くから…」

「そつか。ま、頑張れ。誠意を持って行っていれば、いつか許してくれる日がくるはずだ」

「うん」

俺は自分の部屋に行つて、スーツを脱いだ。そのまま、ベッドに横になった。

反対の理由はやっぱり、年齢の差と、俺が若すぎるってこと。ああ、悔しいな。それって、俺の努力じゃ何にもできないってことじ

やん。頑張ったからって年齢差はちぎまらないし、いくらもがいても、一気に年をとることもできない。

だけど、親父が言うように、瑞希を真剣に思っていることは伝えられる。うん。それしかないなら、それを頑張るしかない。

2時過ぎくらいに、軽くトーストを食べ、なんだか、無性に体を動かしたくなったから、近くの室内プールに行き、泳ぎまくり家に帰った。

夕飯を食べ終わり風呂から上がると、兄貴がデートから帰ってきた。それから、兄貴が俺の部屋に来て、

「お前、今日挨拶にいったんだろ？どうだった？」
と聞いてきた。

「反対されたよ」

「ふうん。ま、そのくらいの予想はついてたろ？」

「うん、まあね」

「でも、あれだよ。どんなやつがきても、一回は反対くらいするもんだよ。気を落とすことはないって」

「ああ」

兄貴は、クールだけど、けっこう俺のことをいつも励ましてくれる。

「でも、人生長いから、ここで絶対に結婚をしなくちゃならないってこともないんだし。ま、あせることはないと思うぞ」

「でも、俺には、瑞希しか考えられないや」

「はは、そっか？付き合ってたまだ、間もないからじゃないのか？」

「それもあるかもしれないけど、でも、今まで付き合った子とは、確実に違ってるよ」

「ふうん。どんなふうに？」

「どんなって言われても……」

「うん」

「瑞希は、特別…」

「は？」

「うまく言えない。でも、瑞希は、俺の素のままを見てくれるし、素の俺でいいって思ってたくれそうだから」

「ふうん。お前は？」

「俺？俺も…。なんかうまく言えないけど、瑞希のどこをとっても好きだな…」

「だから、そこが付き合ってた間もないからだって、言ってるじゃん」「う、そうかな…」

「ま、いつか。お前がしたいんなら、周りがとやかく言うことじゃないよな…。それじゃおやすみ」

「うん」

そっかな。まだ、付き合ってた日が浅いから、こういつふうに思えるのかな？でも、今まで付き合った子は、別に付き合った当初、こんなこと思った子もいなかったけどな。

少し、兄貴の言ったことを考えた。考えてもやっぱり、瑞希のことが好きだったことしか浮かばないから、もう考えるのをやめた。た。

そして、瑞希の携帯に電話した。

「どうだった？あのあと」

瑞希、泣いたりしなかったかなって、ちょっと心配だったんだ。

「うん、なんかあのまんま、進展なし」

あ、声沈んでるな…。

「また挨拶に行くよ。賛成してくれるまで、何度でも行くから」

「うん、ありがと。今日の圭介ね、頼もしかったよ」

「惚れ直した？」

「うん、めっちゃめっちゃ、惚れ直した。やばいくらいだよ」

「あはは、やっぱり？それ以上惚れたらまじ、やっぱりいよ、瑞希」

瑞希も、笑った。あ、良かった。瑞希の声が、いつもの明るい瑞希に戻った。

「来週の日曜日、また行くよ。じゃ、おやすみ」

「うん。おやすみ」

電話を切った。俺はだんだんと、反対されようがなんだろうが、その障害も壁も、全部乗り越えてやるうじゃんって気になっていた。

反対くらいなんだっていうんだ！そんなので俺たちの間は引き裂かれるほどの、そんなやわな関係じゃないんだ！心と心は結びついちゃってるんだよ！誰も、俺たちの愛を邪魔できるやつなんていねえんだよ！……って、ちよつと酔いしれてたかもしれない。

これから来る、思いもよらない、俺と瑞希を引き裂くような出来事を、そのときはつゆとも知らず。

そして、まさか俺のほうから、瑞希に別れを告げることになるなんて、夢にも思わず、俺は何度でも何度でも、瑞希の家に行つてやるって、心の中で叫んでいた。

12 俺の決意

翌朝、瑞希が会社に来て、メールを打ってきた。

「朝、社長に会って、親に反対されてよかったな、障害があったほうか、圭介は燃えるだろうって言われた。」

「あはは！それ当たってるかも。俺、俄然張り切る気になったもん」俺がそう言っていると、瑞希は俺の顔を少し、あきれたって言う顔で見てから、笑った。

でも、さすが笹おじさん。俺の性格わかってんじゃん。確かに、すんなりOKもらえるより、俺、障害があったほうが燃えるかもしれない…。

で、その障害を乗り越え、ゴールする。そっちの方が、結婚するのも感動的かも…って、漫画やドラマの観過ぎかな。

なんかそう思うと、俄然仕事まで張り切る気になってきた。よしや…やったるぞ…ってそんな感じだ。

そんな思い切り張り切ったのが、悪かったのか、翌日、起きたらまた、頭が割れそうに痛くなった。

また、熱は微熱。会社にどうにか着いて、席に座る。瑞希が来て、すぐに俺の顔色が悪いことに気がついた。また、心配かけちゃうよ、俺。

午前中に、もうすぐ終わりそうな仕事を、どうにかこうにか終わらせる。

社長が、もう帰っていいぞって言うから、少しだけ会議室で休ませてもらい、それから、頭痛が落ち着いたので、家に帰ることにした。

夜、瑞希がメールをくれた。

「大丈夫だった？」

「なんかやばいかもしれないから、明日また検査に行ってくる。」

<そんなに具合悪いの？

<帰り、吐いちゃった。頭もものすごく痛い。おふくろも明日は、ついてくるってさ。瑞希は心配しないで。検査してはつきりした方が、安心するだろ？

<わかった。きっと大丈夫だよ。

瑞希に送ったメールを読み返して、ああ、また心配させちゃったなって思った。夜にはもう、落ち着いてたけど、不安は消えなかった。胃はなんでもなかったのに、俺の体どうなってんの？

翌日、また朝、頭痛がして吐き気があった。病院まではおふくろと、タクシーで行った。

検査は、半日かかった。検査っていうのは、具合が悪いときにすると、まじ、きつい。ぐったりしながら、おふくろと、またタクシ―で家に帰った。

翌朝には、少し調子も良かったし、会社に行った。

「おはよう」

瑞希が、声をかけてきた。俺の顔をのぞきこみ、少しほつとしてる様子だった。あ、昨日メールくれたのに、返せなかったっけ。

「検査の結果はいつ？」

「うゝゝん、早くて明日って言ってたけど…」

「そう、明日病院に行くの？」

「一応、予約している」

「そう…」

瑞希は、あまり元気のない返事をした。俺も、瑞希を安心させようって思っ言葉を探したけど、まったく浮かばなかった。

次の日、検査の結果を雨が降る中、親父が車を出してくれ、親父の車で病院に行った。

わざわざ、親父まで来ることないのになって思ったけど、車があったほうがいいだろうって言われた。でも、なんとなく朝から親父と、

おふくろの様子がおかしいのに感じていた。

特に、おふくろ……。朝起きてから、目をあわそうとしない。でも、やけに明るくて、わざと明るくしているのが見え見えだった。親父も、よそよそしく接してきていた。

病院に着く。待合室で待っていると、榎本さんこちらにどうぞとすぐに呼ばれた。そして、なぜだか、レントゲンを撮ることになった。

頭の、レントゲンだ。ＣＴスキャンっていうやつだ。頭？なんで頭？疑問だらけの俺のことをよそに、どんどん準備が進められていく。

検査が終わって、また、待合室で待つことになった。ずっと、親父もおふくろも黙っていた。

「ねえ、親父、会社に行かなくていいの？」

「あ、ああ。今日は休みを取った」

「…あのさ、なんで頭なの？」

「え？」

「だから、ＣＴスキャン」

「ああ、一応念のためってやつだ。ほら、頭痛がひどかったしな」

「ふうん…。で、なんの疑いがあるの？俺」

「え？」

「この前、ちょうどテレビでやってんの観た。っていつても、もうその人は、40代の人たちだったけどさ」

「何？どんなテレビ？」

おふくろが、少し不安げに聞いてきた。

「脳溢血とか、脳卒中とか…、突然死した人もいたっけ。でも、突然死っていつても、その前から頭痛や吐き気があったらしくて、それを病院で調べもせず、働いてたって。で、突然倒れてそのまま死んじゃった…」

「……」

親父も、おふくろも黙り込んだ。

「…そういうやつじゃないの？俺も、ちょっと、体酷使してきたし」

「うん、まあ、その辺がどうなのかをはっきりするためにも、検査したんだよ」

「そういうのって、治るの？」

「もちろんよ！」

おふくろが、突然、そう言い切った。親父は何も、言わなかった。午前中に呼ばれそうもなくて、昼を食べに行った。その間も、なんだか、会話がなかった。

午後、やっと呼ばれて、診察室に3人で入った。

「榎本さん、レントゲン写真ができましたので、どうぞ、見てください」

「はい…」

見てもさっぱり何がなんだか、わからないけど、先生がなにやら説明を始めた。それに、血液検査の結果とかも教えてくれたけど、数値がどうのこうの言われても、さっぱりわからない。

「で、検査入院をしましょう」

「え？」

いきなりのことで、俺は驚いてしまった。まだ、検査するの？

「いや、もう1度詳しく検査したうえで、治療法を考えていくということで…」

「治療法ってなんのですか？なんの病気なんですか？」

「……。お父さん何も、息子さんには？」

「はい。まだ…」

え？何？親父知ってるの？

「お父さんとお母さんには、昨日のうちに来てもらって、お話した

んだけど」

「はい？」

「……圭介君。この前の検査でね、どうも、癌の疑いがあるとわかってね。症状から見て、脳を調べてみることにしたんだよ。だから、CTスキャンもとったんだが……」

「……癌？」

「脳に腫瘍がある。ほら、ここ……」

「……腫瘍？」

「まだ、もつと検査をして、それからでないと、詳しくはわからないんだけどね」

「……。癌？腫瘍？何言ってるの？この医者。」

そのあと、検査入院の説明だの、先生があれこれしてたけど、まったく耳に入ってこなかった。

診察室を出た。まだ、わけがわからない。頭の中が真っ白だった。

「検査入院か……」

親父がぼつりと言った。

「そうよ、まだ、わからないわよ。検査してみないと……」

おふくろは、低いトーンでそう言った。

「そうだな。うん、そうだ」

親父が、そう言ってるうなずいた。それから、俺の肩を抱いて、歩きたした。

「すまなかったな。昨日聞いてはいたんだが、どう圭介に話したらいいか、わからなくて……」

「……。癌って……」

「腫瘍って言っても、良性の可能性もあるからな。うん」

「でも……」

「圭介。気を落とすなよ。わかったな」

「……」

何を言われても、頭の中を通過するだけだった。

夜、瑞希からメールが来た。

<圭介、どうだった？

短い文だ。相当気になっているんだろうな。

「明日から、検査入院することになったよ。でも、心配しないで」
って、一回書いた。でも、また消した。

「検査入院だつて。でも、たいしたことないから」

そう書いて、また、消した。

「俺、癌だつて」

そう書いて、消した。なんて書いたらいいいのか、何を書いても、
どう書いても、瑞希に送ることができなかった。

くなんでもなかったよ。おやすみ。

そう書いて、瑞希に送った。検査入院することも、黙っておこう。
結果がはつきり出るまでは、黙っておこう。

入院している間にも、メールは来た。でも、返事はしなかった。

検査が終わり、家に帰った。それから、結果を聞きに、また、親
父とおふくろと3人で行った。

兄貴と順平には、まだ、何の病気かもわからないから、検査入院
をすることになったと、親父は言っていた。

余計な心配をかけさせたくないとか、そういうことよりも、自分
たちが俺の病気のことを受け入れるのに精一杯で、まだ、兄貴たち
に伝えるまでの余裕がなかったようだった。

ちゃんと、検査の結果が出たら、きっと告げるんだろう。

よく、癌で、余命何年かとか、そういうのは、本人にふせておく
ってドラマで観たことがある。その代わり、周りが辛いんだよな。
でも、ああいうのって、結構本人は気づくもんじゃないのかな。

最近、本人にきちんと宣告をしないといけないのかなんとか、
なんかで聞いたことがある。それ、本当かな？それで、俺にも本当

のことを、言ったのかな？

もし、あとわずかの命ですなんて言われたら、俺どうしたらいいんだろう？どんどん怖さがこみあげてくる。

親父が運転する車の、後部座席におふくろと乗った。俺はずっと外を見ていた。何を言っているのかわからなかった。

病院に着き、すぐに先生のところと呼ばれた。

「榎本さん、お座りください」

先生は、穏やかな表情だった。その表情で、もしかしてなんでもなかったのかと思ったけど、そうじゃなかった。

「検査の結果ですが…」

レントゲン写真を見せられ、また、わからないことをあれこれ言われ…。でも、最後に先生が、

「悪性の腫瘍で、それも、手術をするには、危険な箇所にあります。なので、手術はせず、放射線治療と、抗がん剤で治療を進めていきたいと思っています」

と、言ったのだけ理解できた。

「それで、治るんですね！」

おふくろが、先生に顔を突き出して聞いた。

「……」

一瞬、先生の顔がこわばった。でも、すぐにまた、穏やかな表情になった。ああ、この穏やかな表情は、つくりものだってことがわかった。

「癌の進行が早いんです…。持って、半年か1年か…。いえ、治療によつては、もっと延命する場合がありますが。どの位と言われても、はつきりとお答えするのは…」

「助からないんですか？」

親父が叫んだ。

……。俺、ここにいいの……？

こういうのって、本人がいなくて、するんじゃないの？
よく、ドラマであるじゃん。親がこういうことを聞いて、助けて
くださいとかって、泣いてるやつ……。で、本人にはさ、隠してたり
いや、告げたとしても、同時に医者から聞いたりしないだろ？

「全力は尽くします」

全力って何？何を医者ができるっていうの？

……っていうか、…待って。

……俺、死ぬの……？

次に訪れたのは、真っ暗闇。目の前が真っ暗ってこういうことを
言うんだ。先生と親の会話も、まったく、そう、まったく聞こえな
くなった。

診察室を出た。足がふらふらだった。気がつく、親父に支えら
れていた。それすらわからなかった。親父とおふくろの顔を見たら、
二人とも、真っ青だった。

会計を待っている間も、親父が俺のことをがちりと、支えてい
た。俺は自分が震えていることに、気がついた。手がカタカタカタ
カタ小さく小刻みに震えている。

やばい……。崩れていきそうだ…。

心の中で俺は、叫んでいた。

「瑞希！」

真っ暗な闇の中に、ぼうつて浮かぶのは瑞希の顔だった。崩れて
いきそうな意識の中で、瑞希の泣いている顔が浮かんた。

俺の意識が、戻った。ああ！どうやって、瑞希に言おうか…。

おふくろが会計をすまして、戻ってきた。俺は自力で立ち上がっ
て、親父の手を振り払った。

「大丈夫だから、もう」

そう言つと、親父とおふくろは、困惑した表情になつた。俺にどう接していいか、どう話したらいいのか、わからない様子だつた。でも、俺の頭の中は、瑞希のことではいっぱい、親のことなんて考えていらなかった。

家に着いた。

「ちよつと、部屋に行つて休むよ」

そう言つと、2階へ俺はあがつていった。

部屋に入る寸前、リビングから泣き声が聞こえた。おふくろだ。俺がいたから精一杯我慢をしたんだろ。限界になつて、泣き出したんだな。

俺は静かにドアを閉めた。それから、ベッドに寝転がつた。リビングから何も、聞こえなくなつた。

入院してたときも、ずっと瑞希に連絡を入れてなかった。結果が出たらつて思つてたけど、こんな結果、どう伝えたらいいんだ。

どう考えても、考えても、瑞希に言つてはならない…。そうしか思えなかった。瑞希がおふくろのように、泣き崩れていくところしか思い浮かばない。そんな瑞希を見てもらえない。そんなの耐えられない。

じゃあ、どうしたらいいんだ。このまま、ほっぽつておくのか？それとも、どうしたらいいんだ。

ずっと、ずっと、それを考えた。どうしたら、瑞希は苦しまなくてすむのか。どうしたら、悲しませなくて、すむのか。

俺と一緒にいたつて、苦しむだけだ。だったら、今すぐにでも、別れたらいいんじゃないのか。

「ああ、そうだ。それしかないよ…」

いつの間にか外は真つ暗になつていた。ドアをノックする音がして、おふくろが声をかけてきた。

「圭介、夕飯食べれる？」

「ああ、うん。今行く」

ベッドから立ち上がり、一階におりて行った。

親父はもう、席についていた。順平と兄貴はまだ、帰ってきていなかった。俺は、兄貴たちが帰ってくる前に親父たちに、瑞希と別れることを告げた。

「え？でも……」

おふくろが、何か言おうとした。

「それで、いいのか？圭介……」

「うん、だつて、このままいても、苦しめるだけだし……。結婚なんてとんでもないしさ……」

「……。圭介……」

おふくろは、見る見るうちに目を真つ赤にさせた。そして、そのまま、ダイニングのドアを開けて、寝室に入ってしまった。

きつと、泣いてる……。親父は、黙ったまま、うつむいていた。

「絶対、誰にも、言わないでくれる？家族のほかの誰にも、俺が病氣だつてこと。瑞希にも、絶対に知られたくない」

「……。お前はそれで、いいのか？」

「……俺は悪者になってもいいんだ。でも、瑞希を苦しませるのは嫌なんだ。それが一番辛いんだ」

「……そうか。わかった」

黙つて、もくもくとご飯を食べた。そして俺はさつさと、部屋に戻った。

そして、瑞希から毎日来ていたメールを見た。

<圭介、大丈夫？

<圭介、検査は終わったの？

<いつ、会社には来られるかな？

<日曜は、家に来るの？

ああ、日曜瑞希の家に、また行くって言ったんだっけ。賛成してくれるまで、何回も行くって俺言ったんだっけ。

どんなに反対されても、行くって…。誰も俺たちの間を引き裂くことはできないって…。そう思ってた。なのに…！なんで…？なんで、俺、こんな病気になってるんだよ…！

悔しかった。情けなかった。ずっと隣にいるからって言ったのに、その約束も守れない。

でも、このまま一緒にいたら、瑞希をずっとずっと、苦しめることになる。もうすぐ死んでいなくなる俺のそばになんていたら、瑞希はどんなに毎日、苦しい思いをするんだろ。そう思うと、耐えられなかった。

ごめん、瑞希。ごめん…！俺、ひどい男になるよ。だけど、どんなに憎んでも、嫌ってでもいい。そして、とっとと忘れてくれていいから！

瑞希からきていたメールを、一つ一つ消そうとした。でも、やっぱりずっと、死ぬまで瑞希の思い出でもいいから持っていたい、瑞希を感じられる何かを持っていたいって思ってた、消すのをやめた。女々しいかな…。でも、思ってるだけならいいよね…？

電気もつけずに、俺は、ずっと携帯の画面を見てた。そして、明日、瑞希に別れを告げる決心をしていた。

翌朝、早くに起きて、一階におりて行った。

「会社に行くの？」

おふくろが聞いてきた。目が真っ赤で、泣きはらした目だった。「うん」

それだけ言っただけで、ご飯を食べた。今日はあまり、頭痛もなかった。

「あのさ、順平と、兄貴には…？」

「昨日、お父さんから話してたわよ」

「それで…？」

「……。あなたが気にすることない」

おふくろは、そうきっぱりと言った。それ以上は何も聞かず、俺は家を出た。

定時ぎりぎりに会社に着いた。着くと、社のみんながいつせいに、

「圭介、大丈夫なのか？」

と、聞いてきた。

「すみません、ずっと休んじゃって…」

社長も心配そうに来て、

「もう大丈夫なのか？」

と、聞いてきた。

「はい、仕事たまってますよね」

「ああ、みんなで分担してたから。それより、無理するなよ」

「はい」

ああ、みんなにもたくさん、迷惑かけてる。

デスクに行くと、瑞希が、心配そうに俺の顔を見た。

「あ、ごめん、何度かメールくれてたのに…」

「うっん」

瑞希は、それしか言わなかった。必死で、つくり笑いをしているのがわかった。

瑞希は、どんなに心配をしたんだろうか。俺の病気はなんなのかとか、きっと、ずっと考えてたに違いない。でも……。でも、それも今日で終わりにする。

「圭介、ご飯食べない？おごるよ」

仕事を全部かたづけける勢いで、必死に仕事に集中していたからか、ずっと、瑞希は声をかけてこなかったが、昼になって、そう声をかけてきた。

「仕事たまってるし、弁当買って、ここで食べるよ」

なんだか、今は瑞希と面と向かって、話をできる状況じゃなかった。それに、少しでも仕事を終わらせたかった。いつ、また入院してもいいように。

先生との話では、さ来週から治療を始めましょうとのことだった。入院したら、もう、会社には出て来れなくなるだろう。

社長には、ある病気の治療をしないといけないから、しばらく俺が休むことになる。代わりの人を雇ってくれて、どうやら親父が言っていたようだ。

13 別れを告げる

6時になり、瑞希がかたづけを始めた。

「お疲れ様」

そう言つて、席を立とうとしたから、

「あ、俺も帰るよ」

と慌てて、俺も帰り支度をした。ビルから出て、

「ご飯、食つてかない？」

と言つと、瑞希は、

「うん」

と、嬉しそうに答えた。

チクン……。胸が痛んだ。これから、別れを告げるために行くのに、瑞希が嬉しそうにしているのが、すごく苦しかった。

でも、それを悟られないよう、さっさと俺は近くにあるビルの階段を下がつて、お店に入った。

そこは、以前社長に連れてきてもらった店だった。店内は暗く、こういう別れ話をするには、よさそうな店だ。とてもじゃないけど、明るい店なんて行けそうもなかった。

店員が、1番奥まつた席に案内してくれた。席に座り、注文をする。ご飯が終わつてから、切り出そう。それまでは、なんとなく仕事の話をして、もくもくと食べた。

瑞希が食べ終わるのを待ち、コーヒーを頼んだ。コーヒーを店員が運んできてくれた。

俺は、薄暗い店内の中、ずっと、瑞希を見ていた。食べている瑞希も、話している瑞希も。

俺が、あまり話さないからか、瑞希も口数は少なかったけど、それでも、目の前にいる瑞希を、こんなに感じられるのも、あとわず

かだつて思ったら、愛しくて、すんげえ切なくなつて、ずっと見ずにはいられなかった。

コーヒを飲んでいる瑞希は、大人びて見える。瑞希はいつもブラックで飲んでいるけど、その姿は、いつ見ても色っぽかった。

何も話さず、こつやつて瑞希を眺めていたい。もう、何も話すのはやめようかつて思った。俺の病気のことは、すべて隠して、ずっと、こつとして瑞希といられないものか…。

いや、入院したり、治療を受けたら、ばれるに決まつてる…。

「俺、瑞希に話しておきたいことがあるんだ」

「何？」

瑞希は不安げな顔をした。

「うん、実はさ、親父とおふくろとも、話していたんだけど」

「何…？」

瑞希は、ますます不安げになる。

「…結婚、やめない？」

「え…？」

「瑞希の両親に反対されるのも、無理ないつて、なんかおふくろもやつと冷静になつて」

瑞希は、目を丸くして、黙りこくつた。

「ああ、あのさ。俺もまだ、早いつて言うか、もう少し独身でいたいつていうか…」

「…なんで急に？」

「一週間考えたよ。結婚は、はずみでつていうか、親に言われて、その気になつただけかなつて。冷静になつてみたら、やつぱ、早すぎるよ」

「…入院して、そう思つたの？」

「え？」

「だから、検査入院」

「それとこれとは別だよ！」

いきなり、検査のことを聞かれて、ついむきになった。

「でも、いきなりなんで？わからないよ、私……」

「……。だから、だからさ……」

どう言ったらいいんだ。どう言えば、1番瑞希は傷つかないんだ？いや、俺のことはいいんだ。どんなやつって思われても……。

「お母さんもなの？」

瑞希が聞いてきた。

「そうだよ。冷静になってみたら、結婚なんておかしいってさ」

ああ、おふくろも悪者だ。

「部長も？」

「親父も、そう言ってた」

親父もだ……

「……。圭介もそう思っの？」

「うん。やっぱり釣り合わないよ。俺ら……」

「結婚、やめるだけ……だよ」

「え？」

「付き合っっていくんだよね、これから」

……違うよ。瑞希、もう、別れるんだよ……。

「瑞希、他に相手探した方がいいよ。俺、いつ結婚なんて考えるかわからないから」

俺、もう結婚、できないんだよ……。

「……。本気？」

「本気……」

したくつたつて、できない……。

「本気？本当に？なんでこっち見ないの？」

瑞希……。ごめん……。俺は心とっらはらに、感情を押し殺し、瑞希をなるべく冷たい目で見えるようにした。ただ、何も考えず、何も感じず、まるでロボットになったかのように、俺はすべての感情を消して、瑞希を見た。

「だから、メールもくれなかったの？」

「うん」

「だから、日曜も来なかったの？」

「うん」

「うちの親に反対されたから、それで？」

「それだけじゃなくて、いや。瑞希のお母さんの言うこと、もっともだなんて……」

ああ、これじゃ、瑞希のお母さんまで悪者だ。

瑞希は、黙りこくった。黙ったまま、俺を見ていた。そして、大粒の涙を流した。やばい！俺の心が動揺する！

「もし、会社と一緒にいづらかったら、俺がやめてもいいし……」

「え？」

「俺のほうが若いから、どっかすぐに見つかるよ」

仕事なんて、もうこの先、できるわけないけど……。

「私、結婚そんなに考えてない。結婚ができなくても、圭介の隣にいられたらそれでもいい……」

瑞希、お願いだから。一緒にいられないんだよ。頼むから、それ以上、言わないで……。

「俺、悪いけど、もう付き合えない」

「え？」

ああ、もう俺、すげえ悪者になってもいいから。もう俺のことはあきらめてよ！

「俺、やっぱり、同じくらいの年の子の方がいい」

瑞希の顔が、曇っていく。どんどん沈んでいく。

「圭介、会社辞めなくてもいいよ……」

「え？」

「私が、辞める」

「でも……」

「私、圭介が隣にいないのに、会社にいけない。絶対に辛くなる……」
そう言っていると、瑞希はポロポロ泣き出した。我慢の限界が来たのか、うつむいて、泣き出してしまった。

ちきしょう！

「先に出るよ」

そう言って、俺はレシートを持ち、金を払って店を出た。

どんどん、どんどん歩いた。頭の中には、瑞希の泣き顔がずっと消えなかった。

悔しかった。瑞希が泣いてても何もできない自分。それどころか、瑞希を泣かしているのは、俺だ。でも、このまま一緒にいたら、もっと苦しめる。

俺はもう、瑞希を悲しませたり、苦しめたりする存在でしかないのか？もう瑞希のことを愛して、大事にして、守ってあげられないのか。

悔しくて情けなくて、涙が出た。俺は道の真ん中で、泣き出した。止まらなかった。

でも、必死に歩いた。もし、瑞希が追いかけてきたら、こんな泣き顔を見られたら……。そう思うと、足を止めることはできなかった。必死で歩いて、泣くのもこらえた。電車に乗り、家に帰った。

家に着くと、食卓には親父も兄貴も順平もいた。みんなで黙って、席に座っていた。暗く、重たい空気が流れていた。

まるで葬式だ。家族全員が暗い表情で、俺を見た。

「おかえりなさい。ご飯は…？」

「食べてきた」

「そう…」

「あ…」

「え？」

いつせいにみんなが、俺を見た。

「うん、瑞希と別れてきた…」

「……」

みんな沈黙した。それから親父が、

「そうか…」

と、一言だけ言った。

俺は、自分の部屋に行った。その重苦しい空気の中、いてもたってもいられなくなった。

ベッドに寝転がると、瑞希の泣き顔が浮かんだ。浮かんでは辛くなり、頭から追いはらう。でも、また浮かんでくるの繰り返しだった。

瑞希はあのまま、店で泣いていたのだろうか。はたして一人つきりにして、大丈夫だったのだろうか。送らなくても、一人で帰れるだろうか。

次から次へと瑞希が心配になり、何度か携帯に手をやった。でも、そのたびに、

「もう、終わったんだ。もう、別れたんだ…！」

と、自分に言い聞かせた。

瑞希は、会社を辞めると言った。明日は？来るのだろうか。

会うのがすげえ、怖かった。このまま、会社に行くのをやめようとも思った。でも、心の中で、まだ瑞希に会いたいってそんな思いもあった。

複雑な気持ちのまま、俺はいつの間にか寝ていた。

翌日、定時を過ぎても瑞希は来なかった。社長に、瑞希は会社を辞めたのかを聞いたかったけど、聞けなかった。

瑞希は、とうとうその週、顔を出さなかった。社長も、何も言わなかった。

ああ。辞めてしまったのかもしれない…。このまんま、もう、瑞希には会えないのかもしれない。

自分で別れを決め、別れを告げたのに、瑞希に会えないのが、辛くって、苦しくって、おかしくなりそうだった。

14 会いたくて

土曜の午後、いきなり瑞希のお父さんから家に、電話があった。おふくろが出て、慌ててていた。

受話器からもれてくるくらい、お父さんは怒っていた。結婚をさせてくれと言っておいて、いきなり別れるとはなんだ、これから話を聞きに行くぞ！そう言って電話を切った。

これから、瑞希のお父さんが、うちにのりこんでくる！

「どうしましょう、お父さん。瑞希さんのお父さん、怒ってたわ」

「…それはそうだろう。たいした理由もなく、断ったんだからな…」

「ああ、この前ね、瑞希さんから、電話があつたの」

「え？」

「なんで、急に圭介が別れを告げたのか、わからないみたいで、私に聞きたかったんだと思うの。でも、私、なんて言っていないかわからなくて、すごくつつけんどんに冷たくしちゃったのよ」

「おふくろ…」

「まあ、そう気にするな。いいか、圭介も、お母さんも慌てるな。」

ただし、柴田さんが怒るのは無理もないんだ。謝るしかないんだよ」

「…うん、わかつてる。でも、お願いだから、本当のことは、言わないでくれる？頼むから」

「そうよね…。そうよ。瑞希さんをこれ以上、苦しめたら、かわいそうよ」

「わかつてるよ。圭介、母さん」

一人で来るんだろうか、瑞希も一緒だろうか。

俺は、怖かった。瑞希がもし来たら、どういう態度をしたらいいのか。謝って、それですむのか。それより、俺の本音を言ってしまうのか。

本当は俺は、瑞希と一緒にいたい。かたときだつて、離れたくはない。ずっと、俺が死ぬまでずっと…。でも、そんなわがまま絶対に言えない。

1時間くらいたつて、チャイムが鳴った。

おふくろがドアを開けると、かなりの剣幕で、瑞希のお父さんが入ってきた。玄関でいきなりまくしたてて、あの優しい、穏やかなお父さんが豹変してしまうとはって、本当に驚いた。

瑞希は一緒じゃなかった。少しほつとした。でも、やっぱりどうかで、瑞希に会いたいつて気持ちもあつて、自分が自分で嫌になつた。

「結婚したいと言つてきたよな？え？圭介君。それが一週間やそこらで、なんで、やめるつて言い出した？」

「すみません…」

「うちのやつが反対はした。でも、瑞希は本当に圭介君のことを、信頼してた。それが、なんで急に手のひら返したみたいに、結婚をやめるどころか、別れるなんて言い出すんだ？え？」

「……。すみませんでした」

俺は、ただただ、謝るしかなかった。おろおろしてたおふくろも、一緒に頭を下げた。親父はリビングで、黙つて見ていた。

「なあ、圭介君。どういふことが、もつとちゃんと説明してくれないか？」

「いえ、すみません。理由は瑞希さんに言つたとおりです」

「気が変わったということか？」

「はい…」

「そんな簡単な想いだつたつて事か？それとも、瑞希が何か、12も上で嫌になつたか？」

「いいえ…」

「それとも、遊びだったのか、からかって楽しんでいたのか？」

「いいえ…」

「じゃあ、なんだ。なんで結婚まで考えてたのに、いきなりやめると言い出すんだ？他の理由はなんだっていうんだ？」

「すみませんでした！」

俺はその場で土下座した。あの穏やかなお父さんがここまで、豹変するようなどんでもないことを、俺はしたんだ。それだけ、俺は瑞希を傷つけたんだ。

お父さんが、こうやって、乗り込んでくるぐらい瑞希は、傷ついたんだ。

「柴田さん、本当にすみません。あの、圭介もこうやって、謝っていることですし、わかっていただけないでしょうか…？」

おふくろは、泣きそうな声でそう言った。

「いいや、わからん。瑞希の前でも、こうやって、頭を下げてもらおうか？瑞希が納得する理由をきちんと話してもらおうか？」

「すみません、それはできません」

瑞希には、会えない！

「なんでだ！なんでできない？」

「柴田さん！」

親父が、リビングから出てきた。

「まあ、玄関で話しているのも、なんですから、リビングで落ち着いて話しませんか？」

「親父！」

「いいから、圭介…」

親父は、瑞希のお父さんを家にあげ、リビングに通した。そして、

「まあ、おかけください」

と、ソファに座るように言った。

「…話を聞いていました。口はいつさい出さないつもりでしたが、

やはり、柴田さんが頭に来るのも無理はないでしょうし…。真実を言ったほうが、いいと思いましてね」

「親父！約束したじゃんか！」

「いいから、圭介」

「約束…ですか？」

瑞希のお父さんが、反応した。ああ、やばい。

「…話してもらえますか？榎本さん。全部を…」

「…はい」

親父はそう言うと、俺の病気のこと、もう長くは持たないことを告げた。瑞希のお父さんは、しばらく黙っていた。

「お父さん、あの…。このことは絶対に瑞希には黙っててください」と、俺は瑞希のお父さんに頼んだ。

「え？なんでだ？」

「瑞希さんを苦しめたくはないんです。だから、圭介は嘘をついたんです」

おふくろが、泣きながらそう言った。

「私も、圭介と同じで、瑞希さんを苦しめたくはないって思ってます。どうか、瑞希さんには黙っていてください」

「そういうわけにはいかない、圭介君」

「でも…」

「もし、僕の妻が病気になったら、僕は逃げ出さずに看病をするだろう、夫婦だからね」

「でも、まだ、俺たちは結婚してません」

「結婚を考えた仲だろう？確かに、結婚はまだだ。これから、瑞希は圭介君のそばにいて看病をするのか、それとも、結婚していないのだから、離れるのか、それは、君たちが話し合って決めることだ」

「え？」

「瑞希には、きちんと話して。瑞希の意見も聞くといい」

「……。瑞希の？」

「そばにいるかどうかを、瑞希に決めさせてやってはもらえないかな」

「……。でも、俺は……」

「もし、君の病気が結婚してからわかったことなら、どうだった？
その苦しみも全部を夫婦で、共有するものじゃなかったのか？」

「……」

何も言えなかった。そうだ。もし、もう、結婚していたなら。でも、それは、もしの話だ。今は結婚もしていないのだから。

「瑞希には、話す。すべてを聞いて、きちんと話すと約束をしてきたのでね。君も、もう一回、瑞希と話をしてくれ。頼んだよ」

「……はい」

そう言つと、瑞希のお父さんは帰って行った。

力が抜けた。

「お父さん、なんで本当のことを？」

おふくろが、親父に聞いた。

「ちゃんと言わないと、柴田さんは、納得しなかったと思うよ。真実をすべて聞く気で、きたんだろ。聞くまでは帰らないくらいの気持ちでね」

「圭介、あなたどうするの……？」

「うん……、ちよつと、考える……」

そう言つて、2階にあがった。

俺は想像した。瑞希がお父さんから真実を告げられてるところを……。聞いて、瑞希はショックを受ける。相当落ち込む、いや、泣くかもしれない。俺に会いたいつて言うかな。もし、会ったら？きつと、泣くかな……。

その時、俺はどうしたらいい？どう慰めたらいい？瑞希の泣くの

を、見ているだけ？何もしてあげられないのか？

もし、もし瑞希が、俺の病氣のことを知って苦しむのは嫌だから、もう会わないって言うてきたら？向こうのほうで、俺のこといやになっただら？

いや、それはそれで、いいんだ。そう、そのほうが瑞希は苦しまなくてすむ。けど…、やっぱり、それはそれで、辛いなって思っている自分がいる。

結局、俺は、自分のことしか、考えていない。瑞希にどうなってほしいかってそんなこと、考えてない。

でも、一緒にいて、幸せになれないのは確かだ。だったら、やっぱり会わないほうがいい。

会いたい！瑞希の顔が見たい！でも…。それが俺のエゴなら、会わないほうがいいんだ。

まる１日悩んだ。親父は何も言わなかった。おふくろは、瑞希さんのことを本当に思うなら…、別れた方がいいって言うてた。

だけど、瑞希はもう俺の病氣のことを知ってるんだ…。

このまま、ほっておくわけにはいかない。電話をして話さないと…。でも、電話したら会いたくなるんじゃないのか？

いや、会わない。電話して、ちゃんと本当のことを言うて別れよう。本当の弱い自分、全部見せて嫌われてもいいから…。

そんな結論を自分の中で出して、勇気を出して瑞希に電話をした。

声を聞いて崩れないか、怖かったけど、どうにか手に力を入れ、携帯を持ち電話した。

「もしもし…」

「…うん」

瑞希が、出た。瑞希の声だ…。

「瑞希の、お父さんが来た」

「うん…」

「話、聞いた？」

「うん…」

さつきから、瑞希はうんしか言わない。

「ごめん…」

「……。何が？」

「嘘ついてたことも、苦しませてたことも。悲しませてたことも…」
なんか、言い出したら、全部全部、謝らなくちゃって気になった。
「これから先、そばにいられないことも、守ってあげられないことも、幸せにしてあげられないことも…。全部、ごめん…」

瑞希は、黙ってた。でも、息使いで泣いているのがわかった。

「俺、瑞希に会わないほうがいかなって思ってる」

「嫌だ」

「え？」

「謝るなら、ちゃんと会って謝ってよ」

瑞希…。でも、俺会ったら、謝れるかどうか…。

「今日、これから会って」

「今から？もう8時過ぎだよ」

「圭介の家に行くから」

本気？

「わかった。俺が行くよ」

「大丈夫、私が」

「じゃ、どっかで待ち合わせしようよ」

待ち合わせ場所を決めて、電話を切った。

会わないつもりだったのに…。会って、俺、冷静でいられる自信がない…。でも、会いたかった。すんげえ会いたかった。声聞いて、もっと会いたくなった。

だけど…。これで、最後にする。

待ち合わせの駅の改札の前で、瑞希を待っていた。ここまでは車で来て、駅前に止めて来た。

緊張した。でも、やっぱり会いたい気持ちが勝ってて、会うのを楽しみにしてる俺もいる。だけど、ちゃんと謝ったら、それでoshiまいにしよう。でも…。

最後に、車で送っていてもいいよね。そうしたくって、車で来た。

「圭介」

え？後ろから瑞希の声がした。なんで？振り返ると瑞希が立っていた。

「あれ？どこから来たの？」

「修二が送ってくれた」

「そっか…」

瑞希だ…！すっげえ嬉しくなった。でも、胸が苦しくもなった。

「どっか店はいる？でも、この辺には、あいてるとこ、なさそうだね」

駅前を歩いてみたけど、店もあまりなくて、あっても閉まっていた。

「車で、ちょっと出たらあるかな」

瑞希は黙って、俺のあとをついてきてた。車に乗って、すぐに発進した。

「そのへんの路地に止められないかな」

瑞希が、聞いてきた。

「あ、うん。公園の横なら、止められるかも…」

俺は、公園の横に車を止めた。エンジンも切ると、車内はしゅんと静まり返った。

「瑞希、なんか痩せたね…」

さっき、駅で瑞希を見たときにそう思った。

「あまり、最近食欲なくて、食べてなかったから痩せたかな。ダイエットしたかったから、よかったよ。痩せて…」

瑞希の顔を見た。目が腫れてた。

「目、腫れてる。泣いてた？」

「う、うゝん。不細工になってるでしょ」

そう言って、瑞希は自分の顔を手で隠した。

「ごめん…」

「何で？別れ話をしたから？」

「悲しませたから…」

「圭介は…？悲しくなかった？苦しくなかった？」

俺？俺のこと心配してんの？

「俺のことはいいんだ。それより、瑞希にきちんと謝らなくちゃ…、俺」

「謝らなくて、いいよ。別に…」

「え？でも、会って謝ってって」

「会いたかっただけ…」

…瑞希も？俺に？

「瑞希…。会社、辞めた？」

「社長から聞いてない？」

「うん、何も…」

「まだ、辞めてない。しばらくお休みすることにしてくれてる」

辞めてなかったんだ。

「そっか…」

「圭介は、会社行ってるの？」

「うん。今はね、でも、新しい人入れてもらうよう、頼んだんだ」

「何で？辞めるの？」

「うん。入院しなくちゃならないし。会社には行けそうもないから」
瑞希には、きちんとそのへんのこと、言っただ方がいいよね…。

「さ来週から、入院して治療始める」

「うん…」

そして、ちゃんと言ったほうがいいんだ。これが最後だって…。

「瑞希のお父さんが、きちんと瑞希と話さないって。でも、俺、瑞希が悲しんだり、苦しんだりするの、見るのが1番辛くてさ。ごめんね…。俺、弱いよね。とても、苦しむ瑞希、受け止められそうもない。だから、逃げたんだ…」

情けない俺を、瑞希に見せた。

「それだけじゃない。俺と一緒にいて、辛くなって、瑞希が遠くに行ったりしたら、もつと辛いから、そうなる前に、俺のほうから、遠ざけようって思った」

もつと、弱い俺を見せた。そうやって、俺のことを、瑞希が嫌いになったらしい。

「話し合うも何も、俺は…」

「…何？」

「もう、瑞希には、会わない。いや、会えない。やっぱり瑞希が悲しむのは見たくない。そう思ってる」

「そう。でも、別れを告げられても、私すごく悲しい思いをするよ。それはいいの？」

……！いいわけない！いいわけないけど…。

「わかってる。だけど、何日か、何ヶ月かしたら、忘れられる。でも、もし俺と一緒にいることになったら、これから何ヶ月苦しむのか、わからないじゃないか」

「そんな何日とか、何ヶ月で、忘れろと思ってるの？もし、あのまま別れてたら、私一生結婚もできなくなってたかもしれないよ」

「え？なんで？」

「結婚しようって言われたのに、別れを言われて…。元彼だって、結婚の話をしたとたん、別れ話をしてきちゃって。私2回もそんな

ことあったら、絶対結婚怖くて、できないと思う。それどころか、恋だって、できない。好きな人だって、できない」

俺のせいで？ずっと……？瑞希は、俺と今別れたら、もうずっと恋もできなくなる？好きな人も……？

「だから、圭介と、今、別れたからって、私が悲しまないとか、苦しまないとか、そんなこと思ってるとしたら、まったく逆だから」
「でも、瑞希。俺、ずっとそばにいてあげられないよ。ずっと、守ってあげることもできないよ。そんないつか、別れが来ること知りながら、一緒にいたら苦しむよ」

瑞希は、黙ってた。

ああ、やばい。だから、会ったら冷静でいられなくなるって思ってたんだよ。目の奥が熱い。胸が苦しい。泣きそうだ、俺……。必死で涙が出ないよう、目を押さえた。瑞希は、まだ、黙ってた。

でも、次の瞬間、瑞希が俺の腕に触れた。びっくりして、瑞希を見た。瑞希は、まっすぐに俺の目を見た。瑞希は泣いてなかった。ただ、俺の顔を見ていた。瑞希の目は、あったかく、優しく、俺を包み込むような目だった。

それから、そつと俺の背中に手を回してきて、俺のことを瑞希のほうに、引き寄せた。あったかかった。瑞希の匂いがした。

瑞希は、そのまましばらく黙って、俺のことを優しく抱いていた。
「瑞希……？」

何も言わない瑞希の心の中が、気になって声をかけた。

「圭介は、わかってない」

「え？」

「私、こうやって一緒にいられたら、それでいい」

「だけど、どのくらい一緒にいられるか、わかんないんだよ。1年か、半年か……」

「未来のことなんていい。だって、誰にも明日のことはわからない。

元気な人も、いきなり死んじゃうかもしれない。みんなわかんないんだよ?」

「…そうだけど、でも俺、何も瑞希にしてあげられないよ。苦しめることしか…」

「だから、こうやって、ここに居てくれるだけで、幸せなんだってば…」

幸せ…?

瑞希は、俺の両手を握ってきた。そして俺の顔を見ながら、

「ね、圭介。私泣いてる? 悲しんでる?」

と、聞いてきた。

「いや…」

「ね、今、私、幸せだよ」

今、幸せ?

「だから、それでいいの。圭介、今に生きよう」

「…今に?」

「そう、誰だってね、明日はわからないの。でも、今にみんな生きてる。今は、生きてる。今は、圭介、生きてるよ」

今? 今に生きる…? 今、そうだ、俺は生きてる…。

思わず、涙がこぼれた。

「瑞希…」

瑞希がそんなことを言ってくれるなんて思わなかった。

会ったらまた瑞希を泣かせて、悲しませて、苦しめるだけって思ってた。瑞希を俺が幸せにできるなんて、絶対にもうできないって思ってた。

でも、今、今ここに、俺が居るだけで、幸せだって言ってくれる。涙が止まらなかった。瑞希が俺のおでこにおでこをくっつけてきた。瑞希の匂いにする。

会いたかった瑞希が今、目の前にいる。俺は、嬉しくって泣いているのか、それすらもう、わからなかった。

瑞希は、俺の前髪をあげた。そして俺の涙を手で拭いてくれた。それから俺のほっぺたにキスをした。すげえ優しいキスだった。それから俺のことを、ぎゅうって抱きしめてくれた。

「圭介が好き、圭介が好き」

瑞希が耳元で、そう言った。

…瑞希！

俺も瑞希を抱きしめた。

「圭介が、病気だってね、関係ないよ。弱くても、泣いてても、どんな圭介だって、私は大好きなの」

瑞希！

俺はもう一回瑞希を、抱きしめた。

「うん」

一言、そう言うのと、それにつられてなのか、涙がまた溢れ出した。心の中にしまっていたたくさんの感情が、一気に溢れ出してきた。

「瑞希、俺、すげえ怖くて…」

「うん…」

「すげえほんとは、怖くて、死ぬのも、瑞希失うのも…」

「うん…」

「ほんと俺、瑞希と一緒にいたくて、会いたくって、こっぴどく抱きしめたくって」

「うん…」

「俺も、瑞希がすげえ好き」

「…うん」

絶対に言っちゃいけないって思ってた、俺の本音を全部瑞希に言ってた。

「圭介、私が泣いてても、悲しんでいるって思わないでね」
「え？」

「私、圭介が好きで、愛しくて泣いてるだけだからね」
「…うん、わかった」

瑞希の涙を俺の手でぬぐってから、ほっぺにキスをした。それから瑞希を抱き寄せた。瑞希が愛しくって、嬉しくって、瑞希のすべてを全身で感じてた。

しばらく、泣いてると、ようやく涙はおさまってきた。瑞希に無性にキスをしたくなった。でも…。

「瑞希…」

「ん？」

「俺、鼻水も出ちゃった」

「ええ？」

「ティッシュ」

そう言って、瑞希にダッシュボードにのってたティッシュの箱を取ってもらった。鼻をかんで、車内灯をつけて、バックミラーで自分の顔を見た。

「ああ、ひでえ、顔。親、びっくりするだろうな！」

「つい、そんなことを口ばした。」

「ずっと、泣いてなかったの？」

「うん、一回泣いたら、崩れそうで、親のほうで泣いていたし…」

「部長も？」

「うん、泣いてた」

「親父も、最近、目腫れてたもんな…」

「じゃ、圭介、我慢してたの？泣くの…」

「我慢？じゃないかな…。でも、押さえてたな…」

「なんか、そういうの全部考えないようにしてた。どうやってたら、

瑞希のこと苦しめないかとか、親の前で泣いたら、もつと親が苦しむかなとか、そんなことばっか、考えて」

「そんな、人のことばかり？」

「そうやって、忘れたかった。自分の病気や死を考えるのも嫌で…考えたくもなくて…」

「そうなんだ、俺は考えないようにずっとしてたんだ…」

「あ、でも泣いたら、すっきりしたや」

瑞希を見て、瑞希が優しい目で見てたから、俺も、笑った。

「泣きたいときは、泣いていいよ。そのときは私、またずっと抱きしめているからね」

…瑞希、なんでそんなに優しいんだよ。

「ああ、そうだ。いつでも、私の胸は圭介のために取っておく。いつでも、私の胸でお泣き」

「あははは！下手な芝居見てるみたい。何？それ！」

「ふふ…」

ああ、いつもの瑞希の笑い方だ。

時計を見ると、もう、11時近かった。

「わ、もうこんな時間？送ってくね」

そう言ってから、瑞希のシートベルトを締めた。

「あ、さっきキスしようと思ったんだけどさ」

「え？」

「鼻水たれてきて、できなかったんだよね」

「ええ？」

それから、瑞希にキスをした。瑞希のぬくもりを感じられて、すげえ、幸せな気持ちになった。

車を走らせた。外の空気に触れなくて、窓を開けた。何も音楽もかけず、瑞希が隣にいることだけを、ただ全身で感じていた。

「瑞希、俺も今、すげえ幸せ。今は生きてるし、瑞希が隣にいる。」

それだけでいいんだよね」

「うん…」

瑞希は、うなづいて、俺の顔をじっと見ていた。

なんか、信じられなかった。もう会えないと思っていた、瑞希が隣で俺のことを見ている。もう、これっきりにして、別れようって思ってたのに…。

瑞希の、俺に対する想いが痛いほど伝わってきた。優しくてあつたかくて、俺のことを全部包み込んでしまう、そんな想いが…。

俺はいつまで生きられるだろう？でも、最後の瞬間まで、瑞希を愛していたって思った。

最後の瞬間まで、俺も瑞希のことを、包み込めるくらいになれたらなって…。そんなことを思いながら、俺は車を走らせていた。

15 マイナス思考の俺

瑞希を送ってから、家に帰った。もう、12時近かったけど、親父もおふくろも、リビングで待っていたようだ。

「どうだったの？瑞希さん…」

「……。うん…」

ぼりって頭を掻いた。あ、そうだ。俺の顔、泣き顔だった。見られたかな…。少し顔を下げて、見られないようにしながら、

「瑞希とは、別れるのやめた…」

と言った。親父は、ただうなづいた。でも、おふくろは、

「だけど、瑞希さんが、辛い思いをするんじゃないの？」

と言ってきた。

「母さん、二人で決めたらいいことなんだよ。口を出すのは、もうやめよう」

親父が、おふくろにそう言った。

翌日、瑞希は会社に来た。会社の人たちは、瑞希が病気で休んでいたと思っていて、口々に大丈夫？って聞いていた。

瑞希は、やっぱり少し痩せた。本当に食欲なかったんだろうな…。

俺の仕事はほとんど片付いていき、あとは、デスクの片づけをするくらいまでになっていた。

「これ。お弁当」

瑞希が、お弁当をくれた。

「今日のは、母の手作り」

「え？まじ？」

瑞希の家族、みんな俺の病気のことは知ってるんだろうな。

「お母さんさ、俺のこと怒ってない？」

「別に、何で？」

「いや、瑞希のお父さんかんかんだっし。お母さんもめちゃくちや怒ってないかなって」

「ああ、くす…」

「え？何？」

「お父さんね、演技だったんだ」

「は？」

演技って？

「怒ってないよ、この前も冷静だった」

「嘘だ、すごい剣幕だったんだよ。瑞希にも見せたかった」

「そうでもないよ、圭介が真相を話してくれないだろうって…」

「え？」

そっか…。そうだったんだ。あれ、演技だったんだ。わざと怒って見せて、俺がなんでいきなり結婚やめたかを、聞き出そうってしたんだ。

それも、娘のために…。

お弁当、美味しかった。なんか、瑞希の家族の瑞希への愛情が伝わってきた。

「美味しかった。お母さんにお礼言っておいて」

瑞希に、午後、そうっとお弁当箱を渡した。

6時過ぎ、瑞希と一緒に、瑞希の家に行こうって思って、俺の仕事が終わるのを待っててもらった。瑞希は、ちょこちょこっと、デスク回りの整頓をしながら、俺の横で、待っていた。

「木曜から新しい人来るって」

「そう…」

「どうする？瑞希、瑞希好みのすんげえイケメンだったら」

瑞希がキーボードをたたき出した。あ、メールで送ってくるんだな。

＜私の好みは圭介だからな＞。

…そっか。照れるな。

<でも、すごいイケメンなんだよ。めちゃくちゃ、かつこいいやつだったら？

<圭介もすごいイケメンだけど。自分で気づいてないの？めちゃくちゃ、かつこいいよ。

「え？まじ？」

「まじ」

瑞希が、こっちを向いて、即答した。

イケメンって、よくわかんないけど…。どういうのが、イケメンでとかって、さっぱり？でも、めちゃくちゃ、かつこいいは、どうよ？

「それ、あれだよ、恋は盲目ってやつ」

「なんじゃ、そりゃあ」

「あははは…」

ま、いつか。瑞希から見たら、俺はすげえイケメンで、すげえかつこいいやつってことだ。

30分位して、ようやく仕事も終え、瑞希と会社を出た。それから、一緒に瑞希の家に行った。

瑞希のお母さんが、ドアを開けてくれて、

「いらっしやい、圭ちゃん」

と、とても、明るい笑顔で迎えてくれた。

クロもやつぱり飛んできた。ああ、クロにまた会えて俺も嬉しい！クロの首やらおなかをなでまわした。

瑞希の家では、お父さんも、あとから帰ってきた修二さんも、みんながあつたかく迎えてくれ、楽しく食事ができた。

ああ、こんな和やかなムード久しぶりだ。家じゃいつも、みんな葬式みたいに暗くなってる。

食後、リビングに移動した。この前のお父さんの演技だったとは言え、やっぱりきちんと迷惑をかけたことは、謝らないと思い、お父さんに謝ると、

「そんなに謝らなくていいよ、圭介君」

と、優しく言ってくれた。

瑞希がコーヒーを持ってきてから、

「圭介、時間まだある？」

と、聞いてきた。鞆からDVDを取り出し、一緒に観ようと言う。

そのDVDの題名を知り、修二さんが、でかい声をあげた。

「あ、俺それ観たことある！」

なんか、感動の映画なのか、それとも面白い映画なのか？修二さんは、お母さんのことも呼び、リビングにみんなで集まって観始めた。

『天国の青い蝶』という映画だった。主人公の少年は、脳腫瘍で余命数ヶ月。でも、青い蝶を捕まえたくて、昆虫博士に頼み込み、時期はずれなのにもかかわらず、蝶を捕まえに、ジャングルに行く。そして、そのうちにどんどん元気になり、奇跡的にも蝶をつかまえることができ、そして、ジャングルから帰ってきたら、腫瘍が消えていたと言う、実話の映画だった。

瑞希は、これを社長から借りたらしい。社長は俺が元気になって、会社に復帰すると思っているんだとか…。

複雑だった。そりゃ、こんな奇跡が起きたら嬉しいけど…。どうやって奇跡を起こせるのか、俺だってわかってたら、起こしてみたいよ。

何度も、癌だったってのは夢だったって、そう思いたかった。そうなることも願った。

でも、朝の頭痛、そのうえ何回か、朝、けいれんもおこしている。そんな状態で、夢だとか奇跡が起きるとは、とても思えなかった。

そのあと、修二さんが『ザ・シークレット』というDVDを貸してくれた。

「この中にも、乳がんが消えちゃうって人の話出てくるよ」

そういう話は、俺も聞いたことがある。だけど、奇跡って起きちゃうもので、自分でどうにか、起こそうとして起きるものなんだろうか…。

いや。笹おじさんも、修二さんも、俺のことを思ってた貸してくれるんだから…。

俺は、修二さんからそのDVDを受け取って、瑞希の家を出た。

帰り道、空を見上げた。曇ってて、星も月も見えなかった。どんなよりしている空は、なんだか俺の心の中みたいだった。

家に着くと、やっぱりみんなが食卓にいた。もしかすると、俺がいない間にいろいろと、話をしているのかもしれない。

おふくろの目は真っ赤で、順平も目や鼻が赤かった。順平まで泣いてたのかな。

瑞希の家を出てくる前、瑞希のお母さんやお父さんが、うちに泊まりに来るといって、言ってくれた。自分ちにいるより、今日はずっと楽だった。今のこの家は息がつまる。

「あのさ、瑞希んち行ったら、しばらく泊まりに来ないかって言われた」

「え？」

おふくろが、少し驚いてた。

「あ、俺も瑞希と一緒にいたいし、2〜3日、泊まってもいいかな…」

親父のことをおふくろが見た。

「迷惑かけないのか？圭介」

「大丈夫だと思う。今日も昨日もそんなに、具合悪くなかったし」

「そうね…。瑞希さんの家でそう言ってくれてるなら、泊まりに行ってきたら？」

おふくろは、けっこうあっさりとそう言った。

「うん、じゃ、明日から泊まりに行くよ」

そう言って、俺は風呂に入りに行った。

俺がいると、みんな気を使って疲れるんだろうな…。風呂につかりながら、そんなことを思った。入院してた方が、おふくろも楽しんだらうか…。

風呂から出て、目がすっかり覚めてしまい、修二さんから借りたDVDを観ることにした。でも、最初の方はあんまり興味なくて、とばして乳がんの人のところだけを観た。

だんなさんとお笑いのビデオを観て笑って過ごし、自分が癌だということも考えなかったと言ってた。そして、数ヶ月でがん細胞が消えたと言う。

「…忘れることなんて、できんのかな？」

DVDを消して、ベッドに転がった。

忘れようとはした。でも心の奥では、いつも怖かった。近々訪れるであろう自分の死。それを、どうやって忘れられるんだろう？

ちよつと、考えただけでも怖くなる。だから、考えないようにする。だけど、怖いから考えないようにして、いくら、面白いビデオを観ても、やっぱり心の奥底には、あるんじゃないの？怖いって感情が…。

恐怖や、不安や、いろんなマイナスの感情って、いくら追い出そうとしたって湧いてくる。それに、忘れようってしたって、ふたをするだけだ。

「駄目だ、俺には無理かも…」

俺には、青い蝶を捕まえに行くそんな余裕もない。ただただ、病

院でいつまで延びるかわからない、延命の治療を受ける…、それだけしか道はない。

「こえ……。こえ……。よ、瑞希…」

これからのことを考え出すと、いてもたってもいられなくなるほどの恐怖に襲われる。

恐怖をかき消し、鞆に明日から瑞希の家に泊まる用意をして、それからベッドに潜り込んだ。

瑞希のそばに一分でもいたい…。そんなことばかり考えた。そして、瑞希のぬくもりを思い出しながら、布団の中で膝を抱えて、眠りについた。

翌朝、大きな荷物を持って、会社に行った。

「おはよう」

瑞希が出社した。俺が、

「いきなり、今日から泊まりに行っても大丈夫かな？」と聞くと、

「大丈夫だと思うけど…」

って、瑞希は答えた。

ほ……。

ほとんど、仕事は他の人が代わりにしてたから、俺は定時には仕事を終えていた。

「最近、定時に帰れるくらい、仕事ないの？」

瑞希が聞いてきた。

「あ、うん。社長が他の人に、俺の分回してくれてるから。俺、社
のみんなにも、迷惑かけて」

「ストップ」

いきなり、瑞希が俺の口に手を当てて、

「それはなしだよ。迷惑なんてかけてない。わかった？」

と、ちよつと強い口調で言った。

「うん…」

ちよつと、驚いた。なんか、瑞希、男っばいっていうか、強いっていうか…。

瑞希の家に着くと、お母さんとクロが出迎えてくれた。お母さんはさつさと、俺の重い鞆を持って、リビングに行ってしまった。

「あ、それ重いです」

って、言っただけど、俺の足にクロがじゃれついてて、動けなかった。じゃれついてるクロと一緒にリビングに入ると、お母さんが、ご飯にするか、お風呂にするか聞いてくれた。

「あ、先にご飯いただきます。もう腹ペコで…」

それから、上着を脱ぐと、瑞希が来て、上着をハンガーにかけに行った。そういえば、昨日もしてくれてたっけ。

「なんか、瑞希、俺の奥さんみたい」

瑞希は、一瞬固まっていた。嬉しかったのか、それとも？ちよつと複雑な表情だった。

変なこと言っただけかな、俺…。俺の奥さんなんて、なれないのに…、そんなこと言っただけかな。

「ご飯は美味しかった。でも、途中から少し頭痛がしてきていた。

「俺、風呂あとでいいですから…」

それだけ言っただけで、鞆を持って、2階にあがった。

ふう…。やっぱ、気を使ってるのかな、俺。鞆の荷物を出してて、ぐったりしてきて、ベッドに横になった。

本棚を見る。いろんなジャンルの本の中に、「成功哲学」「プラス思考」と書かれた本が混ざっていた。

「お兄さん、こんなの読んでいたんだ…」

ちよつと、プラス思考の本をとって、めくってみた。でも、まったく読む気になれず、また、本棚に返して、ベッドにうつぶせにな

った。

トントン…。ドアをノックする音、それから、瑞希の声。

「入るよ…」

「瑞希？うん…」

俺は、ベッドにうつぶせのままだった。なんか、起き上がる元気も出なかった。

「ああ、ごめん、なんか疲れちゃって…」

「そうだよ、もう休んだら？」

「うん…」

俺はぐるって仰向けになった。天井を見ながら、瑞希に話し出した。

「昨日、修にいが貸してくれたDVDあるじゃん」

「うん」

「乳がんの人のところだけ、観たんだ。昨日、帰ってから」

「うん…」

瑞希は、うんしか言わなかった。

「瑞希、観たことある？」

「ないよ…」

「そっか…」

「どんなだったの？」

「うーん、なんかさ、すんげえプラス思考っていうか…」

「え？」

「けっこうきついかも…」

「…そうなの？」

「うん…」

俺は、胸の中にもやもやしたものがあって、それを瑞希に聞いてもらいたくなった。

「俺あんなに強くないな…」

「じゃあさ、私が一緒だったら？」

「一緒に、プラス思考？」

「そう、大丈夫って、絶対治るって思ってたなら？私もそうずっと思うようにするし、一緒なら頑張れるかもよ」

ああ、瑞希、そんなことを思ってたのか…。

「瑞希に、無理させそう…」

「無理じゃないよ、全然」

「でも…」

「何？」

「……。俺、自信ないな…」

本音が出てた。

「何の？何の自信？」

「癌に、打ち勝つ自信…」

言ってる、少し情けなくなった。瑞希の顔を見れなくて、背中を向けた。

「ごめん、すげえマイナス思考で…。だけど、大丈夫って思えば思うほど、うほど、怖さが出てくる。絶対、元気になるって思えば思うほど、もし、死んだら瑞希を悲しませるって。元気になるって言うておきながら、もし、駄目だったら、もっと瑞希を苦しめるって、そう思うとさ、そう思うと俺…」

とても、頑張れそうにない。とても、プラスには考えられない。それはもう、言葉にできなかった。

「圭介、そんなに弱気にならないで。圭介がそんなに弱気になったら、私だってどうしていいか、わからないよ。こういうのって、本人が生きて決めなくちゃ。ずっと、私と生きてくれないの？ずっと、一緒にいたいって思わないの？」

瑞希…？

そりゃ、一緒にいたいよ、俺だつて。ずっと、ずっと。

「ごめん、そうだよ。俺が弱気になったら、瑞希もどうしていいか、わからないよね。ごめん…」

精一杯の笑顔を作った。瑞希の困った顔を見たくなかった。

俺が弱気になると、瑞希も弱くなるんだ。もう、瑞希には甘えられない。もっと、俺はしっかりとしなくちゃいけない…。

そんなことを思いながら、心の奥はぎゅうって何か重たいものがうずめいて、苦しくなっていた。

16 押しつぶされそうな心

朝、目が覚めた。頭が割れるように痛い。ベッドから起き上がるうとして、気を失った。

「圭介君！」

「圭介！」

遠くから誰かが、さけんでる…？

目が覚めた。ぼんやりと見える修にいの顔と、瑞希のお父さんの顔。

だんだんとはっきり見えてきた。瑞希もいた。すごい青ざめてる。…俺？」

「圭介君、大丈夫かい？」

お父さんは、そう言うのと、俺の体を起こしてくれた。ああ、ベッドから落ちたのか？

「すみません、俺…」

「いいから、ベッドに横になりなさい」

「圭ちゃん、大丈夫なの？今、救急車呼ばうとしたんだけど、病院とか行つたほうがよくない？」

お母さんが、受話器を片手に部屋に入ってきた。救急車…？ああ、俺、またけいれん？

「いいえ、すみません。迷惑かけて…」

「いいのよ、何言ってるの？それより、病院」

「あ、平気です。家でもけいれん起こしたことあって。すぐにおさまりました」

瑞希を見た。座り込んでいた。顔が真っ青で、動けない様子だった。すごく怖い思いをしたんじゃないのか…。

お父さん、修にい、お母さんが優しい言葉をかけて、部屋を出て行った。

「じゃ、私会社に行くね」

瑞希は、どうにか立ち上がり、真っ青な顔のまま、作り笑いをして出て行った。

「はあ……」

すげえ、迷惑かけた。やっぱり、泊まりに来るなんて無理だったんだ。今日、親父に迎えに来てもらって、帰ろう。

でも、まだ頭痛がしてて、俺はそのまま朦朧としていた。朦朧とする意識の中、さっきの真っ青な瑞希を思い出していた。

瑞希に、これからもあんな怖い思いをさせなくちゃいけない……。それが辛かった。瑞希のあんな表情を見るのが辛い。

そのまま、横になっていつの間にか寝ていた。チャイムの音で目が覚めた。それから、部屋におふくろが入ってきた。

「圭介、大丈夫？」

「あ、おふくろ……？」

「父さんと一緒に迎えに来たわよ」

「ああ、うん。あ、荷物、俺、ぶちまけて……」

「ああ、いいわよ。やっておくから、あなたは着替えなさい」

「うん……」

もさもさ起きだして着替えて、下におり、リビングに行った。

親父が、瑞希のお母さんと話をしていた。

「あ、圭ちゃん、大丈夫なの？」

「ああ、はい。すみません、迷惑かけて」

「いいのよ、それより、ここ座って。お茶でも飲む？あ、冷たい水のほうがいいかしらね」

お母さんはそう言うと、キッチンに行った。

「圭介。けいれんだって大丈夫か？」

「うん。でも、迷惑かけちゃった」

「そうだな、やっぱり泊まるのは、無理だったな」
「うん…」

「圭介、荷物はこれで全部？」

おふくろが重い荷物を持って、2階からおりてきた。

「ああ、重そうだな」

親父が、鞆を受け取りにいった。

「さ、圭ちゃん、水。それと、お母さん、お茶が入りましたので、どうぞ」

「あ、すみません。いただきます」

3人で、少し落ち着いているところに、チャイムが鳴った。

「あら、瑞希かしら？」

お母さんが玄関に行った。

「ただいま」

「瑞希、今、圭ちゃんのご両親がみえてるのよ」

「え？」

瑞希が慌てて、リビングに来た。

おふくろと親父が同時に立って、瑞希に頭をさげ、謝った。

「ごめんなさいね、瑞希さん。圭介が迷惑をかけて…」

「いえ、そんな…」

瑞希は少し、戸惑っていた。

それから、親父が俺の荷物を持ってくれて、3人で瑞希の家をあとにした。瑞希は、俺に何も言っただけで、俺も瑞希に何も言わなかった。

家に帰る途中、おふくろは、

「ねえ、圭介。けいれんがこんなにひんぱんに起きるなら、入院した方がいいんじゃないかしらね」

と、言い出した。

「でも、少ししたら、落ち着くんだし…」

親父が、おふくろにそう言ったけど、

「心配なのよ。もし、誰も居ないところで、けいれんを起こしたりしたら…」

とおふくろは、少し暗い表情でそう言った。

「わかったよ。このまま、病院行って、先生と話をしてくるよ」

「じゃあ、私がついていくわ。お父さんは先に帰って、悪いけど、車で迎えに来てくれないかしら」

「ああ、わかった」

親父とは別れて、俺はその足で、おふくろと病院に行った。

ちょうど午後の外来の始まる前で、受付に行き、けいれんが朝起きたことを話すと、担当の竹内先生に、連絡を取ってくれ、診察をすぐにしてくれるよう、手配してくれた。

診察室におふくろと入り、けいれんのことを話すと、すぐにでも入院の準備をすることはできますよと、竹内先生が言ってくれた。おふくろはそれを聞き、安心した。おふくろも、怖かったんだ…。待合室に行くと、もう親父がいた。

「入院、早めてもらったわ」

「圭介、会社の方はいいのか？」

「ああ、うん。もう、仕事は俺の分も他の人が、引き受けてくれるし、大丈夫」

「そうか…」

親父は、なんだか疲れているように見えた。すっかり老け込んだ感じがしたみたい…。俺が心配をかけているからなのか。

夜になって、瑞希にメールをしようか迷っているとき、携帯が鳴った。瑞希からだった。

「圭介、寝てた？」

「うつん」

「体の具合は？」

「うん、もう大丈夫だよ」

「そう…」

「…何？」

「別に、用はないんだけど、どうしてるかなって思ってた」

「…何も変わったことはないよ」

嘘をつけ。入院早まったこととか、あるじゃないか。でも、何かを話したら、また、弱い俺を見せそうで、わざと、そんなことを言った。

「あ、そうだ、私もね『ザ・シークレット』観たの。すごい奇跡だよね…」

「ああ…」

「そ、それでね、私も圭介との未来とか、イメージしまくったり、楽しいことだけを考えていようかなって…」

「…未来？」

「そう、あ、桐子がね、来年当たり、結婚するんだって。例のコック長さんと…」

桐子…。ああ、瑞希の友達の…。

「そうなんだ、よかったね」

まったく、気持ちがこもらなかった。

「うん。静岡で式をあげるから、来てねって。それに一緒に行ったりとさ」

来年…？一緒に…？

「それから、えっと、夏のお祭り一緒に行ったり、秋には紅葉見に行くのもいいし、冬はね、クリスマスと一緒に過ごして、あ、デイズニールンドでクリスマスっていうのも、いいな〜」

…すぐに俺は入院する。そうしたらもう、退院をすることもないかもしれない。

瑞希が言うことを、想像した。浴衣の瑞希や、花火、一緒に紅葉を見て、一緒にデイズニーランドに行く…。

「それとか、正月は、初日の出に、初詣でしょ。一緒に二人で旅行にも行きたい。それに…」

瑞希の声が止まった。電話の向こうで泣いているのがわかる。たった数ヶ月先の未来、想像しただけでも辛くなる。瑞希も辛いんだ。

「瑞希、俺、入院早まるかも」

「え？」

「明日から会社も休むよ。笹おじさんには、今日電話した」

「…なんで？」

「うん、あれから病院に行った。担当医がさ、ベッドも空いてるし、すぐに入院できますって」

「でも…」

「おふくろ、俺がまた、けいれん起こしたりするの、怖いみたい。ほら、入院したら、すぐ医者に診てもらえるし」

瑞希は黙っていた。

「ごめん、瑞希。本当にごめん…」

「え？何がごめんなの？」

「瑞希の夢、叶えられないかもしれないから…」

「やめてよ。なんでそんな弱気になっちゃってるの？なんでそんなに悪い方ばかり考えるの？そっこの思ってたら、悪い方が叶っちゃうよ。だから、やめて。言わないで」

「ごめん、瑞希。苦しめてる。瑞希も本当は、必死なんだ。」

「……。瑞希…」

「え…？」

俺といて、辛いよね…？って言おうとした、でも、言葉にならなかった。

「いや、なんでもない…」

「圭介、何？」

「……」

これ以上話しても、俺は瑞希を苦しめるだけの様な気がして、何も言えなくなった。

「圭介…、何を言いかけたの…？」

瑞希の声は震えてた。泣いているのかもしれない。

「圭介…、黙ってないで、なんとか言つてよ…」

「うん…」

何を言つたらいいのか…。

「もう、切るよ。そろそろ寝たいから…」

俺はそれだけ言つと、電話を切つた。瑞希を苦しめるのが嫌だった。でも、本当は苦しめている自分が嫌だった。

情けなかった。何か話すと、瑞希を苦しめる。でも、どうやって瑞希のことを安心させたらいいのか、どうやってたら、瑞希を苦しめずにすむのか…。

瑞希の言つてたように、未来をイメージしても、それを叶えられてあげられないってそんな思いばかりが出てくる。どうやっても、奇跡が起きるとか、癌が治るとか思えなかった。

たった、数ヶ月の間の、なんでもないことを叶えてあげられない。情けない。悔しい。どうして俺は、こんな病氣になつたんだろう？ いったい、何を責めたらいいのか。運命か？ 神様っていうのがあるとしたら、俺は神様を恨むしかないのか。

こんなことになるなら、なんで瑞希と出会つたのか。あの時、なんで、茂にいの代理で行つたりしたのか。

辛くつて、苦しくつて、瑞希のそばにもいられない…。

今すぐにでも、入院したくなつた。真四角の部屋で、何も考えず、ベッドにずっと、潜り込んで、誰にも会わず、ひっそりと死にたく

なった。

いや、そんないつ死ぬかわからない命なら、今すぐにも消えてしまえばいい。こんなに苦しいなら、いつそ、今すぐ！

俺は、布団に潜り込み泣いた。まくらに顔を押し付け、泣き声がもれないように。

瑞希…。瑞希…。！会って抱きしめたい。ただ、抱きしめたい。何も考えず、ただずっと…。そんな思いも叶えられず、涙は止まらなかった。

そして、いつの間にか俺は寝ていた。

翌朝、頭痛で目が覚めた。しばらく横になっていると、どうにかおさまったので、一階におりて、顔を洗ってから、ダイニングに行った。

おふくろは、俺がおりとすぐに、キッチンでご飯を作り出した。顔をあわせようとしなかったので、俺の泣き顔も見られないですみほつとした。

おふくろも、泣いていたのかもしれない。

「あ、どうにか、目は腫れてない…」

顔を洗って鏡を見て、ほつとする。

軽い朝食をすませ、まだ頭痛がするから寝るねって言って、2階にあがった。

おふくろは、俺の前では絶対に泣かなかった。でも、泣きそうになると寝室に行っていた。

順平は、あのいつもふざけて、馬鹿ばかり言っているのが、家で静かになった。だけど、俺といるのが辛いのか、バイトの数を増やし、なかなか家に帰ってこなくなった。

兄貴も、時々、俺に声をかけてくれるが、ほとんど部屋で仕事をしていた。

家の中は、いつも、しゅんと静まり返っていた。俺が入院した

ら、少しは明るくなるのか……。それとも、このままなのか？

自分の病気のせいで、家の中もこんなに暗くしたのかって思うと、また、胸の奥が苦しくなった。

ベッドに潜り込むと、何も考えないようにした。しばらくすると、俺は眠っていたようだ。

17 ありのままの俺

うつすら、眠りから覚めた。夢の中では、俺は瑞希の家にいた。瑞希の部屋で、瑞希といた。何かを瑞希と話していた。瑞希が笑って、俺は嬉しかった。

目を開けた。天井が見えた。俺の部屋だ。ああ、夢だった…と、横を向いた次の瞬間、瑞希の顔が目飛び込んできた。

「あれ？」

辺りを見回す。ああ、やっぱり俺の部屋だ。

「俺の部屋だよね。なんで瑞希？」

それとも、夢か…？

「会社、早退しちゃった」

「どうしたの？」

「なんか、圭介のこと考えたら、いてもたってもいられなくなって…」

…会いに来たの？俺に？

「圭介、手…」

瑞希に言われて、布団から手を出すと、俺の手を瑞希がぎゅって握った。それから、瑞希の顔を俺の手に近づけると、俺の手の上に、熱いものがかかった。

「…！瑞希、泣いてる…？」

「…うん。でも、悲しくてじゃないよ。なんか、圭介を感じられて嬉しくって泣いてるの…」

本当に？でも、俺、また泣かせてる…。

瑞希の髪をなでた。瑞希の匂いがかすかにした。

「瑞希、ごめん…」

「圭介、謝ってばっかり…」

「ごめん、あ、また言っちゃったね。俺……」

ふって笑って見せたけど、つくり笑いになった。

「具合、悪いの？」

「うん、ちよっと、朝、頭痛ひどくて。でも、頭痛は治ったよ。大丈夫」

瑞希の髪をまだ、なでていた。サラサラだった。瑞希のぬくもりを感じて、なんか俺はほっとしていた。目の前に瑞希がいる。なんか今は、それだけで、嬉しかった。

「圭介、私こそごめんね……」

「何が？瑞希が謝ることは、なんにもないよ」

「うつん、私いっぱい圭介を困らせた。それに、苦しめた」

瑞希、そんなこと思ったの？

「俺なら、大丈夫だよ。瑞希のほうこそ、辛かったんじゃないの？」

「……。圭介……」

瑞希は、いきなり声をあげて泣き出した。ああ、我慢してたんだ。

瑞希。瑞希は俺の、左手をぎゅって握りしめながら泣いていた。

俺は、右手で、瑞希の髪をなでていた。

瑞希は、ずっと泣いていた。小さな肩を震わせ、しばらく泣き止まなかった。そんな瑞希を俺は、ただ、見ていた。ただ、髪をなでていた。

なんだか、わからないけど、瑞希を泣かせていることも、苦しませていることも、俺なのに、でも、俺は黙って、瑞希が泣くのをただ、見守っていた。

泣きたいだけ、泣かせてあげよう。思いっきり泣いたら、瑞希の心は軽くなるんじゃないのかな……。そんな気持ちだった。

「圭介、私本当はすごく怖い。圭介を失うのも。圭介が死んじゃうなんて怖くて、怖くて、考えたくもない。隣にずっといるって、そ

う信じたかったし、私の隣にいてくれなくなるなんて、絶対にそんなこと考えたくもなかった」

「うん…」

「必死で、考えないようにしたの。でも、考えちゃうの。考えないようにしても、無意識に考えちゃうの。それが、怖くて…」

「うん、わかるよ…」

「わかる？圭介もそう？」

「うん…」

瑞希が顔を上げた。涙で顔が、真っ赤になってた。俺も、いつの間にか、泣いていた。

「俺、瑞希が未来をイメージしてるって言ってるのを聞いて、一緒にイメージしたよ。瑞希と行くお祭りも、瑞希と行く、ディズニーランドも。だけど、思い描けば、思い描くほど、苦しくなった。叶えてあげられないことが悔しかった。悔しくて、悔しくて、なんでそんなこともしてあげられないのか、やっぱりそれが、全部叶うって思えないんだ」

「……」

「俺も、瑞希といたいよ。ずっと、そばにいたいよ。誰にも渡したくないし、瑞希と、家族も持ちたい。結婚して一緒に暮らして、子供生まれて、家族で毎日暮らしてる。そんなこと全部全部、叶えないよ。でもできない。それが悔しい。すげえ、すげえ悔しい。なんできないんだろって。なんで俺、そんな病気になったんだろって。何度も恨んで、何回も、自分の人生を憎んだ。とても、プラスになんて考えられない。どうやったって、悔しいだけだ」

「圭介…」

「だから、未来を思うたびに、苦しくなった。未来の話が瑞希がするたび、苦しかった。ごめん、そんな瑞希のそばにいるのも、辛くなった。だから、早くに入院も決めた。俺、瑞希に何もしてあげら

れないし、苦しめるだけだし、だから、逃げようと思った」

瑞希の手に顔をうずめた。涙が溢れて止まらなかった。

「ごめん、瑞希……。俺、頼りないし、俺、弱いし、俺、卑怯だ……」
顔をうずめたまま、泣いた。もう、言葉にならなかった。

瑞希が、俺のことを抱きしめた。ぎゅって力を込めて、抱きしめてきた。

「泣いていいよ、声をあげて泣いてもいいよ。我慢しないで、我慢したりしないで」

俺は、声を上げて泣いた。瑞希の胸の中で、瑞希のあったかさを感じながら、思い切り泣いた。

瑞希も、泣き出した。二人で抱き合って泣いた。どんなに泣くのを我慢してきたんだろう、俺も瑞希も。悲しい思いも、悔しい思いも、全部胸の中に押し込めて、苦しくて、苦しくて、それを全部全部、吐き出すように、俺たちはずっと泣いていた。

瑞希がそっと、俺の髪に触れて、そして、優しく髪をなでてくれた。

瑞希の胸に顔をうずめて、瑞希のぬくもりと、瑞希の匂いに包まれた。優しくかった。すげえあったかかった。

やわらかくて、瑞希の肩は俺の肩にすっぽり入るくらい小さいのに、それでも、そのあったかさは俺の体全部を、包み込んでくれた。

「瑞希の、心臓の音が聞こえる……」

その音は、とても安心する鼓動だった。

「瑞希、あったかいね……」

「圭介もあったかいよ」

「瑞希、前に言ったよね。今に生きようって。今は俺、生きてるし、ここにいてるって」

「うん……」

「でも、やっぱり未来のこと、考えちゃう。そうすると、すごい怖くなる」

「うん、私もわかるよ、それ。時々、恐怖で、体が震えるもの」

「瑞希も？」

「うん」

「…瑞希と離れるのが、俺、1番辛い」

「うん…」

「死んだらどうなるかな。魂ってあるのかな？もしあったらさ、体消えても、瑞希のそばにいられるかな」

「……」

「瑞希のあったかさとか、感じられるのかな」

「圭介…」

瑞希は、俺がそんなことを言ったからまた、泣き出した。

「ごめん、泣かせた？俺…」

「ううん、いい。大丈夫。圭介が思っていること、話してていいよ。聞いていたいし…」

「うん。死ぬことは考えないようにしてたけどさ、怖いし、真っ暗闇なのかなとか、無の世界なのかなとか、そういうことを考えちゃうと、すげえ怖いから、考えないようにしてた。でも…」

「でも？」

「でも、みんないつかは死ぬんだよね。瑞希だって、いつかはさ、早いか遅いかの差があるだけで…」

「……」

ベッドからおりて、ティッシュを取りに行った。涙と鼻水で、顔がぐしゃぐしゃだった。

「私にも、ティッシュ」

瑞希にも、ティッシュを渡した。

「こんなこと、前にもあったよね。あ、車の中でか」

瑞希の顔を見ると、まつげが濡れてて、色っぽかった。でも、鼻がまっかで可愛かった。

「あ、すごいことになってる？私の顔」

「うっん、綺麗だよ」

「嘘だ〜」

「まじで、まつげが濡れてて、色っぽい」

「ええ？」

瑞希は、目元をティッシュでふいた。

瑞希の顔をじっと、見ていた。涙で化粧も落ちただろくに、あまりいつもと変わらなかった。

「瑞希は、あんまりお化粧濃くないね」

「あ、うん」

瑞希のほっぺにまだ、涙のあとがあった。それを俺の手で拭きながら、

「瑞希の顔、覚えていたいな、ずっと…」

って、言った。瑞希は、俺の顔をずっと見ていた。

「目に焼き付けて、忘れないようにする」

「……」

「死んでも覚えておく」

「圭介…」

見る見るうちに、瑞希の目はうるんでいった。その目もすこく、色っぽかった。

「私も、覚えておく。圭介のあったかさも全部、全部…」

「うん…」

瑞希を引き寄せて、ぎゅってまた、抱きしめた。

「覚えていてね。そうしたら、瑞希の中でずっと俺、生きていられるから…」

瑞希も、俺のことをぎゅって抱きしめた。それから泣いていた。

「瑞希、泣き虫になってるね」

「私、本当は泣き虫だもん」

「そうなんだ、知らなかった。また、瑞希のこと知れた」

「…うん。圭介も私に、そのまんまの圭介を見せてね」

「…ん？」

「泣いてるところも、弱いところも、どんなところも。素のままの圭介、知っておきたいから」

「うん…」

「私も、泣きたかったら泣く。我慢しない。苦しかったら、苦しいって言うし、悲しかったら、悲しいって言う。ちゃんと、感情を出して、感じて、圭介にも見せるから」

「うん…」

「だから、悲しかったら一緒に泣こうね。苦しかったら、こうやって抱き合おうね。思い切り泣いて、思い切り抱きしめる。圭介をいっぱい感じるから、圭介もいっぱい私を感じてね。このままの私でいるから、このままの私を受け止めてね。圭介のことも、全部受け止めるから…」

瑞希……。

このままの、素のままの、ありのままの俺でいいのか…？こんなに弱くて、こんなに情けなくて…。それでも、瑞希は、そんな俺でも、受け止めてくれるのか？一緒に泣いて、一緒に苦しんで、抱きしめてくれるのか…？

瑞希…！瑞希を、抱きしめた。力いっぱい、抱きしめた。どんな瑞希も愛してる。どんな瑞希も受け止める。

18 瑞希がない夜

下に瑞希とおりていき、おふくろに何か作ってと頼んだ。

瑞希とリビングのソファに座っていると、瑞希もおながが空いたらしく、おなががなかったから、瑞希の分もおふくろに作ってもらった。

ご飯を食べ終わって、また、瑞希とリビングに行った。二人でべったりくっついて、テレビを観た。おふくろは、途中から買い物に出で行った。

瑞希とは、テレビを観ながら笑いあった。こんなに笑ったのは、久しぶりだ。

なんか、嬉しかった。瑞希が笑っているのも、すぐ隣にいるのも、瑞希の匂いもぬくもりも、全部が嬉しかった。

おふくろが帰ってきて、瑞希と話があると、和室に瑞希を連れて行ってしまった。おふくろは、瑞希に悲しい思いはさせたくないとい度も言ってた。もしかしたら、瑞希に俺と別れるよう、言っているのかもしれない…。

怖くなった。瑞希を失うのが…。すぐ横にいた瑞希のぬくもりを失ってしまうのが怖くて、体をまるめて、瑞希が戻ってくるのを待った。

でも、俺が死んだら…？瑞希は一人だ。そんなことを思うと、また、複雑な気持ちになる。

リビングには、テレビの音だけが響いた。

しばらくして、瑞希が、リビングに戻ってきて、俺の隣に座った。瑞希の顔を見ると、微笑んでいた。その顔を見て、ほっとした。

「あのね、お母さんに頼んできちゃった」

「何を？」

「圭介が、入院したらずっと看病に行くって。毎日、ずっと」

「おふくろはなんて？」

「いいって」

「ほんと？」

「うん」

「そっかー、良かった！おふくろさ、瑞希に心配かけたり、苦しい思いさせるの嫌がってたから、俺から、離れて欲しいって言うてるのかと思った」

「…うん、言われたけど、圭介と離れてる方が、辛いから離れないって言ったよ」

「それで、わかってもらえたの？」

「うん…」

瑞希は、にこって微笑んだ。ああ、良かった。

「じゃ、朝から晩までいられる？」

「うん」

「まじで？」

「まじで」

嬉しかった。瑞希は会社も辞めて、俺のそばにずっといてくれるって、そう言ってくれた。

瑞希の隣は、あったかい。ちょっと離れているだけで、俺は不安になった。さみしくて、孤独になった。瑞希が、ずっとそばにいてくれたら安心していられる。

まるで、迷子になった子供が、親とまた会えてほっとするみたいに、瑞希がいてくれるだけで俺は安心した。

このまんま、一緒にいられるんだ…。

翌日、夜、瑞希からメールが来た。

「今日、退職届を出してきたよ。社長は受け取ってくれた。」

<お疲れ様、瑞希。

<明日は、ついていくからね。

<うん、ありがとう瑞希。

入院の準備を、おふくろがあれやこれやしていた。親父は明日、どうしても抜けられない大事な会議があるとかで、おふくろと、瑞希の3人で行くことにした。

ベッドに横になって、いきなりぎゅうって胸が締め付けられた。

この部屋に、俺はもう戻って来れないのか…。

部屋に、順平と兄貴が一緒に来ると、本や漫画を渡してくれた。

「これ、けっこう面白いんだよ。また続きが出たら、持って行くからさ」

「おお、わりい、順平」

「あと、これ。コンピューター関係の雑誌だけど、けっこう面白いから持ってけよ」

「うん、サンキュー、兄貴」

「じゃあな。おやすみ」

「うん」

兄貴がそう言って部屋を出た。順平は、何か言いたそうに、まだ部屋にいた。

「どうした？」

「あ…、うん」

「？」

「俺、なんていうのかな…。ずっと、考えてたんだけど…」

「うん？」

「俺、けっこう能天気だし、その…、だから、圭介が死ぬなんて全然思っていないから。親父もおふくろも、毎日暗くなってるけど…。」

圭介がいけない間は俺が、このうち明るくしてくし…。だから、圭介は家のこととか、考えないで、治療に専念してよ」

「は……。お前、そんなこと考えてたの？」

「俺もさ、少しは、家族の一員なんだし、役に立たなくっちゃ」
順平の髪の毛をわざと、なでくりまわした。

「ちよつと！圭介？」

「ありがと。お前に任せたよ」

「あ、圭介が戻ってくるまでだからな！ずっとじゃねえよ！」
「うん」

順平は、ぐしゃぐしゃになった髪を、整えながら、部屋を出て行った。

そつか。あいつも、なんか成長してるんだ。
ちよつと、気持ちが楽になった。なんか、このまんまこのうちは、
ずっと暗いんじゃないか……。そんなことを思っていたから。

翌日から、俺は入院した。部屋は4人部屋。おっさんが二人、もう一人は、30歳になったばかりって言うてた。

おふくろが一人一人に、挨拶をした。俺のベッドの前のおっさんは、

「お母さんとお姉さんかい？」
と、聞いてきた。

「母と、彼女です」
「なんか、かくしているのも変だし、正直に言つと、」

「ヒュ~~~~！」

つて、部屋にいたみんなに、ひやかされた。

病院つて、暇なんだろうな。来る日も、来る日も、検査や、治療をするんだろうし……。かなり、俺は憂鬱だった。気分が沈んでる分、
なんとか何か面白いものでも見つけようとした。

「瑞希、あとで、病院内、探検しよう」

着替えをするために、ベッドの周りのカーテンをぐるって閉めて、

パジャマになり、ベッドに横になってから俺は、瑞希を呼んでそう言った。

なんか、周りのおっさんには聞かれないような、おっさんの顔ばかりは見ていたくないような、そんな気分だったから、カーテンは閉めたままにしていた。

「屋上とか、あんのかな。よくドラマに出てくるじゃん」

「あるよ。屋上。そこにシーツとか、洗濯もんを干してある」

いきなり隣のおっさんが、そう答えた。なんだよ。聞いてんなよっていうか、話に入ってくるなよ。ここには、プライベートルームというのがないわけ？しかたないな。

「誰でも、行つていいんですか？」

って、聞いてみた。

「おお、おお、行つても大丈夫だ」

今度は、前のおっさんか。みんなして、聞いてるんじゃない。...

「ちょっとこれから、ナースステーションと、竹内先生のところに行ってくるわ」

おふくろが、軽くカーテンから顔を出して、そう言った。なんか、忙しそうだな。また、いつ戻ってくるかもわからないし、今日は大人しく病室にいるか。

カーテンを閉めてても、周りは聞き耳を立ててるようだし、しょうがねえな。

俺はカーテンを開けて、同室の人と、話を始めた。

瑞希は、椅子に座って、その話を聞いていた。時々、一緒にふふって笑った。その笑い方好きだなんて、時々瑞希の顔を見た。

しばらくすると、おふくろが戻ってきた。

「何か、売店で、買ってくる？」

「あ、なんか漫画か雑誌…」

兄貴たちからも、もらってたけど、暇になるだろうから、買って来てもらう事にした。

「瑞希さん、売店一緒に行かない？」

そう言つて、おふくろは、瑞希を連れて行つた。あゝあ。

瑞希もいなくなつて、しょうがないつて、また、同室の人たちと話を始めた。おっさんたちは、けっこう明るくて、面白かつた。そのうち、斜め前の30歳の人も、カーテンを開けて、話に加わってきた。

なんか、この人たちとなら、やっていけるかな…。そんなことを思いながらも、俺は瑞希が戻ってくるのを、心待ちにした。

瑞希が戻ってきた。

「売店、どこにあつた？」

「なんか、面白いところ、あつた？」

今度、瑞希とあれこれ行こうつて思いながら、俺は瑞希に聞いた。でも、また隣のおっさんが、話に加わってきて、おっさんたちと話すはめになった。

その次の日から、治療が始まつた。検査なら、まだ耐えられる。でも、放射線や、抗がん剤は同室の人から、すごくきついって聞いてたけど、こんなにも辛いつて思わなかつた。

同室の人たちは、みんな帽子をかぶっていた。治療で、髪が抜けていったからだ。俺もそのうちに、髪、抜けていくのかな…。そんな姿瑞希に見られたくないな…。

でも、瑞希の顔を見れないのは嫌だから、やっぱり毎日、来て欲しい。

治療の日は、ぐったりしてて、瑞希が来てもあまり、話をできなかった。でも、ベッドの横に座つて、瑞希は、俺の手を握つててく

れた。それだけで救われてた。

同室の人たちも、治療の日は、カーテンを閉め切っていた。瑞希が夜帰ると、俺はいきなり孤独を感じた。テレビを観ながら、笑っている隣のおっさんが話しかけてきても、カーテンを閉め切り、寝たふりをした。

布団にもぐって、早く朝が来ないかそれだけを思っていた。

ある日、朝から花を持って、斜め前の人の妹さんが、俺のところに来た。

花瓶が一個しかないからいいよって言ったけど、瑞希が持ってきていた花に無理やり、自分の持ってきた花も、差し込んで、「いつも兄がお世話になってます。私、上野杏っていいいます」と、笑った。

どうやら、この子がくると、同室のおっさんたちは、嬉しいらしく、みんな「杏ちゃん」と言って、可愛がっていた。おっさんたちにも、必ずお花を持ってきているようだった。

「あ、なんだ、俺にだけじゃなかった。って、俺、自意識過剰か」ちよつと、俺には、瑞希もいるし、なんて思ってしまった。そうだな。お兄さんの同室の人なら、いろいろと気を使うよな。それは、おふくろだって同じで、お菓子だの、果物だの、持ってきて配ってるもんさ。

それから、3日くらいして、また、杏ちゃんがやってきた。例のごとく花を持って。

瑞希が、おふくろと、ご飯を食べに行ってる間、俺も暇だし、廊下の突き当たりにある休憩所に行って、缶ジュースを飲んでいた。すると、そこに杏ちゃんがやってきた。

「あの、いいですか？ 私もここで、コーヒー飲んでも…」

「あ、いいけど…」

そう言つと、俺の隣に座って、缶コーヒーを開けた。

「あの、圭介君…。あ…。なんかみんながそう呼んでるから、そう呼んでもいいですか？」

「うん。いいけど…。っていうか、杏ちゃん今、いくつ？」

「22歳です」

「あ、じゃ、タメじゃん。敬語なんか使わなくていいよ」

「え？圭介君も22歳？」

「うん」

「そうなんだ、なんか、大人っぽいから、年上かって思った」

「ええ？俺、大人っぽい？」

「うん…。私が子供っぽいのかな」

「いや、そんなことないよ。同室のおっさんたちも、杏ちゃんは気が利くし、いい子だって褒めてたし」

「ええ？そんなこと…」

「お兄さんと仲いいんだね」

「うん。二人兄弟だし…。だから、兄には早くに元気になってもらいたくて」

「そうなんだ。お兄さんは独身だっけ？彼女いないの？」

「いたんだけど…。病気になって、別れたみたいで…」

「え？まじで？」

「しょうがないよね。結婚も考えてたみたいだったけど…。兄はそれから、すごく落ち込んで、入院しても、なんかずっと元気なくて…。でも、最近来ると、いつも楽しそうに圭介くんと笑っているから、良かったなって…」

「あ、うん。俺にも兄貴いるし、なんか、兄貴と話してるみたいでさ…」

「お兄さんが？お見舞いには来ているの？」

「ああ、会社の帰りとか、土日…。たまに弟も、大学休校になる

と、ひよっこり来てる。あ、会ったことないっけ？」

「うん、そんなに兄弟がいるんだ。いいね、にぎやかで…。私お姉さんと二人兄弟なのかって思ってた。」

「お姉さんはいないけど？俺、男3人兄弟だよ」

「え？でも、いつもお母さんと来てる…」

「あ！戻ってきた！」

廊下の向こうに、おふくろと瑞希の姿が見えた。

「あ、お母さん、食事に行ってた…とか？」

「うん。じゃ、杏ちゃん、またね！」

「うん…」

瑞希のもとへと一目散。なんか、俺、犬みたいだ。って、クロと自分の姿がだぶってたよ。もし、尻尾はえてたら、絶対にぐるぐる回ってる。

瑞希を見ると、嬉しくなってる。瑞希と一緒にだと、心が元気になる。でも、瑞希が帰るととたんに、暗くなる。

その日の夜も、同室の人のいびきが聞こえる中、俺は、布団に潜り込んで、目を開けて、瑞希のことばかりを考えてた。

これからも、ずっと、この病室にいるのかな。死ぬまで？夜はこうやって、独りになって？瑞希のことを思い出しながら？

瑞希のぬくもり、最近感じてない。手を握ってはくれたりするけど、キスもしてない。

「はあ…」

ため息が出た。瑞希を、すぐそばで感じていたくて、抱きしめたくって、布団の中で丸くなった。

瑞希…。早く、朝が来てくれ。瑞希に会いたい。でも…、でも、

朝が来たら、死に近づいていくんだな、俺…。

19 残り3ヶ月

晴天の日、瑞希を連れて屋上に行った。

髪がごっそり抜けることがあり、おふくろに頼んで何個か帽子を買ってきてもらった。とりあえず、ベッドでそのまんま寝れそうなやつ…。その日もかぶってた。

青空の中、ぽっかりと白い雲が浮かび、気持ちのいい日だった。

屋上では、たくさんのシーツや、洗濯物が干してある中、杏ちゃんも洗濯物を干していた。

「あ、杏ちゃん」

「あ、こんにちは。いい天気だね」

俺と瑞希に向かって、にこって微笑んだ。

杏ちゃんは俺が帽子をかぶっているのを見て、

「兄がかぶっているのは、私のお手製なの。夏用のニットで編んだもので、よかったら圭介君にも作るうか？」

と、聞いてきた。

「へええ、すげえ、そんなことできるんだ」

「じゃ、今度来るときまでに作ってくるね」

…え？

杏ちゃんは、そう言って、屋上を去っていった。

「圭介…」

瑞希が、ちよつと怖そうな顔で言った。

「あれ？俺作ってって頼んだっけ？」

っていうか、なんでいきなり帽子の話？俺のかぶってるのが変だった…とか？

「杏ちゃんって気が利くし、可愛いよね。あんな子お嫁さんにしたい」

「は？」

何言ってるの、瑞希…。

「って、男の人なら、思うかなって…」

「？」

何が言いたいんだか？

「ふうん、それ、女性から見たらじゃないの？」

「え？そうなの？」

俺がお嫁さんにしたいのなんて、瑞希だけだよ…。

「俺、年上好みだし」

あゝあ。なんで、二人きりになったのに、他の子の話してなきゃならないんだよ。

「ちょっと、どこ行くの？」

俺が、シートとシートの間に入っていくと、後ろから慌てて瑞希がついてきた。その瑞希の腕を掴んで引き寄せ、キスをした。

瑞希が、驚いてた。そんな、驚かなくてもさ…。

「病室じゃ、できないんだもん。カーテン閉めてても、隣の親父、聞き耳立ててそうじゃね？」

あきれたって顔で、瑞希が俺を見た。二人きりになりたいとか、そういうの思わないわけ？瑞希は…。

「今日は、気分よさそうだね」

「うん、なんもない日だから」

瑞希は、俺が明るいねって言う。

「瑞希といるからじゃない？」

「私と？」

俺が、瑞希が帰って一人になると、しくしく泣いてるって言うって嘘だっけって笑った。

…嘘じゃないよ。まじ、泣いてる。このまま、死んでいくのかな。毎日瑞希と会ってるけど、でも、まるまる1日、べったりしていた

い。ちよつとの時間でもおしい。ベッドで、こつやって一人でいるのは孤独すぎる。

毎晩、そう思う…。瑞希は？

「特にさ、夜中、ずっと、瑞希のこと考えてる」

「本当に？」

「瑞希以外のこと、考えてない」

「可愛い、杏ちゃんや、綺麗なナースさんのことも？」

「何それ？ええ？」

「なんで、そんなどうでもいい人のこと、俺が考えるんだよ？」

「瑞希を見ると、上目遣いで、俺のことを見てた。ちよつと、疑ってるような、ちよつと、意地悪を言ってるような…。」

「あ、そつか……。瑞希、やきもち……。あはは、可愛い」

「う、そうだよ。悪い？なんかみんなと仲いいし、圭介、もててるし」

「へ？もてる？何を言っちゃってるんだか…。」

「彼女いるのに？」

「私、どうやらお姉さんって思われてる…。」

「俺、彼女だつて、はじめに紹介したじゃん」

「でも、看護師さんに、圭介くんのお姉さんって言われる」

「お姉さんじゃなくて、恋人ですって言えがいいじゃん」

「……」

「え？なんで無言？え？どうして、彼女ですって宣言しないの？」

「俺、別に、瑞希以外の女性、興味ないよ」

「はあ。ほんと。瑞希ともっともつと、もつと一緒にいたいって思ってるのに、なんで他の人のこと考えるんだよ。それに、他の人にもてたからって、嬉しくもなるともないや…。」

「外出できないのかな。1泊くらい。そうしたら、瑞希とどっかし

テイホテルでも泊まるのにな」

「は？」

「それで、1日瑞希とべったりくっついてる」

「……」

「でも、俺、もしかしたら」

「うん？」

「なんでもない」

瑞希、こんなこと言うと、引くかな……。

「何？」

「なんでもない」

「何？気になる」

「その日、狼になっちゃう」

「はあ？」

「はあ？つて。そんなにあきれなくても……。瑞希は、そういうの思わないのかな。」

「なんてね」

瑞希を見て、おどけてみせた。「冗談だつてふりをした。」

瑞希は、うつむいたまま、黙ってしまった。あ、俺やばいこと言つたのかな？

「あのね、圭介。私、最近思つてたことがあつて……」

「ん？」

「何？」

「あのね。…圭介、驚くかもしれないんだけど……」

「うん……」

「…何？」

「圭介の、子供…、欲しいな」

「え？子供？」

瑞希、飛びすぎてるっていうか、子供って、俺死んじゃうのにな？

「父親がない子になるよ」

「……」

「それに、瑞希一人で、育てることになるよ。それに……」

「ん？」

「俺はその子に会えないよ」

「……」

瑞希を見ると、さみしそうに笑った。なんでいきなり、子供って……。っていうか、結婚だっと思ってないし、シングルマザーになったりしたら、瑞希大変な思いをするのに。

瑞希が、帰ってから、俺はずっと考えた。瑞希、本気で言ったのかわかって。でも、子供を欲しいって言われても、この今の状況じゃ、どう考えても無理だ。

外出許可を取るとか、いや、いつそ病院出るとか……。

ああ！そうじゃん。そういう選択だっただけじゃん。ずっとこのまま、病院いて治療続けても、死に近づいていく一方だ。死ぬまでここににいることになるだけだ。だったら、いつそ、病院で、瑞希と暮らしてもいいんじゃないの？

いや、症状がどんどん悪化して、入院しなくちゃいけないようになったら、また、ここに戻ってくるかもしれないけど、でも、まだ生活ができる状態なら、瑞希と暮らすことだって、できないことじゃないじゃん。

俺は、そう思いついたら、いてもたってもいられなくなった。今すぐにでも抜け出して、瑞希に会いたくなった。1分1秒でもおしい。ずっと、瑞希のぬくもりを感じていたい。

翌朝、瑞希に電話した。

「瑞希、早めに今日来れない？おふくろより早めに……。相談があるんだ」

「うん、いいよ。すぐに支度して出るね」

「うん！」

瑞希はなんて言うかな？瑞希さえ、OKしてくれたら、親父やおふくろや、先生がなんて言ったって、強行突破する。

ただ、瑞希の答えが怖い。瑞希も俺と一緒に、俺とずっと一緒にいたいって思ってくれてたら…。

ベッドの上に座って、まだかまだかつて、瑞希を待った。少しでも早くに伝えて、今日にでも退院したいくらいだ。

「瑞希！」

瑞希が病室に顔を出した瞬間、俺はベッドを飛び降り、瑞希を連れて、廊下の端にある休憩所に行った。

「あのさ、俺…」

「うん」

「退院しようかって思ってるんだ」

「え？」

「っていうか、もう治療受けるのやめようかって」

「辛くなったの？」

「違うよ。治療したって治らないし、延命って言ったって、どれだけ命が延びるかもわからないし。毎日瑞希は帰っちゃうし、だったら、瑞希と暮らした方が、瑞希と一緒にいられる時間が取れる」

「暮らす？」

「うん、本当は結婚もしたい。あ…」

つて、未亡人になっちゃうか…。

「でも、籍は入れないほうがいいかなって思ってるけど…」

「籍、入りたい」

「え？」

「私、圭介の奥さんになりたいよ」

「でも、わかってるの？未亡人になるんだよ？」

「いいよ、別に」

いって…。瑞希の顔は、真剣だった。俺は、びっくりしてた。一緒に暮らすことだって、瑞希がどう思っかわからなかったのに、瑞希は結婚することも、OKしてくれるんだ。

「うん、そうだな」

瑞希と暮らすなら、ちゃんと結婚して、籍も入れて、そっちの方が、自然だよな…。

「うちの親にも、瑞希の親にも、言わなくっちゃ」

「うん！」

瑞希は元気に、そう返事をした。

早速、瑞希は家に電話をした。俺も親父に電話をしておふくろと一緒に来てもらおうよう、頼んだ。土曜だから、親父も瑞希のお父さんも、病院に来てくれるって言うてくれた。

もし、親がなんて言おうとも、関係ないって、硬く俺は決心していた。

親父たちが来て、みんな揃って、喫茶店に行き、俺がもう治療をやめて、病院を出て、瑞希と一緒に暮らすことと、そして結婚することを言った。

「圭介、それは、少し考え直した方が…」

親父は、戸惑いながらそう言った。でも、その横からおふくろが、「いいわ、私は賛成。圭介のしたいようにするのが1番だと思うわ」と、きっぱり言った。驚いた。1番、反対するだろうって思ってた。

「瑞希は？どうなの？」

ああ、瑞希のお母さんは、最初から俺との結婚、反対してたっけ。「圭介と、結婚したい」

瑞希は、真剣に答えた。

「私も賛成よ。瑞希がそうしたいなら、反対はできないわ」

瑞希のお母さんも、そうきっぱりと言った。おふくろといい、瑞希のお母さんといい、俺は母親の強さというか、女性の強さを目の

当たりにした気がした。

その逆で、親父たちは、おろおろしていた。だけど、瑞希のお母さんが、

「じゃ、早くにいろいろ決めないと、住まいとか、結婚式とか」と言い出した。

「式は大変だろう」

瑞希のお父さんが、俺を気遣い、そう言った。

「せめて、ウエディングドレスは、着せたいわ」

「あ、俺も見たい」

思わず、瑞希のお母さんの言葉に、俺もそう言ってた。ずっと、瑞希のウエディングドレス姿を想像してた。それは、絶対に見たいって思った。

「じゃ、身内だけで、式をあげましょう。圭介が疲れない程度の、簡単な、ね？」

おふくろが、俺に向かってそう言った。

ここまで、話が進むとさすがの親父たちも、賛成せざるを得なくなり、みんなですぐにでも、担当医の竹内先生に話してこようってことになった。

「あ、そういえば、この前、検査したんだ。結果を今日当たり教えてくれるって、竹内先生言ってた」

俺が、親父にそう言つと、

「そうか、じゃ、それも一緒に聞いておこう」

と、その日の午後、親父とおふくろが、竹内先生にアポを取り、話をしにいった。

瑞希と、病室で親父たちが戻ってくるのを待った。

「瑞希、本当に良かったの？」

「…何が？」

「結婚…」

「結婚しようって、言ってたじゃない？ 私たち。それが叶うんだもん。嬉しいよ」

そう言つと、瑞希はふふつて笑った。

「じゃ、まず退院したら、指輪見に行かなくちゃね」

「うん」

瑞希は、俺の顔を見て、すごく嬉しそうに微笑んだ。

おふくろが戻ってきて、

「OK出たわよ」

つて、言つた。でも、どうかよそよそしく、目が真っ赤だった。あ、検査の結果かな？

「ちよつと、瑞希さん、いい？」

親父は、瑞希を連れて、病室を出て行つた。なんだろうか？

「おふくろ、検査の結果は？ 先生なんて言つてた？」

「……」

おふくろの表情が固まつた。

「あとで、竹内先生が教えてくれると思うわ」

おふくろはそう言つと、病室を出て行つた。

瑞希は、なかなか戻つてこなかった。俺はベッドの上で、ぽつんと孤独になり、まるで迷子の子供のように、瑞希が戻ってくるのをただ、ひたすら待った。

そこへ、看護師さんが来て、竹内先生から話があるから、来てくれと言われた。

外来の竹内先生の診察室に入る。3時から外来が始まるから、もう待合室はいっぱいの人だった。

「ああ、圭介君。ここに座つて」

「はい」

「検査の結果なんだけどね…。あ、そうだ、さっき、お父さんがいらして…」

「はい、退院の許可ありがとうございます」

「うん…」

「で、先生、検査の結果は？」

「…転移しているのが、見つかった」

「転移？」

「うん…。お父さんとも話したんだけどね。もう治療するのは、やめようって」

「…治療しても、どうしようもないってこと？」

「……。ちょうど、お父さんが治療をやめて、圭介君を家に連れて行きたいと言いつ出したから…。そんな話をこちらからもしようと思つていたんだよ」

「あと、もつて、俺、どのくらいですか？」

「……。3ヶ月…」

「…？」

3ヶ月つて、今、7月の終わりだから、8、9、10…。秋にはもう？

「いや、圭介君。これもわからない。もつと、長く生きられるかもしれないし…」

「もつと、短いかもしれない？」

「……」

先生は黙つて、うなづいた。

「最後は、圭介君の思ったとおり、好きなようにさせてあげたいとお父さんもおっしゃってた」

「…はい。わかりました」

「圭介君」

「はい」

「結婚するんだって？」

「はい…」

「そうか。おめでとう」

「……。はい…」

俺は診察室を出た。

3ヶ月…？ たったの…？

そのまま、病室に戻る気にはなれず、誰も知ってる人がいなそうな階に行き、人気のないところのベンチに座った。

ぼくっとしてしていると、子供が走ってきた。入院している子供だろう。その後ろから、お母さんが待ってって言って、追いかけてきた。その光景をぼくっとして見ていた。

「子供…」

瑞希が、欲しがってたっけ…。でも、あと俺の命は3ヶ月…。

お母さんが、子供をやつとつかまえて、

「さあ、ひろ君。病室に戻ろうね」

と言うと、その子は嫌だとだだをこねた。

「薬、苦くて嫌だ。注射も痛いから嫌だ」

無理もない。まだ、小学校にあがるかあがらないかの、小さな子に、薬だの注射だのを毎日されたんじゃ、たまったもんじゃないだろう。俺だつて逃げ出したくなるときがあるのに。

そのお母さんは、どうするのだろうと見ていると、いきなりその子をぎゅって抱きしめた。そして、

「ママはね、ひろ君が大好き。大好きだよ」

その子供は、お母さんの胸の中で大人しくなった。そして、そのままお母さんに手をひかれて、戻っていった。

「あ、なんかすげえ…」

お母さんの愛情だよ……。なんて思いながら見ていた。子供をぎゅって抱きしめるお母さんの表情が、なんか俺のことを抱きしめるときの、瑞希にだぶって見えた。

瑞希は、俺が死んだらどうするのかな…。一人、孤独になっちゃ
うんじゃないか…。

また、他の親子が来た。今度は女の子と、お母さんだ。手をつな
いで、嬉しそうに歩いていた。

「お母さん、今日はずっといれるの？」

そんなことを、その子はお母さんに聞いていた。お母さんが、ず
っといられるよと言うと、その女の子は、体中で嬉しさを表現した。
スキップ交じりでお母さんと手をつないで、俺の前を通り過ぎてい
った。

その二人の後姿を見ながら、そのお母さんが瑞希にだぶって見え
た。

もし、俺の子供がいたら、瑞希は寂しい思いはしないんだろうな。
それとも、もし俺に似てたら、かえって、きついのかな…。

でも、時々聞こえてくる子供の声を聞いていると、俺は瑞希に、
俺の子供を残していきたいって、そんなことを思うようになってい
った。

その階の廊下をぐるりと歩いた。それから、エレベーターに乗っ
て、自分の病室に戻って行った。

病室に戻ると、瑞希がおふくろと、俺のベッドの脇に立っていた。

「あ！圭介」

二人同時に、こっちを向いた。

「あ、竹内先生のところに行ってた」

そう言うと、二人して、少し顔が曇った。おふくろは、今日、家
のことを何もしてこなかったからと言い、帰っていき、瑞希と二人
きりになった。

「屋上行かない？瑞希」

「うん」

屋上に行くと、まだ、日が照り付けてて暑かった。

「瑞希…」

「うん？」

「ううん。なんでもない…」

子供、作るうねって言いかけた。でも、たった3ヶ月で子供ができるかもわからなかったし、3ヶ月も生きられるかもわからなかったから、言つのをやめた。

もし言っただけで期待させて、できなくなつて、がっかりさせるのも嫌だった。

「何？圭介…」

「俺、あと3ヶ月だつて…。聞いた？」

「あ、うん。お父さんから…」

「そっか…」

やっぱり、聞いてたんだな。

「圭介…」

「ん？」

「圭介との時間、私大事にしていくよ」

「…ん。俺も」

「圭介と、一緒にいる。片時も離れない」

「うん…」

そう言つて、瑞希は俺にキスをして、抱きしめてきた。俺も瑞希をぎゅって抱きしめた。

瑞希のぬくもりが、愛しくて愛しくて、涙が出た。ああ、こつやつて最後の最後まで、俺は瑞希を抱きしめて過ごしたい。

次の週、俺は退院をした。これから、瑞希と二人の生活が始まるんだ。

20 結婚

瑞希のご両親が、瑞希の家のすぐ近くにアパートができて、まだ空きがあるからと、そこを借りてくれた。

家具も瑞希の親が、あれこれ買い揃えてくれた。うちの両親は、当分の生活費と、結婚式の費用を全部だしてくれた。

結婚式といっても、レストランの一室を貸しきり、瑞希の家族とうちの家族、笹おじさん、瑞希の友達の桐子さんが来てくれただけの、うちの結婚式だ。

でも、瑞希はウエディングドレスを着て、俺も白のタキシードを着た。

退院当日、俺が退院をいきなりするのを聞いて、杏ちゃんが帽子を持って、来てくれた。

「圭介君、退院おめでとう。良かったね。あ、これ、帽子。でも、もうすぐ必要なくなるかな？」

俺がもう、着替えて、瑞希が俺の荷物を整頓している横に来て、そう言った。

杏ちゃんは、いや、同室の人みんな、俺が、病気がよくなって、退院するもんだと思っていたようだ。

「あ。帽子？作ってくれたの？」

「うん」

俺はちらつと、瑞希の方を見た。瑞希はもくもくと、荷物の整頓をしていた。

「ごめん。帽子悪いけど、お兄さんにあげて。俺は、受け取れないや」

「…やっぱり、もう必要ない？でも、もらってくれないかな。それと、もし良かったら、連絡先…」

「俺、結婚すんの！」

唐突にそう言つと、杏ちゃんはすごい驚いて、

「え？だつて、圭介君まだ…」

「まだ、22歳だけど、もう結婚できる年でしょ？」

瑞希も、目を丸くして、こつちを見てた。

「彼女、いたんだ」

杏ちゃんが、がっかりしてそう聞いてきた。

「え？」

ちよつと驚いた。じゃ、瑞希のことなんだつて思つてたんだ？お姉さんじゃないつてこの前、言つたけどな。

「瑞希…。俺の彼女」

と、瑞希の腕を掴んで、俺のそばに引き寄せて、そう言つた。

「え？」

また、杏ちゃんは驚いた。

「でも、年が…」

「そ。年上女房…」

「圭介ったら、ちよつと」

瑞希は、真つ赤になった。病室内にいた人が、みんなそれを聞いてて、

「結婚？まじか～～！おめでと～～」

と、いつせいに言つてくれた。杏ちゃんだけは、固まってたけど。

ナースステーションによつて、挨拶をした。それから、竹内先生のところにも挨拶に行つたけど、回診の時間だったのか、いなかった。

会計とか、いろんな用事をすませたおふくろが、ようやく来て、
「さ、帰りましょうか」

つて言つて、病室の人たちに挨拶をして、病院を出た。ちよつと、病院を出るときに、竹内先生と婦長さんがやってきて、

「結婚式には、ぜひ、行かせてもらおうよ」

と、花束をくれた。治って退院するわけではない。それでも、

「おめでとう」

と、婦長さんは言ってくれた。結婚おめでとうって意味だったのか
もしれない。

タクシーに乗り込み、俺たちは家に帰った。瑞希は、タクシーの
中で、

「杏ちゃん、かなりショックを受けてたね。帽子もらってあげたら、
良かったのに」

と言ってきた。え？やきもち妬いてたのは、誰よって思ったけど、

「俺、瑞希の編んだ帽子かぶるからいいよ」

って、そう言い返した。

「え？私？」

「うん」

「私が、ぶきつちよなの、知ってるでしょ？」

と、瑞希が慌てて言うのと、助手席に座ってたおふくろが、ふき出し
て、

「瑞希さん、教えてあげるわよ」

と、言った。

そんなこんなで、結婚式には、瑞希の編んだ帽子を俺は、かぶっ
ていた。

お祝いがすんで、二人で、新居のアパートに向かった。

いつせいのせで、手をつないだまま、アパートの玄関に入った。

瑞希の手と、俺の手には、結婚指輪がはめてあった。

本当はエンゲージリングっていう、ダイヤモンドの指輪も買って
あげたかったんだけど、瑞希が結婚指輪があれば十分って言って、
きかなかった。

俺は、かなりその日、体力を消耗しちゃってて、シャワーをあびると、すぐに寝てしまった。

ふと、真夜中目が覚めた。まっくらな部屋の天井を見て、見慣れない風景に俺は戸惑った。

「あれ？」

すうすうっていう寝息がすぐ横から聞こえてきた。

「あ…。そっか…」

瑞希のぬくもりを感じ、瑞希の匂いを感じた。瑞希はいつの間にか、俺の布団に入ってきて寝ていた。さすがに二人で一つの布団は、窮屈だったけど、でも、すぐ横で寝ている瑞希のぬくもりを肌で感じる事ができて、俺はめちゃくちゃ幸せだった。

瑞希の寝顔を、見た。なんか、信じられなかった。

病室で、毎晩瑞希を思った。一人で寝る病院のベッドは、寂しくて、冷たく感じ、俺は自分の体を自分で抱きしめながら、丸まっていつも寝ていた。でも、今は、瑞希がいる。

瑞希のまぶたに、そっとキスをした。

「ん？」

瑞希が、気がついた。ふと、目をあけて、

「圭介？」

と、俺の顔を見ながらそう言つと、かすかに笑って、また寝てしまった。

「あ、寝ぼけてた、瑞希…」

寝ぼけた顔もすんげえ、可愛くて、愛しくて、嬉しくて…。

瑞希のぬくもりを体全体で、感じながら、その日はぐっすりと眠ることができた。

翌朝、目が覚めると、瑞希はもう隣にいなかった。吐き気と、頭痛が襲ってきたけど、でも、しばらく横になっていると、だんだんとひいていった。

「圭介、起きた？」

瑞希が、和室の襖を開けた。エプロン姿で、髪を後ろにしばっていた。顔はすっぴん。

「おはよ、瑞希」

「おはよう」

瑞希の笑顔が、めっちゃ、嬉しかった。

それから顔を洗い、ぼさぼさの頭で、パジャマのまま、俺は食卓に着き、瑞希が作った朝ごはんを食べた。

和室と、洋室、それにダイニングがある2DKのアパート。2階の角部屋のその部屋は、けっこう日差しが差し込んで、朝から明るかった。あ、そっか。東向きの部屋なのか。

ご飯を食べ終わってから、窓を開けた。夏の日差しのする朝、晴天で気持ちよかった。

「ね、クロと散歩しない？」

俺が言うと、

「うん。でも、昼間は暑いから、夕方からにしようよ」

瑞希はそう言って、食卓をかたづけ出した。

「じゃ、今日は1日何する？」

瑞希はキッチンで、洗い物を始めていた。その後ろから、瑞希を抱きしめながらそう聞いた。

「そうね〜。もう少し食器とか、いろいろ買いたいかな」

「じゃ、買い物に行くか…」

「掃除して、洗濯したらね」

「あ、俺も手伝う」

って言いながら、まだ、瑞希にくっついてると、

「圭介、離れてくれないと、洗い物ができないよ」

って、瑞希が笑って言った。

瑞希が洗ったものを、俺がふきんで拭きながら、食器棚に閉まっ

ていった。

それから、瑞希が洗濯物をベランダに干すのを手伝って、それから、瑞希が掃除機をかけてる間、俺が雑巾がけをして、それから、着替えて、瑞希は化粧をして、二人して、アパートを出た。

車の運転は、しないようにした。時々、方向感覚がおかしくなり、歩いていてもふらつくことがあって、こんなで運転したらやばいって思ったからだ。

けいれんは、時々朝、おきるけど、先生から処置の仕方などを瑞希がしっかりと、聞いてきていた。

ぶらぶら、公園の中を手をつないで歩いた。

「ベンチに座ってかない？」

そう言つと、瑞希は、じゃ、缶コーヒー買ってきて飲んでもいい？と聞いた。

瑞希は、コーヒー好き。でも、俺がコーヒーを飲むと気持ちが悪くなるからか、アパートにコーヒーを買い揃えずにいた。いいのにな。気を使わなくても。

「気持ちいいね」

ベンチに座り、俺がそう言つと、隣で、コーヒーを飲みながらほつてため息をついた瑞希が、

「木陰ってなんで、こんなに気持ちいいんだろうね」

で、俺に聞いてきた。

「なんでかな？」

それから、俺はゆっくりと、息を吸い込んだ。

「影ってさ、普通に考えたら、いいイメージないじゃん。闇とか、影とか。人って、明るさや光を求めてるって言うか、明るい方がいいってそういうふうに、思ってる場所あるじゃん」

「うん」

「でも、もしかして影ってさ。木陰が夏の日差しをさえぎってくれ

て、気持ちが落ち着いたり、ほっとできるように、人を癒してくれるものなのかもしれないよね」

「うん。そうかも…」

「闇も、俺、怖かった。病室で寝るときは、夜真っ暗になるのがすげえ怖くて。ほら、病院だし。夜中足音がするだけで、幽霊かとも思ったことあるし」

「ええ？そうなの？」

「だけど、昨日夜中に真っ暗な中目が覚めて、瑞希のこと見たりさ、瑞希のぬくもり感じてたら、闇の中なのに、すげえ、気持ちが落ち着いてた」

「え？夜中、目が覚めてたの？」

「あ、瑞希寝ぼけてたよ」

「ええ？本当に？」

「一回、目開けて、俺の名前呼んだんだ。覚えてないでしょ？」

「覚えてない…」

「あはは、やっぱり…」

瑞希と手をつないだ。昨日の式の前に、俺たちは籍も入れていた。

「もう、瑞希、榎本瑞希なんだね」

「うん。どう？」

「え？何が？」

「お嫁さんをもらった、心境」

「え？え…」

ぼりって頭を掻いてから、

「うーん、なんだろ。そうだな。どうどうと人前でいちゃつけるのが、嬉しいかな…」

「何それ…」

「じゃ、瑞希は？榎本瑞希になった感想をどうぞ！」

「ええ？感想？」

俺が手でマイクをつくって、瑞希の前に差し出すと、瑞希は赤くなりながら、

「圭介の奥さんになったんだなって、嬉しいですよ〜」
って、言った。

「あはは。まじで？」

「まじで〜」

公園は、夏で暑いからか、あまり人がいなかったけど、子供たちが夏休みだからか、何人かやってきた。虫かごを持っていて、どうやら、蝉を捕まえにきたらしい。

「蝉、けっこういるもんだね。今まで、夏でも会社にいたし、なんか、蝉の声とか気にしたことなかったから、わかんなかった」

「うちの辺は、特にいるみたい」

「ふうん」

それから、黙って二人して、蝉の声を聞いていた。じ〜じ〜
〜じ〜。

「蝉の声って、うまくできてると思わない？瑞希」

「え？どんなふうにな？」

「だって、この暑い夏、あの蝉の声聞いてると、もっと、暑くなる。

これは、冬に聞くもんじゃないよ、絶対」

「ふふ。そうかもね」

「ね。瑞希、これから買い物に行ったら、風鈴と香取線香買ってこない？」

「あ、いいね〜！」

「あと、花火も！俺、線香花火好きなんだよね」

「え？意外〜」

「なんで？」

「圭介、もつとき、ドラゴンとか、打ち上げとかそういうのが、好きかと思った」

「ああ、そういうのも、好きだけど、俺、これでもけっこう、ロマンチストなんすよ」

「ええ？そうだったの？知りませんでした」

「あとさ、あとさ、この辺って、お祭りある？」

「あるよ。確か、8月のはじめ、あ、来週かな？」

「瑞希、絶対に、浴衣着て！」

「ええ？」

「着て、着て、着て、着て！」

「あはは…。わかったよ。確か実家にあつたはずだから、着るよ」「やった！」

「くすくす。圭介、子供みたい～～」

「子供だもん～～」

「ええ～～？もう、結婚もしてるのに？」

「あ、そっか…」

しばらく、瑞希とふふって笑いあって、それから、一緒に手をつないで、買い物に行った。

その公園から歩いて、10分もしないところに、駅があり、その周辺に大手のスーパーマーケットやら、レンタルビデオ屋やら、銀行やらがある。

スーパーに入り、食器や小物を買ったり、俺のＴシャツや、下着を瑞希が買ってくれたりした。

「ああ、まさに、夫婦って感じだね！」

と、レジではしゃいでいると、店員にくすくす笑われてしまった。

俺たちは、こう見えても、夫婦なんです！って声を大にして言いたかった。なるべく、指にはめてる指輪をちらちら見せて、アピールした。

いや、別にその辺の人に、俺らが夫婦だって知ってもらわなくたっていいんだろうけど、でも、なんとなく、見せびらかしたい気分

だった。

花火と、風鈴と、蚊取り線香も買った。それから、食品売り場で、食料品を少し瑞希は買つと、

「今夜は、うちの実家でごちそうになっちゃおうか」
つて、言い出した。

「ああ、うん。いいよ」

買い出しがすんで、ビデオ屋によつた。二人で、何を借りようか
つて悩んだ。

「瑞希、これは？」

「ホラーは嫌だ」

「なんで？ いいじゃん。二人で観たら怖くないって
嫌だ！」

「じゃ、これは？」

「サスペンスも嫌だ」

「ええ〜？ おもしろそうじゃなか
なんだよ、いったい何がいいの？」

「あ！これ」

「え？何？邦画？邦画つて俺あんまし観ないんだよね」

「そうなの？これ、圭介に似てる子出てるよ。ほら」

「俺、こんな金髪じゃねえし…」

「あはは、この子だって、ふだんは金髪じゃないし。黒髪の際はそ
つくり！」

「三浦春馬？」

「そうそう」

「『恋空』？」

「知らない？」

「うん、しらね〜。こういうのって、女子が好きそうだよ。借
りたい？」

「うん。借りない」

「なんで？観たかったんじゃないの？」

「これ、最後別れ別れになっちゃうから、観たくないや。もっと、ハッピーエンドとか、笑えるのとか、ほんわかできるのが、いいな」

「別れちゃう話なの？」

「そう。日本の映画って、多いよね。なんか、最後にどっちかが死ぬ……」

「え？」

「……。そうだ！これこれ！観たかったの。これにしようよ、圭介」

「え？まじ？『魔法にかけられて』？」

「うんうん」

「ゲ、信じらんね……。でも、しょうがない。瑞希が観たがつてるなら。」

「って、嫌々ながら、観ていとけっこう、はまった。」

昔はお姫様って言うのは、ただ、ひたすら王子様を待ってたり、王子様の方がドラゴンと戦い、お姫様を助け出すのに、このお姫様っていうのは、自分の好きな人のために、勇敢にもドラゴンに向かっていった。

なんか、瑞希には言えなかったけど、その勇敢さが瑞希に見えた。言ったら、怒られたかな。瑞希も、絶対に、俺がドラゴンにつきまったりしたら、助けに来そうだ。」

「この、お姫様、怒ったことがなかったんだね」

「え？」

「あ、瑞希の観ていた方ってそこ？」

「怒るって感情を楽しんでたね」

「うん」

「いろんな感情があつて、それを感じて味わつて、やっぱり大事だよ」

「うん。そうだね」

「圭介…。怖くない？」

「ん？」

「悲しかったり、苦しかったり…。してない？」

「うん。大丈夫だよ。瑞希がすぐそばにいるから」

「うん…」

優しく微笑む瑞希を、抱きしめた。

「やつぱ、病院でて良かった。だって、病院じゃ、抱きしめたくてもできなかったもん」

「え？」

「え？つて…。俺が時々、瑞希のこと抱きしめたくってたの、知らないの？」

「ふふふ…」

「何？その意味深な笑い」

「だって、私が、圭介のこと、抱きしめたくってるの、圭介は知らないんだろうなと思って」

「え？まじで？」

「まじで、まじで！」

そう言つと、瑞希は、笑いながら、俺のことをぎゅって抱きしめてきた。

「それからね…」

「え？」

「前から思つてた。圭介の鎖骨…」

「さ、鎖骨？鎖骨ってどこだっけ？」

「ここ」

瑞希は、俺のＴシャツを、少しずつして鎖骨を触った。

「……？鎖骨が、何？」

「色っぽいんだよね」

「ええ……？何それ！」

「あ、やっぱり、引いた？」

「え？」

「言ったら、引くかなって思って、内緒にしてたんだ。やっぱり、言わなきゃよかった」

「え？え？鎖骨が、何？色っぽいの？え？待って、瑞希。ほかは？ほか！」

「……ほかって、圭介の色っぽいところ？」

「うん」

「手。指。綺麗だね」

「俺の？」

「自分の手を見てみた。……どこが？」

「首、横顔。鼻。目。眉毛。まつげ……」

「……。あ。もういいや」

「え？なんで？」

「いや……」

「やべ……。顔から火出る！」

「あ、圭介、真っ赤だ」

「だから、もういいって！」

「圭介、照れてる……！」

「ああ、もう！何？じゃ、時々じっと見てるとき、そういうこと考えてた？」

「え？」

「俺のことじっと見てるときあるじゃん。あれさあ、見とれてるでしよって、俺、茶化してたけど、まじで、見とれてたの？」

「うん！」

うんって…。

瑞希は、無邪気にそう言つと、俺の顔をまじまじと見て、

「圭介つて、綺麗だよな」

「き、綺麗つて言われても、嬉しくない…」

「なんで？じゃ、かつこいい」

「かつこいいつて、え…」

「あはは。また、照れてる！ね、それ、まじなんだよね」

「何が？」

「本当に、自分のこと、かつこいいつて思つてないんだよね？」

「思つかよ！普通。思つてたら、ナルシストつてやつでしょ！」

「やっぱり、自覚はないんだ」

「なんの？」

「くす…。圭介、絶対もてるのに。もてることも自覚してないよね」

「もててないから」

「嘘…。看護師さんにも…。杏ちゃんにも…」

「だから、俺は、瑞希にだけもててたら、それでいいの。それで満足なの。瑞希は？」

「え？」

「ほかのやつからもてたいの？」

「圭介だけでいいよ」

「だろ？」

「うん」

そう言つと、瑞希は俺の肩にもたれてきて、手をにぎつて、

「圭介のね。全部が好き」

つて、ささやいた。

ああ、やべ……。思いつきにやけているか、真っ赤になって

る、俺。

でも、なんか、照れ隠しもする気になれず、そのまま俺の肩にかかる瑞希の髪の毛の匂いをかぎながら、幸せに浸っていた。

21 今を生きる

それから、天気の良い日にはよく、夕方クロの散歩に行った。

俺はたまに、午前中吐き気がおさまらず、ぐったり寝ているときもあつたり、たまにけいれんも起きていたけど、そんな日は瑞希と家でゆつくりと過ごし、他の日は、瑞希の家に行くか、その辺をぶらつくか、たまに、会社の人が遊びに来たりしていた。

順平や、兄貴も、時々顔を出した。順平は、夕飯どきに来て一緒に食べていく日もあつた。兄貴は、少し話をして、すぐに帰って行った。

電車に乗ったりするのは、避けていた。だから、俺の実家にはなかなか行けず、親父やおふくろの方が、休みの日に来てくれていた。おふくろは、時々来ては、瑞希に料理を教えてて、それを横から眺めながら、

「ああ、この嫁と姑は問題ないな」

なんて、わけのわからないことを勝手に思っていた。

土曜日の夜、瑞希の庭でバーベキューをしようので、瑞希と肉を買って、花火を持って、遊びに行った。

修にいの彼女っていう、柚ちゃんも来ていた。明るく元気のある子で、瑞希は、

「とても、いい子なんだよね」

って、褒めていた。結婚式にも来てくれて、なんか感動して泣いてたっけ。で、なんか、結婚することになったとかって、瑞希が言ってたけど、あれ、どうなったのかな。

バーベキューをしているとき、瑞希がそのことを聞くと、

「はい。式場が決まったんです」

と、にこにこ顔で、柚ちゃんは答えた。

「おめでとう。来年の6月？ジューンブライต์だね、柚ちゃん」

「はい」

「やっと、これで、修二も安泰ね。ほっとしたわ。」
瑞希のお母さんは、そう言って、ため息をついた。

「さあ、飲むか〜！」

「でも、修二、柚ちゃん送っていかない」と

「あ、そっか」

今日は、お酒なしでつてことで、バーベキューを始めて、終わってから、俺らが持っていた花火をした。

最後には線香花火…。瑞希と二人縁側に座って、静かに線香花火を見つめた。横で、クロがくく〜んってなきながら花火を見ていた。火が苦手なのか、近づいては来なかった。

花火を見ている瑞希を見た。綺麗だなんて思った。

翌日、ちよつと離れた大きな公園で、お祭りがあるというので、瑞希と一緒にいった。瑞希は実家でお母さんに浴衣を着せてもらった。紺色で、朝顔の模様がある浴衣だった。

う、色っぽいっす！もう、それだけで俺は有頂天だった。

瑞希とお祭りに行き、綿菓子を食べたり、焼きそば、ホットドックなんかを食べた。それからヨーヨーをつつて、瑞希が1個も取れず、俺が瑞希の分も取ってあげた。射的でも、くまのぬいぐるみをゲットしてあげて、瑞希はそのぬいぐるみを嬉しそうに、抱っこしながら歩いていた。

色っぽい浴衣姿に、大きなくまのぬいぐるみ…。そのギャップがなんだか、可愛くて、ほほえましかった。

瑞希って子供っぽいところもあるんだな…。一緒に暮らしてて、いろんな瑞希を知って、嬉しくなった。

瑞希は、アニメとか、ドラマを観ただけでも泣いていた。お笑いも好きで、必ず観て、大笑いをした。怖いものが苦手で、テレビで

やってる怖い話は絶対に観たくない、俺が観たがっても見せてくれなかった。

それから、虫も苦手だった。蝉の声を聞くのはいいけど、一回網戸に蝉が止まったときには、大騒ぎしていたし、でかいクモがトイレにいた時には、トイレに入ったとたん、悲鳴をあげたこともある。

「圭介、取って、取って！」

しょうがないな〜って、クモをバシってつぶすと、また悲鳴をあげる。殺さなくっても！って責められてしまう。

「圭介は、なんで虫が平気なの？」

「俺、子供のころ昆虫博士になれるくらい、虫好きだったし……」

「そっか。良かった。圭介まで虫嫌いだと、誰も取ってくれる人いないもんね」

「でも、瑞希、大丈夫にならないとさ……」

「え？」

「ううん。なんでもない」

ずっと、虫を取ってあげるわけにはいかないんだって、そう言いそうになっただけどやめた。

俺らはいつの間にか、未来には俺がいなくなるってそういう話をしなくなった。いや、未来の話をまったく、しなくなったと言ってもいいかもしれない。

わざと、考えないようにとか、言わないようにしているんじゃない。

それよりも、まず今を大事にしたいって、お互い思ってるからだ。未来を心配したり、怖がったり、悲しがりたりしている暇があったら、今をもっと感じて、瑞希をもっと感じていたいって、そう思ってたし、きつと瑞希も同じことを思っていたと思う。

瑞希は音楽も大好きで、テレビがついていないときには、しょっ

ちゅう音楽を流していた。瑞希が好きなのは、ボサノバ、ジャズ、あと、なんかわかんないけど、ヒーリングミュージックってやつ。特に「ネイチャーサウンドオーケストラ」ってユニットが好きで、海の波の音や、木々のざわめきと一緒に、ピアノとサクスの演奏がはいっているそのCDは、俺もなんか、癒されて、好きだった。時々俺の好みに合わせて、ゆずや、ミスチルや、最近流行の歌も一緒に聴いた。瑞希も、ミスチルが好きで、ミスチルのCDを流してた時、

「あ、HANABI!」
と、耳を傾けてた。

「この曲、最初に会ったとき、車で聴いたよね。覚えてる？」
瑞希が、俺に聞いた。

「うん。覚えてるよ。すごく綺麗な夕日でさ…」

「うん。夕日、綺麗だったね」

俺が、HANABIを口ずさむと、瑞希が少し目を細めてそれを、聞いていた。

『もう一回 もう一回 何度でも君に逢いたい めぐり逢えたこと
でこんなに 世界が美しく見えるなんて 想像さえもしていない
単純だって笑うかい 君に心からありがとうを言っよ』

そう口ずさんでみて、俺は黙り込んだ。それから、少し目頭が熱くなつて…。

「瑞希、今のさ…」

「ん？」

「今の歌詞、なんか俺のこと歌ってるみたい」

「会いたいつて？会えてるじゃん、今」

「そうじゃなくてさ…。そのあとのところ」

「……」

「俺、瑞希に会ってから世界が美しく見えるようになった なんか、

世界が変わっちゃったみたい……。だからさ、瑞希にありがとうって言いたいわって俺もそう思ってた……」

そう言っと、瑞希が目をうるませた。

「それは、私もだよ、圭介。私も圭介にありがとうって言いたいよ」
「……」

瑞希ともう一回、HANABIを聴きなおした。瑞希がぼつってつぶやいた。

「圭介と初めて会って、家に帰ってから、この歌を思い出して、泣いたんだ」

「え？」

「圭介にね、もうあの時から恋してて、もう一回会いたいわって思ってた」

「一緒だ。俺も、瑞希に会いたいわってすげえ、切なくなってたよ」

目と目を合わせて、二人でくすくすって同時に笑った。俺ら、やつぱりさ、一緒になる運命だったんだよ……って心の中でつぶやきながら、また、HANABIを俺は口ずさんだ。

風鈴の音は、音楽を消して聞いた。二人で、窓を開け、風を感じ、緑や空を見た。あの雲の形、面白いね、とか、そんなことを言いながら。

雨の日も、雨の音を聞いた。雨が上がると、ぬかるんではいたけど、公園に行つて、まだ、はっぱに残る雨のしずくを見ているのが、けっこう俺は好きだった。

雨で少し涼しくなつて、外を歩くのも大変じゃなかったし、雨上がりのアスファルトは、きらきらまぶしくて、綺麗だったし。

瑞希は、時々、黙って俺の顔を見ていた。あ、また、見とれちゃってるのかなって思いながらも、そのまんまにしていた。

瑞希が俺を見る目が好きだった。すごく優しく、あったかくっ

で。ずっと、その目で、見つめられたいなっでよく思っていた。

そして俺も、よく瑞希のことをじっと見ていた。たまに瑞希が照れて、

「あんまり見ないでよ」

って言ったけど、そんなのおかまいなしに見ていた。

どんな仕草も、どんな表情も見逃したくない。そんな思いがあつて、先に瑞希が寝たときには、瑞希の寝顔をずっと見てたし、瑞希の髪の毛の匂い、寝息、すべてが愛しくて、愛しすぎて、涙が出て止まらなくなつたこともあつた。

お盆休みには、瑞希のお兄さんの雄一さん家族が、瑞希の実家に泊まりで遊びに来た。

今、仙台に住んでいて、一人女の子がいる。そして、第2子が奥さんのおなかの中にいた。女の子は、緑ちゃん。いい名前だな。可愛くて、人懐っこくて、俺にもすぐになついてくれた。

娘ができたなら、こんな感じなんだって、なんか嬉しかった。

瑞希は、子供が欲しいって話は、まったくしなかった。俺も、自然のなりゆきにまかせていた。

だから、特に避妊をしてたわけでもなかった。それは、瑞希も知っていた。だけど、瑞希も何も言わなかった。瑞希も自然のなりゆきに任せてて、もし、妊娠してもそれはそれで受け入れようって思っていたのかもしれない。

お盆休みのあと、病院の検診に瑞希と行った。看護師さんや先生は、新婚生活はどう？なんて聞いてきたけど、俺はなんだか、照れてしまい、「ああ、まあ……」としか言えなかった。

検査が終わり、瑞希と喫茶店に入ってご飯を食べた。

「なんか、ここ久しぶりって言うか、懐かしいね」

「うん、よく入院してたときには、来たもんね」

「あ、知った顔を何人かいる」

「あれ？杏ちゃんじゃない？」

瑞希がいきなり、そう言った。喫茶店の奥を見ると、杏ちゃんとお母さんが、二人でご飯を食べていた。杏ちゃんがこっちに気づき、お辞儀をした。それから、俺らが食べ終わるころ、杏ちゃんも食べ終わったらしく、俺らの席に来た。

「お久しぶりです。今日は？」

「ああ、検診」

「そうなんですか…。あ！結婚したんですね。看護師さんから聞きました。おめでとunggざいます」

「うん、ありがとう」

「……」

杏ちゃんの目がうるうるした。え？なんで？

「すみません。あの…。兄が…」

「お兄さんがどうしたの？」

「ここ、いいですか？ちょっと座っても」

「いいよ、どうぞ」

瑞希が、椅子にいていた荷物を手に持って、杏ちゃんが座れるようにした。

「圭介君が、元気になって退院したから、兄も私も、希望を持ってたんです」

「え？」

「同じ病気でも、退院できるんだって…」

瑞希と目を合わせた。本当のことを言ったほうがいいのか、少し悩んでしまった。

「でも、昨日先生から、両親が呼ばれて、兄は、もってあと半年か、3ヶ月かって言われて…」

「……」

「転移したんだそうです。兄は、すっかりそれを聞いて落ち込んで

しまつて、カーテンを閉め切つて、私たちとも口を聞かなくなつて」
「そう……」

「どうしていいか……」

杏ちゃんは泣き出してしまつた。泣いた杏ちゃんの隣に座つてた瑞希が、優しく杏ちゃんの背中をなでてあげた。

「あのさ、俺、元気になつたから退院したんじゃないんだよ」

「え？」

「一緒。転移して俺も、余命3ヶ月つて言われた」

「でも、結婚……」

「うん。両親がさ、残りわずかなら俺の好きに生きてらいいつて。

それで、退院して、瑞希と暮らすほうを選んだ」

「そ、そうだったんですか？」

目を丸くして、杏ちゃんは瑞希を見ていた。瑞希は、にこつて微笑みながらうなづいた。

「お兄さんも、多分、大丈夫だよ」

「え？」

「今は、かなり辛いと思うけど、死を覚悟しちゃうとけつこう、潔くなれるつていうか、人間意外と強いもんだなつて俺自身思つもん」

「……」

「ただ、周りにね、ちゃんとついてくれる人がいてくれたらの話」

「瑞希さんのことですか？」

「うん。瑞希もだし、俺の家族も、瑞希の家族も、すげえ優しく俺のこと、見守つててくれるし」

「……」

「思い切り、俺、甘えてるけど……」

「ふふ……」

瑞希が、笑つた。それを見て、また杏ちゃんが目を丸くした。

「甘えちゃうほうが、周りもいいみたい。なんていうのかな、変に頑張って気を使うと周りも気を使う。でも、どうどうと甘えると、甘えさせてくれる。で、けっこうそれなりに、いい関係になってるみたい」

「気を使わない…?」

「うゝん。ま、落ち込んでたら、落ち込ませてでもいいし、泣いてたら、泣かせてあげるといいと思うよ。変に、明るく元気づけようとかしないで」

「難しいです。それ…。私、兄の前では、必死で泣かないようにはしてるんですけど…」

「泣いてもいいんじゃない?」

瑞希が、いきなり口をはさんだ。

「え?」

「私なんて、けっこう圭介と一緒に、泣いてるもの」

「そうなんですか?」

「最近ほ、泣かないけど。どっちかっていうと、笑ってみたい、笑ってみたい、あれ?笑ってばかり。あははは…」

瑞希の、あっけらかんとした態度にまた、杏ちゃんは驚いていた。

「強いんですね」

「ううん。全然」

「でも…」

「俺たちね、なんていうのかな。今を生きてるって感じ」

「今を?」

「うん。朝起きてから、一緒にご飯食べた、掃除や洗濯したり散歩行ったり、それだけの日々だけど、それを満喫してる。一緒にね」

「でも、毎日毎日が充実してる。多分、今まで生きてきた中で、1番」

「……」

杏ちゃんは、ずっと、目を丸くしたまま、聞いてた。

「お兄さんもそのうち、命を、毎日を大事に生きようってするかもよ。杏ちゃんも家族もみんな、お兄さんとの時間を大事に生きたいんじゃないのかな」

「泣きたいときには、泣きながらもいいから」

瑞希がそう、付け加えた。

「そうだね。無理はしないでさ」

「はい…」

杏ちゃんは、そう言って、お母さんが待つて席に戻っていった。

「杏ちゃんのお兄さんに会ってく？圭介」

「うーん、いいや。今会っても、なんか慰めの言葉しか言えそうもないし」

「そういうの、いらないの？」

「うん。何を聞いても、耳に入らないかも…」

「圭介もそうだった？」

「うーん。なんていうかさ。逆に辛くなったりするかも…だしさ」
「そっか…」

瑞希と席を立ち、俺たちは病院をあとにした。タクシーに乗り込み、後部座席で、ずっと、手をつないでいた。

検査の結果は、よくもなく、悪くもなく…。でも、そんなのおかまいなしに俺は、瑞希との生活を楽しんでた。

「あ、ヒグラシ」

瑞希が、蝉の声を聞いて、耳をすました。

「なんか、このカナカナカナって蝉の声聞くと、せつな〜くなるのは、何でだろうね？」

瑞希が蝉の鳴き声が終わってから、そう言った。

「夏の終わりって思うからかな？」

少しずつ夜、涼しくなり、夜、虫のなき声が聞こえるようになった。瑞希と布団に入って、手をつなぎ、虫の声を聞いた。

「こういう虫の声も、切なくなるね」

そう言つと、瑞希がこつちを向いて、黙ってうなづいた。それから、もそもそと俺の布団に入ってきた。そして、俺の胸に顔をうずめて、

「圭介の心臓の音…」

「ん？」

「この音を聞きながら、今日は眠るね」
つて、言つた。

瑞希は、時々甘えてきた。たいてい俺の方が甘えん坊だから、瑞希は俺のこゝを受け止めるほうだったけど、でも、時々甘えてきて、可愛かった。

ぎゅつて瑞希を抱きしめた。俺の肩にすっぽり入るくらいに、瑞希は細い。外からは、まだ、虫の声が聞こえていた。

9月、残暑は続いていた。でも、台風が時々来るようになった。ガタガタ、アパートが揺れる。いつもは閉めない雨戸をひいた。夜寝ようと電気を消すと、真っ暗になった。

「いつも、外から少し明かりが入ってたんだね」

「うん、真っ暗だ」

ガタガタ…。揺れる音と、風の音、雨戸にたたきつけられる雨の音。それを聞いていた。

「瑞希、風の音が怖いから、一緒に布団で寝よう」

そんな冗談を言つて、瑞希の布団に潜り込んだ。瑞希は、くすくすって笑つて、俺の体にまわりついた。

「すごい音だね、圭介」

「うん。でも、地球が生きているってそんな感じがするよ」
「地球が？」

「地球だって、一つの生命体だって思わない？瑞希。怒るときもあれば、泣くときもあるんだよ。きっと」

「じゃ、今は泣いてるのかな？」

「さあ？」

「怒ってるのかな？」

「はは、大笑いしてたりして…」

「ええ？」

「ちょっと、見方、いや聞き方かな、変えてみると、台風の雨の音も、風の音も、違って聞こえるよ」

「そう？どんなふう？」

「う〜〜ん。オーケストラかな」

「ええ？」

「ドラムの音、ピアノの音、それから、管楽器、打楽器」

「ふふ…。圭介って面白いね」

「え？そう？今まではこんなこと考えたこともなかったけど、自然ってすごいなって思ったら、けっこう楽しいよ」

「うん…」

「蝉の声も、風の音も、木々が風に揺れてならす音も、全部が、情緒があるよね」

「うん」

「五感ってさ、今まで使ってなかったかも」

「味覚だけは使ってたんじゃない？」

「ああ。そっか。俺食べるときには、食べるの味わうので精一杯だもんね」

「うんうん」

「じゃ、あとの感覚、聞く、嗅ぐ、見る、感じる、その辺は使って

なかったかな」

「今は？フルに活用してる？」

「うん。生きてて良かったって思うよ。っていうか、生きるって五感フル活用してさ、今を感じることなのかなって思う」

「あ、それ。私も同じこと思ってたよ、最近」

「やつぱり？」

「うん」

「なんかさ、病気になる前、俺、仕事ばっかしてたじゃん。仕事に追われてるって言うか、時間に追われてたって言うか、そんなときには、こんなに今を生きたってことなかったよね」

「うん…」

「何かに流されるように生きてて、いや、生きてるって感覚もなかったな」

「死んでた？」

「かも…。じゃなきゃ、眠ってた」

「ふうん。じゃあ、今は生きてるんだね」

「うん。瑞希と生きてる」

「…私、時々圭介の心臓の音聞きながら寝るでしょ？」

「ああ、うん」

「鼓動を聞くとね、生きてる、って思い切り感じるの」

「俺が？」

「圭介もだけど、私も。私自身も」

「そうなんだ、じゃ、今日は俺が瑞希の鼓動聞きながら寝てもいい？」

「うん」

俺は、瑞希の胸に耳を当てた。

「あれ？」

「え？聞こえない？」

「うん。俺と違って、瑞希、ほら」

「ん？」

「心臓の前に、胸があるからかな」

「それで？」

「背中向いて」

「うん」

後ろを向いた瑞希の背中に、耳を当てた。あ、聞こえた。

「背中でも聞こえる？」

「瑞希の息遣いまで聞こえる」

「そうなんだ」

「あ、本当だ」

「何？」

「なんか、生きてるって感じる」

「でしょ？」

「……。なんだろうね、安心する。やっぱり、お母さんのおなかの
中で聞いてた音だからかな」

「どうなんだろうね？」

「瑞希の背中、小さいね」

「え？そう？」

「俺の胸にすっぽり入るよ」

「うん……」

「瑞希……」

「うん？」

「愛してるよ」

「……えへへ」

「え？」

「くすぐりたいよ。それ。圭介初めてじゃない？言ったの」
「あれ？そうだったけ？」

「うん」

「瑞希も、言ってくれたことないね。大好きってよく言うけど」
「だって、照れくさいもん」

「あ、ずっこい。俺は言ったのに」
そう言つと、瑞希は瑞希を抱きしめてた俺の腕を、ぎゅって握つて言った。

「圭介のこと、すんごく……く……」

「すんごく……く……?」

「愛しいよ……」

「うん」

ああ、そうだった。瑞希は、愛しいって言ってくれる。それも愛してると同じだね。

そして、俺は瑞希のことを、抱きしめながら、眠りについた。

22 赤ちゃん

9月の検診で病院に行くと、杏ちゃんのお兄さんは退院していた。看護師さんの話だと、杏ちゃんが俺の話をお兄さんにして、それで、お兄さんも病院にはもう、これ以上いたくないと、退院を決めたのだと言っていた。

俺たちといえば、今日は何日で、何曜日かっていう感覚がだんだんと消えていつていた。ただ、朝が来て、1日を生きる…その連続。

でも、ある時、瑞希がカレンダーをじっと見つめていたときがあった。8月、7月とめくり返して、なにやら、しかめっ面をしたり、数を数えている。

「どうしたの？」

「なんでもない」

瑞希は、よそよそしかった。

もしかしたら、俺が退院してからの日にちを、数えていたんだろうか？7月の終わりの時点で、余命3ヶ月と告知された。

9月も半ばを過ぎ、もうどのくらいの日がたち、残りはどのくらいかと数えていたんだろうか…。

その日の夕方、クロを連れて、散歩に行った。瑞希は、何かを隠している、なんとなくわかる。目をあまり合わせないようにしたり、ぎこちない笑顔を作る。

散歩から帰ると、そのまま、瑞希の家にお邪魔をした。

「クロちゃん、最近は大ちゃんにお散歩連れて行ってもらって、大喜びなのよ」

「俺も、すごく嬉しいです」

瑞希のお母さんと、そんな話や、修にいの結婚の話なんかをして、しばらく盛り上がっていた。

ふと、瑞希がなかなかリビングに来ないことが気になった。

「瑞希、どうしたのかな？」

「ああ、なんか2階に行ったみたいね。自分の部屋に用でもあったんじゃない？」

気になった。まさか、泣いてたりしてないよね…。

2階に上がって、瑞希の部屋に入った。

「どうしたの？なんで2階に来ているの？」

瑞希は、ベッドの前で座り込み、泣いていた。

あ…、やっぱり泣いてた！

「どうしたの？」

なんで俺に隠れて、泣いてるんだよ？

瑞希のそばに行くと、瑞希が手に何かを持っていた。

「何？…これ」

瑞希の手にあるものを見ながら、聞いてみた。

「これ、妊娠検査薬」

「え？」

妊娠…？

「この赤紫の線が出たってことは、陽性なの」

「よいせいつて…何？」

何？どういうこと？

「妊娠してるってこと」

「……。赤ちゃん…、できたってこと？」

「うん…」

俺の、赤ちゃん…？

「まじで？」

「うん」

「すげえ…、すげえ瑞希…」

俺は嬉しさのあまり、泣いていた。

そして、瑞希を抱きしめようと引き寄せたけど、おなかに赤ちゃんがいるから、そっと抱きしめた。

「瑞希のおなかの中に、俺の赤ちゃんがいるんだ」

「うん…」

「すげえ、命が芽生えたってことだよな」

「うん…！」

赤ちゃん…。すげえ。命が宿ってるんだ。それも、俺と瑞希の…。涙が溢れた。

瑞希の顔を見ると、瑞希も泣いてて、ほっぺたに涙のあとがあった。それを俺の手で拭いた。

「命ってすごいね」

瑞希は、まだ目をつるませていた。

「すごいと思わない？瑞希。だって、こんなに人を感動させるんだよ」

「うん…」

瑞希の目からまた、涙がこぼれた…。と、同時に俺の目からもこぼれてた。

「お母さんにも、報告に行こう」

そう言つて、瑞希の手を引き、一階におりた。

「お母さん、私妊娠したよ」

瑞希が、俺の手をにぎったまま、お母さんにそう言った。お母さんは、一瞬びつくりした顔をして、

「本当に？瑞希。おめでとぅ…！」

と言つて、涙を流した。

夜、瑞希のお父さんと修にいが帰ってきてから、二人にも報告をすると、二人とも喜んでくれた。

それから、家に帰って、親父とおふくろにも、電話で話をした。
次の日、おふくろが早くからうちに来て、泣きながら、おめでとう
と言って、俺たちを抱きしめてくれた。

おふくろは、変わった。俺の前でも泣いたり、感情を出すようにな
った。

その日に、瑞希とノートを買いに行った。そして、赤ちゃんにむ
けた日記をつけることにした。

綺麗な空や、木々や、花。それから瑞希の顔、そして、瑞希が俺
の写真も撮って、それを毎日、日記にコメントつきで貼っていった。
瑞希と子供の名前も考えた。5月生まれだ。さわやかな季節だか
ら、男の子なら「爽太^{そうた}」女の子なら、春だから、「春香」って瑞希
と決めた。

ますます、毎日は感動の日々になった。

まだ、生まれてきていないとはいえ、おなかの中にはもう、命が
いるんだって思うと、嬉しくてしょうがなかった。瑞希のおなかに
向かって、話もした。

散歩に行くと、自分が感じている風のこと、光のこと、雲のこと、
そんなことをいちいち、赤ちゃんにむかって話した。そんなとき、
瑞希はすごく愛しそうに、おなかをさすった。ああ、もう、母親な
んだって、実感した。

瑞希に、俺の子を残していける…。

それって、辛いことになるんじゃないのかって、何回か思ったり
もしたけど、愛しそうにおなかを見ている瑞希の顔を見たら、瑞希
なら、一人でもこの子を守って、生きていけるんじゃないかって、
そんな気がした。

いや、一人じゃない。まだまだ生まれるのは先なのに、俺のおふ
くろは、赤ちゃんの産着を買ってきたり、瑞希のお母さんは、おも

ちやまで、買ってくる。

俺たちのアパートは、あつという間に、赤ちゃんのもので埋まっていた。

「気が早いよね〜。君のば〜ばたちは…」

そんなことを瑞希は、おなかの子に話していた。

どんな子が生まれてくるのだろう？ 女の子なのか、男の子なのか…。

ある日、俺はすごく不思議な夢を見た。色白で、真っ黒な髪をした、小さな男の子が俺に向かって何か話していた。

「パパ」

え？ パパって言ってる？ 俺の子か？

「一緒に、いっぱい遊ぼうね」

そう言つと、その子はいこつて笑つて、どっかに消えていった。

そこで、目が覚めた。瑞希が、すやすやと横で寝ていた。

「夢…」

俺の願望が、夢になって現れたのか？ 子供と一緒に、遊ぶ空想、海に行ったり、抱っこして高い高いをしたり、公園に行つて、ボール遊びをしたり、そんなことをよく空想しているからか。

その夢の話は、瑞希にはしなかった。俺が空想をしていることも、瑞希には、言わなかった。

妊娠検査薬で、妊娠してるとわかってから、1週間後、俺と瑞希は産婦人科に行った。

待っている間、ドキドキした。実は妊娠していませんとか、残念ですが…なんてことはないよな。

瑞希が診察室から出てきた。顔はにっこりと微笑んでいた。ああ、良かった。その顔ですべてがわかった。

「2ヶ月目だつて」

「そうか〜」

「写真見る？」

「え？なんの？」

「赤ちゃんのだよ」

「え？」

「エコーで撮った。これだよ。小さいでしょ。胎芽っていうんだって。胎児の芽…」

「…これ？」

「うん。その小さい芽が細胞分裂して大きくなっていくんだね。不思議だよね」

「すげえ…」

俺は、しばらくそのエコーで撮った写真を眺めていた。赤ちゃん…。命…。こんなに小さい…。

「瑞希のこと、大事にしなくちゃ」

「え？」

「だって、こんなに小さい命が、瑞希の中にいるんだよ？」

「ふふ…。そうだね。大事にするよ、私も。もう、私一人の体じゃないもんね」

「うん」

瑞希の手をそっとにぎった。この手から、赤ちゃんまで俺のぬくもりが伝わったらいい、そんなことを思った。

瑞希はつわりもなく、元気だった。

10月に入り、俺の検診の日が来た。

「瑞希は、家にいて。大学病院なんて、風邪ひいた人とかもいるんだから。ね？」

「大丈夫だよ」。大学病院の産婦人科に行く人だって、いるんだよ？」

「駄目！」

俺は、瑞希を家に残して、病院に一人で行った。

瑞希は俺の体を心配してるのか、何か先生から大変なことを言われて、俺がショックを受けないかって心配してるのか、ギリギリまで、ついていくと言っていた。

でも、俺はすこぶる体の調子が良くて、最近ずっと頭痛もしていなかったし、吐き気もなかった。けいれんも、9月終わりからまったくなくなっていた。

食欲もあり、髪もいつの間にか、黒々と生え、いったい俺いつ死ぬんだろう？こんな元気だけどって感じだった。

7月の終わりに余命3ヶ月といわれてたから、10月終わりには、消える命のはず。でも、ぴんぴんしてるけどな。

病院に着くと、何人かの知ってる看護師さんに会った。

「あら、圭介君。検診？」

「はい」

「今日は一人？奥さんは？」

「あ、妊娠してて、家で今日は留守番です」

「え？赤ちゃん！、まあ、おめでとう」

「はい、ありがとうございます」

「……。なんか圭介君。顔色もいいし、ちょっと体格もよくなったんじゃない？」

「太ったってことですか？」

「あ、ううん。前、痩せてたから、ちょうど良くなった感じ。調子はどう？」

「ああ、はい……。なんか、ばりばり元気で……」

「そう、良かったわね。あ、検診よね。行ってらっしゃい」

待合室でつかまって、しばらく話し、それから、受付に行き、すぐに呼ばれた。

診察を受け、検査をしても、先生から、

「顔色良くなつたね〜。元気そうだと、言われたり、

「髪の毛、つやつやね」

って、婦長さんにも言われた。

「あ、竹内先生、俺、父親になるんすよ」

「え？」

「瑞希、赤ちゃんできたんです」

「そつか〜！おめでとう。ああ、何かお祝いしないとな」

「いえ、そんな、悪いっすよ」

「いいんだ、いいんだ。婦長、何か考えよう」

「はい、そうですね」

竹内先生と、婦長さんは、結婚式にも来てくれた。他の看護士さんもすごく、俺のことを可愛がってくれてた。嬉しかった。

検査も終わり、ひさしぶりに、ぶらって買い物のがたくなり、病院の最寄りの駅まで歩いていった。その駅には、大手のデパートがあり、そこに入ってベビー用品売り場にいったみた。

「わ〜〜〜〜〜！」

可愛い服や、靴、ベビーカーにおもちゃ、勢揃いだ。

「こりゃ、おふくろや、瑞希のお母さんが買ってたきちゃうのわかる気がする」

そうつぶやきながら、ぶらぶら見ていると、

「どなたかへの出産祝いですか？」

と、若い女性の店員が聞いてきた。

「え？いえ。あの…」

まいった。何かを買う予定はなかった。でも、ここで、見てるだけって言うのも変なので、

「俺の、生まれてくる赤ちゃんのものを、ちょっと…」
と、本当のことを言つと、

「え？」

つて、店員がびっくりしてた。

まあ、その時のかつこうは、Ｔシャツにちょっと、だぼついた、腰ではくジーンズ。パンツが見えそうな、いや、見えてたかもしれないようなはき方もしてたし、どう見ても、学生かぷー太郎にしか見えないだろう。いや、実際働いてないし、ぷーなんだけど。

「お洋服か、それとも、何をお探ですか？」

「あ、すみません、何ってわけじゃ…。ただ、ちょっとどんなものがあるかなって思っ」

「いつ生まれる予定ですか？」

「来年の５月です」

「まあ、１番いい季節ですね」

「はあ…」

「奥様も楽ですね」

「え？そうなんすか？」

「そう聞きますよ。冬生まれだと、夜中の授乳も大変だとか」

「あ、そうなんだ」

「また、何かいるものがあれば、いつでもいらしてください」

「あ、はい」

ペコってその店員に頭をさげて、俺はその場を立ち去った。

それから、腹がものすごく減ってて、ご飯を食べていくことにした。

瑞希には、ご飯を食べて帰るねと、メールを入れたら、わかった、気をつけてねと、返信が来た。

最上階にあるレストランに入る。お母さんと子供の姿が、ちらりほらりとした。ああ、瑞希もあんな感じになるのかな…。そんなことを思いながら、一人でご飯を食べた。

ふと、外を見ると、すっかり秋の空になっていて、俺は秋にはも

うない命かもって思っていたから、不思議な気持ちになった。

家に帰ると、瑞希は、うたたねをしていた。妊娠すると、いつも眠くなるみたいって瑞希が言ってたけど、そういえば、たまに昼寝をさせてねと、昼に1時間くらい寝ることがあった。

俺はその間に、写真をプリントアウトして、日記に貼ったりしていた。

「あ、お帰り」

瑞希は、俺の気配を感じたのか、起き出した。

「あ、寝ててよかったのに」

「うっくん、大丈夫…。遅かったね。混んできた？」

「いや、行ったらすぐに、診てもらえたから」

「そう」

「帰りにさ、デパート寄って来ちゃった」

「デパート？」

「ベビー用品売り場ってところに行ってきた。すげえよ。可愛いものばっかで…」

「ずる~~~~い」

「あ、ごめん。今度一緒に行こう」

「それで？そこからタクシーで？」

「いや、電車で」

「大丈夫だったの？」

「ああ、うん」

「そう…」

「デパートの店員にさ、俺の赤ちゃんのものを見ていますって言うたら、すげえびっくりしてて。やっぱ、これじゃ、お父さんには見えないかな」

「そんなことないよ。圭介よりも、若い10代のお父さんだって、

いるだろうし……」

「あ、そっか」

「それより、体の調子……」

「え？大丈夫だよ」

「ほんと？」

「うん」

瑞希の心配する顔をよそに、俺はベビー用品売り場でもらってきた、いろんなパンフレットを見始めた。ベビーカー、ベビーベッド、服。特に、ベビーカーには驚いた、いろいろあるんだな。

そして、そのベビーカーに、赤ちゃんを乗せて、散歩に行ったり、買い物に行ったりしていると想像した。いや、叶わない夢なんだけど……。つい、空想してしまう。

それから、ベビーカーを押している瑞希のことも、想像してみた。りした。

そんな俺のことを瑞希は、しばらく眺めていた。黙って俺のことを見ている瑞希は、やっぱり優しいあたたかいまなざしで、俺のことを包んでくれた。

瑞希の顔を見て、瑞希のおなかに手を当てた。

未来を思うより、今、目の前の瑞希と、おなかの子をこうやって触れて感じているほうが、ずっとずっと大事だよな。そう思って、パンフレットは片付けた。

23 奇跡が起きた

それから、一週間後、検査の結果を聞きに、また一人で病院に行った。

「今日も、一人で行くの？」

「うん。瑞希、実家に行つてれば？ご飯もまた、食べてくると思うしさ」

「そう…。わかった」

ちよつと瑞希の顔が、沈んでるように見えた。

「何？」

「ううん。なんか、いつも圭介と一緒にいるから、一人になるの、不思議なだけ」

「ああ。そつか…。でも、瑞希には、おなかに赤ちゃんがいるじゃん」

「そうだね。赤ちゃんとお話でもするよ」

俺は、瑞希に見送られ、駅まで歩き、電車で病院に行った。

「いつも一緒にいるのに…か」

そうだ。本当にいつも俺たちは一緒にいる。寝るときも隣にいて、秋になり、涼しくなつてからは、風呂も一緒にはいつているし。あ、夏場は、シャワーだけだったから、一人で入つて、さっさと出てきてたけど…。

風呂に入ると、よく瑞希のおなかにさわつて、二人で赤ちゃんに話をした。まだ、あまり赤ちゃんがいるとはわからないほど、瑞希のおなかには出てなかつたけど、それでも、確実にいるんだもん。それだけ、一緒にいる。トイレくらいだ、別々な…。

なのに、突然俺がいなくなつて、瑞希大丈夫なんだろうか…。いや、赤ちゃんがいる。いや、シヨックで、赤ちゃん、どうにかなつ

ちやわないだろうか。いや、大丈夫だ。…そんなことを考えながら、俺は病院に向かっていた。

診察室に呼ばれて入ると、先生と婦長さんが、なんか、変な顔をしていた。神妙な顔つき…。え？なんか、悪い結果？でも、最近すごく調子がいいのに。

あ、そういえば、この前、瑞希となんとなく借りて観た洋画に、不思議な能力がついた男性の話の映画があった。

なんて題名だっけ？ジョン・トラボルタが出てるやつだ。あるとき、光を見たときから、その不思議な力がそわるんだけど、実は脳にできた腫瘍がどつかの神経を圧迫して、それで、いつもは眠っている能力が開花して、すごい力を発揮してたっていうそんな話だった。

光つてのも、UFOかなんかで、宇宙人からもらった力とかって主人公は思ってるんだけど、実は脳腫瘍が原因で見えてた、幻覚だったとかって…。

そんな感じ？なんか、どつかの神経圧迫して、調子がいいように感じてるだけとか、その逆で、どつかの神経がおかしくなって、気持ち悪いのも頭痛も、感じなくなっちゃったとか…？

「圭介君。真剣に聞いてくれ」

「あ。はい…」

「やっぱり、かなり深刻な話？」

「実はだね。検査の結果なんだが…」

「はい…」

「ゴク…。なんか緊張…」

何を言われるんだ…？これ以上、どんなショックなことがあるっていうんだ？

「消えてしまったんだよ…」

「何がですか…？なんかの神経とかですか？」

「いやいや…。がん細胞が、まったく消えてなくなっている」

「……。え？」

「奇跡としか言いようがない…」

「…？」

今…、なんて言った？先生…。え？消えた？

「圭介君、信じられないかもしれないけど、事実なんだよ」

「私たちも、はじめは信じられなかったけど…。奇跡が起きたのね！」

婦長は、涙ぐんでいた。

「え？がん細胞が？」

俺は耳を疑った。

それから、これが夢じゃないかって、疑った。

それから、幻覚や幻聴じゃないかって疑った。

「いや、これは、奇跡なんだが、でもがん細胞が消えたとか、奇跡が起きたとは、医者立場からは、言えないんだよ。いや、君や、君のご両親には、消えたとお伝えするが、でも、公の場では、誤診だったとしか…」

「は？誤診？」

「誤診だったとしか言えないんだよ…」

「誤診だったんすか…？」

俺の頭は、なんか働かなくなつて、さっぱりわけがわからなくなっていた。

「いや、そうじゃなくて…」

「がん細胞はあったのよ。転移もしていたの。でもね、転移していた箇所もまったくなくなっていたの」

婦長がそう、付け加えた。

「……？」

「数値で見てもだね…。あ。詳しいことを説明するよ。レントゲン写真と、これが検査の結果だ。こっちは、先月の…」

竹内先生は、説明をしだした。でも、まったく頭に入らないし、聞いててもちんぷんかんぷんだった。

説明が終わると、検査の結果やレントゲン写真を封筒に入れてくれた。

「奥様や、ご両親にこれを持って、報告するといい。それから、また、来月検査をしよう」

「あ…、はい…」

「じゃあ、会計の待合室でお待ちください」

婦長さんにそう言われて、椅子から立ち上がり、なんかやっこ、頭が回転しだして、

「え？じゃ、俺、死なないってこと？」

と、先生に向かって聞いた。

「そつだよ。圭介君」

「え…？だつて、余命3ヶ月って…」

「そつだ。7月の時点ではね」

「……。俺、脳腫瘍じゃないってこと？え…？治ったってこと？」

「……。奇跡だよ、良かった…」

竹内先生が俺の、両手を持って、ぎゅって握ってきた。目をうるませながら。婦長は泣いていた。

「ま…じで？」

「早くに、ご家族にもお伝えしてあげたら？」

「あ。はい…！」

そう言っつて、俺はありがとございました！と頭を下げ、診察室を出た。

会計を待っている間、瑞希に電話をしにいった。

病院の中では、電話はできないよなつて外に出て、そこで初めて携帯の充電切れに気づいた。

「ああ！」

公衆電話のところに行き、家に電話した。瑞希は出なかった。

ああ、実家か！実家の電話番号は携帯にはいつているものの、どこにも控えてない。それに、瑞希の携帯の番号も、覚えていなかった。

「くそ。こうなったら、早くに帰って、瑞希に知らせない！」

会計を今か今かと待ち、会計が済んで、病院を出て、タクシーに乗り込んだ。絶対、電車よりもタクシーのほうが早いとふんだからだ。

信号待ちも、ちょっとした渋滞も、いらだった。

瑞希に早く知らせたくて、いてもたってもいられなかった。

道路がすきだして、タクシーがスムーズに走り出した。瑞希の家にどんどん近づく景色を見ながら、俺はだんだんと喜びが、溢れてきた。

俺…、生きられる…！

俺…、ずっと瑞希の隣にいられる…！

赤ちゃんにも会える…！会える…！会える…！！

そこで、夢の赤ちゃんを思い出した。いや、赤ちゃんっていうより、小さな子。色が白く、黒い髪。俺のことをパパと呼んだ…。あの子、俺の子だよ、絶対。あれは正夢なんだ！

おなかの子が見せてくれた夢かもしれない！

いや、おなかの子が奇跡を起こしてくれたのかもしれない！俺と、いっぱい遊びたくって、奇跡を起こしたのかも…！

タクシーを降りて慌てて、チャイムを鳴らす。待っていられず、ドアもドンドンたたいて、

「瑞希？いる？」

と、叫んだ。瑞希と、お母さんが、驚いた表情でドアを開けた。

「瑞希！」

俺は、靴をはいたまま、家にあがって瑞希を抱きしめていた。

「瑞希！やったよ！やったよ！」

「何が？」

「無くなってた。がん細胞全部消えてた！」

俺はそう叫んで、もう一回瑞希を力いっぱい抱きしめた。そして、
「本当に？圭ちゃん」

という、お母さんの声で、我に返り、瑞希を抱きしめた腕をゆるませた。あ、赤ちゃんがいるんだった！

「本当です」

手にした封筒を、渡そうとして、手にないことに気がついた。

あれ？落とした？足元を見ると、封筒が落ちてて、慌ててそれを拾い上げた。その瞬間、瑞希がへなへなと座り込もうとしてて、

「あ……！」

俺は、とっさにまた、封筒を投げ、瑞希の体を支えた。瑞希は、腰を抜かしたように、体に力が入らないようだった。

「それ、見てください。って言っても、見てもよくわかんないんですけど……」

お母さんが、封筒を拾って中からレントゲン写真と、検査の結果の用紙を出した。

瑞希を支えたまま、リビングに行こうとすると、お母さんから、
「圭ちゃん、靴は脱いで。」

と、言われて、初めて靴をはいたまま上がっていたことに気がつい

た。慌てて、靴を脱ぎ捨て、瑞希を支えて、リビングに入った。
瑞希をソファに座らせ、俺もその隣に座った。お母さんもソファに腰掛け、レントゲンの写真を見ていた。

「竹内先生が奇跡が起きたよって言うてくれました。でも、今の医療ではありえないことで、奇跡とか、がん細胞がまったく消えたとか、そういうふうには、公には言えない。癌であったことが誤診だったとしか言えないって、言っていました」

瑞希と、お母さんが顔を見合わせた。お母さんが、
「転移していた癌は？」

と聞いてきたので、

「それも消えました」
と、答えた。

「ひいづく…」

瑞希が、いきなり声をあげて、泣き出した。俺は、瑞希をそっと抱きしめた。

「奇跡ね、まさに奇跡ね。ああ、信じられないけど、本当のことよね…」

お母さんが、涙を流しながらそう言った。

「はい…」

瑞希は、俺の胸の中で、泣いていた。

しばらくして、瑞希が落ち着くと、お母さんが、

「これ、検査の結果を持って、圭ちゃんの家に行ってきたら？」
と、言ってくれた。

「はい。じゃ、瑞希はここにいて」

「え？」

「大泣きして、大変そうだから。報告したら、すぐに戻るよ」
そう言って、俺は瑞希の実家を出た。

瑞希には申し訳なかったけど、走ってでも、すぐにうちに向かっ

て、おふくろに報告がしたかった。瑞希と一緒に急げなかったから、瑞希には、実家にいてもらった。

走りながら俺は、

「信じらんねえ。信じらんねえ。でも、本当のことだよな…」
と、何度も口走っていた。

家に着くと、俺はまた、チャイムを何回も押し、ドアをたたいた。
「圭介？どうしたの？」

「おふくろ！」

おふくろが玄関を開けたのと同時に俺は、おふくろに抱きついて
いた。

「奇跡！奇跡だよ！」

「え？何が？」

「俺の癌、消えちゃったよ！」

「え？」

おふくろは、目を真ん丸くして、それから、飛び跳ねた。

「ほ、本当なの？本当に？圭介！」

「ああ、これ、見て！」

俺が、封筒を渡すと、中からがさがさとレントゲン写真を出した。

「よ、よくわからないけど、本当のことなのね…？」

レントゲン写真を持つおふくろの手が、震えていた。それから、
俺のことをぎゅうって抱きしめて、声を出して泣き出した。俺も、
おふくろを抱きしめ、声をあげて泣いた。

家に入り、

「お父さんに電話しなくっちゃ！」

とおふくろは、震える指で受話器を手にしたが、指が震えて、番号
を押すことすらままならなかった。

「貸して」

そう言つて、俺は電話の子機を受け取り、番号をおふくろに聞きながら、電話した。

「はい、○○会社、榎本です」

「あ、親父？」

「圭介か？どうした？なんかあつたのか！」

「ああ、検査の結果聞いてきたんだ」

「ああ。それで……？」

親父の声は、冷静だった。

「俺の、がん細胞、全部消えて無くなつてた」

「えっ?!」

親父が、とんでもない声をあげた。

「なんだって？圭介、もう一回言つてくれ」

「だから、がん細胞が消えてた！」

「……！」

親父が無言になった。そのあと、小さな泣き声が聞こえた。

「そうか。そうか……」

そう言つたきり、親父は電話の向こうで泣いていた。おふくろも、俺の隣で、泣いていた。

それから、おふくろは、

「今日、お祝いをしたいわね。そうだ、瑞希さんのご家族も一緒に」と提案した。

「うん。いいよ」

そして、すぐにおふくろが瑞希の家に電話をした。

瑞希のお母さんが出たようで、瑞希の実家でもお祝いをする準備をしているから、こちらにいらしてくださいと、言われたらしい。

親父が、仕事を途中で投げだし、早々と帰ってきた。それから、親父が酒を飲みたいからと言うので、3人で電車で、瑞希の実家に行った。

瑞希のお父さんも、修にいても、早めに帰宅して、みんなでお祝いをしてくれた。

瑞希は、ずっと、目をうるうるさせていて、時々、俺のそばに来ては、俺の腕を掴んだり、俺の背中を触ったりして、俺の名前を呼んだ。

「ん？」

返事をして、目をうるませるだけで、何も言わなかった。ああ、俺の名前を呼びたいだけなんだってことがわかった。

クロは、俺があまりの勢いで、瑞希の家に来たので、びっくりしたのか、大人しかったが、今になって俺の足元に来て、じゃれついた。

クロをなでまくっていると、今度は、修にいが、ビール片手にやってきて、俺の背中をばんばんたたき、

「よかったな、圭介、よかったな」

と、目をうるませてそう言ってくれた。

9時を過ぎ、おふくろと親父が、帰っていった。それから、俺を瑞希も、俺たちのアパートに帰った。

瑞希は、家に帰ってくる途中も、俺の腕にしっかりと腕をからませ、家についても離れようとはしなかった。

「夢じゃないよね…」

瑞希がぼつりと言った。

「夢じゃないよ…」

「これ、現実だよね…？」

「うん。そうだよ…」

瑞希は、また泣き出した。俺に抱きつき、嬉しいって言いながら、泣いていた。瑞希のことを優しく抱きしめ、俺も泣いた。

「赤ちゃんに俺、会えるんだね…」

「…うん」

「ずっと、瑞希といられるんだ…」

「…うん」

「なんか、信じられないけど…。俺も…」

「でも、本当のことだよな？これ…」

瑞希はそう言って、俺の目を見た。涙で濡れたまつげで、俺のことをじっと見ている。瑞希にキスをした。長い長いキスをして、また抱き寄せた。

赤ちゃんがいると、駄目なのかなって思ってたけど、瑞希とその日は、抱き合った。そっと、赤ちゃんが苦しむことがないよう、気を使いながら。

瑞希は、俺の腕の中で、涙をまた流した。そして、俺の首に両腕をまわして、俺を引き寄せ、

「圭介、大好き…」

って、耳元で、ささやいた。

「ずっと、一緒にいられるね」

「うん…」

「圭介のこと、こうやって、ずっと、感じていられるんだね…」

「うん…」

瑞希はそう言ってから、おなかに手を当てた。

「赤ちゃんも、きっと、喜んでもる」

「うん」

「パパに会えるって、喜んでもるね…」

「……。うん！」

俺も、瑞希のおなかに手を当てた。俺に奇跡を起こしてくれてあげがとうって、心の中で、赤ちゃんにそう言った。

翌朝、順平と兄貴が電話をくれた。昨日遅くに帰ってきたらしく、それから、親父に、話を聞いたようだった。

「よかったな、圭介！」

そう二人とも、喜んでくれ、週末遊びに来いよと、言ってくれた。しばらくして、笹おじさんにも報告をすると、いつでも、会社に戻って来いと言ってくれた。

10月の終わり、俺は会社に復帰した。みんな、俺の病気を知っていたから、すごく喜んでくれた。

俺は、仕事に復帰はしても、前のように会社に泊まるようなことはせず、一人で家で待ってる瑞希のことを思い、残業しても、10時には家に帰ることにした。

11月になると、秋も深まり、近くの公園のもみじやイチョウが色づき始めた。それを、写真に撮り、日記に貼った。

日記はもう、2冊目だった。春になれば、生まれてくる赤ちゃんに会えるんだけど、それでも、日記は完成させたいねって瑞希と話し、生まれるまで、日記をつけ続けることにしていた。

12月、クリスマスには、シャンパンを飲んだ。瑞希は、ほんの少し飲み、二人でクリスマスを祝った。

検診に俺は時々、ついて行った。エコーで赤ちゃんを見ると、心臓の動いているのが見えて、まじで俺は感動した。

「すげえ、心臓、動いてる……！」

生きてるって言うのが、すごく嬉しくて、思わず、感動して泣いていた。

先生や看護師さんは、俺の感動している様子がめずらしいのか、面白いのか、くすくすと笑っていた。でも、瑞希を見ると、瑞希も目をうるませていて、二人で、おなかの中の赤ちゃんの鼓動に感

動した。

瑞希の背中に耳を当てて、鼓動を聞くことが、たまにある。瑞希も俺の胸に耳を当て、鼓動を聞いた。

でも、だんだんと、瑞希のおながが大きくなるにつれ、一緒の布団で寝ることもできなくなり、一緒にお風呂に入ることもできなくなった。

「なんか、そのへんが、ちょっと寂しい」

って言うと、瑞希はおなかの子に向かって、

「さびしんぼうの、パパですね〜」

って、言った。

「あ、ちょっと、そういうこと、赤ちゃんに教えないで！」

「なんで？」

「なんでって、そりゃあ父親の威厳がさ〜」

「くす…。でも、事実じゃない？」

「う…。瑞希だって、寂しがりやじゃんか」

「そうだよ〜。認めるよ。圭介がそばにいないと、寂しくて、泣いてるよ」

「え？俺が会社に行ってる間？」

「…っていうのは嘘だけど！」

「なんだよ〜〜〜！」

「あはは…」

瑞希は俺がいない間、実家に行ったり、俺のおふくろが遊びに来たり、ヨガで一緒だった友達が尋ねてきたりと、意外と一人でいることもなく、楽しんでいるようだった。

でも、俺が仕事から帰ってくると、しばらくは俺にべったりくっついて、離れなかった。

「瑞希は、さびしがりやじゃなくって、甘えん坊だね」

「え？そう？」

あれ？自覚してないの？

「俺に、べったりくっついてるじゃん」

「それは、甘えてるっていうか…」

「うん？」

「うっくん。いちゃいちゃしてるの」

「ええ？何それ？」

「だって、私たち、まだまだ新婚でしょ？」

「新婚？」

「うん」

「あ、それで思い出した。新婚旅行行ってないね。俺たち」

「じゃ、2月に温泉旅行っていうのはどう？」

「桐子さんの結婚式…。でしょ？」

「そう、招待状が来たの！」

「おお！行くよ！じゃ、それが新婚旅行かな」

「うん！」

俺は仕事をしているとはいえ、やっぱり、瑞希といろんなことを、楽しんでいた。冬はこたつを出し、みかんを食べたり、じんべえを着たりした。

「日本人の冬って感じ…」

「あはは。何それ？圭介って、和が好きだよな」

「そりゃ、日本人だからね」

大晦日はもちろん、年越しそばに、紅白歌合戦。除夜の鐘もテレビでだけど、聞いてて、でも、途中で俺は瞋睡してた。

お正月は、俺の実家にも、瑞希の実家にも行ってきた。

おふくろは、こんな正月が迎えられるなんてと、泣いていた。なんか泣き上戸になったよな…。

で、そんなおふくろを、決まって親父が、慰める。背中を優しく抱いてることもあれば、さすってあげてることもあって、今まではそんな光景見たことなかった俺や兄貴は、なんか、見てはいけなような、テレがあつた。でも、順平だけは、堂々とひやかしていた。そう、順平は前に言ってたように、家のいい潤滑油っていうのかな、明るくいつも盛り上げてくれていた。

瑞希と、近くの神社に行き、お参りをして、安産のお守りを買った。

俺はよく瑞希のおなかにさわりながら、元気に生まれて来いよ。ママのことは絶対に、苦しめるなよ…と話していた。

「大丈夫よ」

瑞希はそう言って、笑っていた。

24 命の輝き

瑞希と、2月、伊豆に行ってきた。新婚旅行だ。

瑞希はかなり、おながが大きくなってたけど、俺の車で休み休み、行ってきた。

結婚式では、桐子さんは白無垢を着ていた。思わず俺は、白無垢を着ている瑞希を空想した。ああ、絶対に綺麗だろうな…。

「瑞希の白無垢も見たいな〜。もう一回結婚しない？」

「う〜ん。私も羽織袴姿の、圭介見たいわ〜」

「へ？俺の？」

「うん、本当に、絶対に似合うと思う！」

俺のなんて見たいの？ほんと、瑞希は変わってる…。

瑞希と式が終わって、桐子さんのところに行くと、

「圭介君と式に来てくれるなんて、すごく嬉しいよ。ありがとう」

と、桐子さんが涙ぐみながら言った。瑞希も、かんきわまって泣いちゃって、二人で抱き合ってた。ああ、いいな。友情だな…。

3月、瑞希と一緒に検診に行くと、赤ちゃんの性別を聞きたいかって先生が聞いてきた。

どっちが生まれてくるかは、楽しみに取っておきますと、瑞希が言った。俺も、楽しみにしておきたかった。

母親学級っていうのがあって、それにも瑞希が行った。

赤ちゃんをお風呂に入れる練習、それからラマーズ法っていうのを習った。俺は絶対に立ち会いたって瑞希に言って、ラマーズ法は家でも瑞希と、練習してた。

それにしても、出産って男じゃ耐えられないほどの痛さだって言うけど、どんくらいなんだろう。瑞希が苦しんでいるとき、俺はど

のくらい瑞希の力になってあげられるのか…。

それから、本屋に行くたびに、絵本を買って、瑞希のおなかに向かつて読んだりした。

ベビー用品もどんどん増えていき、ベビーベッドも買って、寝室においた。

瑞希と休みの日は、よくデパートに行き、ベビー用品を見た。どれもこれも、可愛くて、楽しかった。

4月。だんだんと出産が近づき、瑞希は赤ちゃんの産着を丁寧に手洗いして、一つ一つベランダに干していった。

すげえ、小さくって、可愛くって、思わず俺は写真に撮った。瑞希と風になびく、小さな可愛い産着を見ながら、幸せをかみしめた。もうすぐ、赤ちゃんに会えるねって…。

瑞希のおなかに、赤ちゃんの足の裏が、しっかりと見えることがあった。

「すげえ！足の裏だよ、これ！」

おなかで動いたり、たまに蹴られて痛いって言うってたけど、自分のおなかの中に命があるってどんな感じなんだろう。

エコーで撮る赤ちゃんの写真は、どんどん大きくなり、手、足、頭、背中がわかるようになって、これが、目、これが鼻って、一つ一つ先生が教えてくれた。

5月。予定日があと、1週間ってなつて、そろそろ入院の準備をしようって、お母さんと瑞希が鞆にいろいろと、しまいだした。

なんか、俺はどきどきしてた。赤ちゃんに会った瞬間、なんて言うか…とか、瑞希をどう励まそうか…とか。

でも、やっぱり1番気になっていたのは、どうか無事に生まれてきてくれってこと。瑞希が寝てからも、そつと瑞希のおなかに手を

当てて、

「元気に生まれて来いよ」
って、話しかけた。

その次の日。朝、いつものように、瑞希がお弁当を作ってくれて、それを持って会社に向かった。

社長には、出産の時には瑞希についていくので、お休みをもらいますと、前もって許可をもらっていた。

朝、自分のデスクで、パソコンを開き、さて、仕事を始めるかっ
て思ったその瞬間、携帯がなった。

「瑞希？どうした？」

「破水した！」

「は、破水？え？」

「圭介、病院行くから、圭介も来てね」

「え？わかった！」

慌てて、社長のところに行き、

「瑞希、赤ちゃん生まれるって言うから、俺、早退します！」

って、告げた。社の人みんなから、

「おお〜！そうか。生まれるのか！」

って、さわがれた。社長は、あとは俺にまかせて、行ってこいと言
ってくれた。

大ダッシュで、駅まで走った。電車の中でも、走りたいくらいだ
った。

「瑞希、待ってるよ〜〜！」

頭の中で、すごく痛がつて俺を呼んでる瑞希の顔が浮かんた。

病院に着いて、受付に行き、

「榎本です。瑞希生まれそうだって聞いて……」
と、息を切らして言うと、

「榎本さん、こちらです！今、分娩室にいますよ！」

と、言われて、一人の看護師さんが分娩室まで案内してくれた。

「早く、早く。立会い出産するんでしたよね！」

って看護師さんも、慌てていた。俺も、慌てた。心臓はばくばくだった。

息を切らしながら、分娩室に入った。

「瑞希、ごめん。遅くなった」

中では、うんうん唸って痛がつてる瑞希がいるって思っていた。でも、瑞希はさわやかな顔をして、分娩台の上に寝ていた。

「あーほら、お父さんですよ」

いきなり横から、赤ちゃんを抱っこしてる助産婦さんが来た。お、お父さん…？

「榎本さん、抱っこしてみる？」

「え？もう生まれたの？」

「そうよ。ほら、3400グラムの男の子」

そう言いながら、俺の腕に赤ちゃんを乗せてくれた。

「小さい…」

俺の両手に乗っかるくらいだ。

「可愛い…」

なんか、サルみたいだ。でも、可愛い…。すげえ可愛い…。

「こえ〜、抱っこするの…」

ふにやふにやしてて、思わず両腕に力が入る。こんなに小さいのに、生きてるんだな。あったかいんだな。なんか、感激して涙が出た。

赤ちゃんが口を開けた。あ、口元瑞希に似てる。

「瑞希に似てる」

「あら、お父さん似じゃない？目元も、鼻も」

助産婦さんが、赤ちゃんの顔を覗き込んでそう言った。

「でも、□元瑞希だ」

瑞希は、赤ちゃんを抱っこしている俺を、すげえ優しい目で見ていた。

「瑞希、ありがとう」

瑞希の耳元で、そう言うと、瑞希は嬉しそうに微笑んだ。

痛かったのかな。苦しかったのかな。立ち会えなかった。そばにいてあげられなかったな。

「隣にいてやれなくてごめん。立会い出産しようって、ラマーズ法まで一緒に覚えたのにな」

「予定日より、1週間も早かったんだもん」

「こいつ、早く生まれてきたかったんだな」

赤ちゃんの顔を見ると、目をぱっちりと開けていた。俺の話を聞いてるみたいだった。

「この世界が、どんなにすばらしいかおなかの中で、聞いてたから、早くに生まれたかったんだよな」

ああ、ご対面だ。俺、会えたんだな、俺と瑞希の子に…。色が白くて、髪が黒くて…。ああ、夢で会ったのやっぱり、お前だよな。

翌日、親父とおふくろとお見舞いに行った。

瑞希は赤ちゃんを見に行こうと言って、よたよた歩きながら、新生児室に俺らを連れて行ってくれた。親父はしっかりとカメラを持っていた。

「榎本瑞希」という名札の書いた小さな小さなベッドに、赤ちゃんが寝ていた。すやすや気持ちよさそうだった。

「男の子なら、爽太って圭介と決めてたんだ」

瑞希がそう、ぽそってつぶやいた。それを聞いた親父とおふくろは、目に入れても痛くないっていう眼をしながら、
「爽ちゃん」

と、つぶやいた。

俺は、爽太を見ながら、瑞希に話しかけた。

「ああやって、寝てるだけでも、すごい幸せな気持ちにさせてくれるね。すごいな、赤ちゃんって」

「うん、そうだね」

瑞希がそう答えた。

「命って、すごいな。っていうかき、存在がすごい。そこにいるだけで、周りを幸せにするんだから」

「圭介もね」

瑞希が俺のほうを見ながら、そう言った。

「え？」

「圭介だってそうだよ。ここにこうしていてくれるだけで、周りを幸せにしてくれるよ」

おふくろが、それを聞いて、俺の横で、大きくうなづいてた。

「そっか、あ、でも、瑞希もだよ。俺、瑞希がここにこうしていてくれるだけで、幸せだから」

瑞希の目を見ると、俺の姿が映ってた。ああ、俺、こうやって、今、瑞希の前で生きているんだな…。

それから、爽太を見た。すんげえ小さいのに生きてる。生きて息して、あくびして、手を動かして。それだけなのに、俺はものすごく、感動してた。

4日後、瑞希は爽太と退院した。

家に帰り、ベビーベッドに爽太をそつと寝かせた。そのまま、爽太の寝顔を見ていた。

「可愛いよな〜。小さいよな〜」

なんか、これからずっと、爽太と瑞希とここで、暮らしていくんだと思うと、ものすごく満たされた思いがして、胸がいっぱいにな

った。

「3人の生活が、これから始まるね」

瑞希は、俺の気持ちを察してなのか、そんなことを言った。

爽太の小さな手にそつと、触れてみた。そうしたら、爽太が、俺の指をぎゅって握った。

「あ、見て！すっげえ」

そう言つと、瑞希もベビーベッドの爽太を覗き込んだ。

「けっこう、力あるよ。こんなにちっちゃいのに」

「うん」

ああ、爽太とも、ともに生きていくんだな…。

隣にいる、瑞希のあつたかいぬくもりと、爽太の指の力強さに、俺は感動しながら、ずっと、爽太を見ていた。

赤ちゃんができたときとは、こんな日が来るとは思つてなかった。

シングルマザーになる瑞希のことを、苦労かけさせないかと思ひ悩んでみたり、赤ちゃんに会えないことを、切なく思つたりした。赤ちゃんにこうやつて、会えるなんて夢のようなことだったし、赤ちゃんに触れることも、抱っこすることも絶対に叶わないことだつて思つてた。

瑞希は、そつと俺の肩に、もたれかかつてきて、

「夢、どんどん叶ってるね…」

そんなことを言つた。ああ、そういえば、瑞希言つてたな。俺とのいろんな未来をイメージしてたっけ…。

「でもね、圭介」

「うん？」

「私ね、未来こうしたいって思つても、でも、今が1番大事」

「うん…」

「こうやって、圭介のあたたかい空気を感じているのが、すごく幸せ。今、目の前にいる圭介や、爽太を見ているのが、すごく幸せ。今、目の前にある風景がとっても愛しいんだ」

「俺も」

瑞希に、キスをした。

「ずっとずっと、この瞬間を大事にするよ。今に俺たちは生きているんだもん。ね…」

そう言うつと、瑞希はすごく嬉しそうに笑ってうなづいた。

爽太は、元気にすくすくでかくなった。毎日が驚きの連続、幸せの連続。瑞希とほんの小さなことも、喜んだ。

爽太が、笑った！

爽太が、しゃべった！

爽太が、寝返りをした！

爽太が、はいはいをした。

そりゃあ、もう大騒ぎで、俺が仕事でいないときでも、写メで送ってくれたり、ビデオで撮ってて帰ってから、見せてくれた。

ほんと、俺たちつて、親ばかだよなってよく、瑞希と話していた。

でも、俺は爽太だけじゃない。

爽太を見て喜ぶ瑞希の笑顔が大好きで、爽太を抱っこするときの優しい瑞希の顔も大好きで、すっかり母親の顔になっている瑞希の顔が見れて嬉しくて、どんな瑞希もやっぱり見ておきたくて、家にいるときには、瑞希と爽太をずっと見て、いつも感じていた。

瑞希も俺のこと、じっと見てるときがあつて、

「見とれてる？」

つて、茶化して聞くと、

「うん。圭介、かっこいいもの」

つて、照れもせずに言う。言われたこっちが照れる。

まだまだ、俺らは新婚気分だよなって言うつと、

「恋人気分かもね」

って、瑞希がああ「ふふ」って俺の好きな笑い方をして言う。

休みの日には、俺の実家と、瑞希の実家に交互に遊びに行った。もう、どっちの親もじじばか、ばばかを發揮して、大変だった。

爽太はクロが大好きで、クロはすごく爽太に優しくかった。ほんと、頭のいい犬だっと思う。

ベビーカーを押して買い物に行くのも、公園に行くのも、想像していたことで、また、瑞希が、

「叶ってる！」

って、喜んでいた。瑞希も、こういうところを想像していたんだな。

ほんと、他の人から見たら、なんでもない、日常のことが、俺たちにとっては宝物のようなきらめく一瞬一瞬だった。

翌年の5月、天気の良い気持ちのいい日、海に行った。俺と瑞希、爽太、そしてクロも連れて。

クロと思い切り走った後、砂遊びに夢中の爽太を抱っこして、高い、高いをした。ああ、こういう光景を去年何度も想像してたっけ。爽太はきゃっきやって喜んだ。青い空高く舞い上がり、笑う爽太は、まるで天使だった。

ほっぺたにキスをする、なんとなく甘い香りがする。それから、爽太を抱っこしたまま、海を見た。

「爽太、世界って言うのはさ、すばらしいだろ？生まれてきて良かっただろ？」

爽太はそれを聞いて、うんうんってうなづいた。白い肌、黒い髪、確実に夢に出てきた男の子だ。

「パパ、いっぱい遊ぼうね」

そう俺に、言ってた男の子だ。

「爽太、いっぱいいっぱい遊ぼうな」

そう爽太の耳元でささやくと、爽太はそれを聞き、思い切り嬉しそうにきゅきゅって笑った。その笑顔がすごく、まぶしかった。

俺たちを見ている、瑞希を見た。瑞希は、そうだ、2年前に一緒に海に来たときも、同じ目をしていた。

あの時と変わることなく、俺のことを優しくあたたかく包んでくれている。そのまなざしに、いつも俺は、ほっとして満たされる。

おっきな空を見た。

おっきな海を見た。

きらきら輝いてる。

風を感じて、潮の匂いを吸う。

腕に抱かれている爽太が、俺のまねをする。

ぎゅって抱きしめ、ほおづりを見ると、また、爽太はきゅきゅって喜ぶ。

瑞希、俺、幸せだよ。今、すごく…。

いや、どの瞬間も幸せだったし、きつと、これからも幸せなんだろうな…。

1年後の春…。

女の子が生まれた。名前は、もう瑞希と決めてた。春香…。春の香りって女の子ならそうしようってもう、爽太が生まれる前から決めてた。

不思議だね、また瑞希のおなかにいるとき、夢を見たんだ。

「パパ、大好き」

そう、瑞希そっくりの笑顔で言う女の子。俺は夢の中で、でれでれになってた。

ああ、もう、瑞希に春香、二人で俺のこと見とれちゃったらどう

しょうか。俺、まじとけちゃうかも…。

来年には、今度は4人で、海に行けるね。あ、もちろんクロも連れてさ。

ああ、なんていうか、生きてるってのは、最高だね。奇跡奇跡の連続だね。

毎日のありふれてる日常が、全部愛しいよ…。

エピソード

俺の人生は、きっと、瑞希に会わなくちゃ、こんなにすばらしいものにはならなかったと思う。

ね、こうして振り返ってみても、そう思うよ。

君っていう存在が、俺って存在を生かしてくれてる。

君の前にいる俺、生きている瞬間だ。

どの瞬間も、どの瞬間もこんなに輝いているのは、

やっぱり、君がいてくれるからだって、そう思うよ。

いまだに「愛してる」って言わない君、でも、「愛しいよ」「って言う。

俺の「愛してる」に照れる君を

俺は、本当に愛してるよ。

これからもずっと、そして、今この瞬間も…。

瑞希…。

「めぐり逢えたことでこんなに世界が美しく見えるなんて

想像さえもしてない 単純だって笑うかい？

君に心からありがとうを言っよ
「

ミスチルの歌。

まさに俺の心の歌だね。

君に心からありがとうを言っよ。

君に心からありがとうを言っよ。

逢えて本当に、良かった。ありがとう。

く
おわり
く

エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。今 このときを愛してるとはまた違い、主人公が男の子って、書いてても楽しかったです。書きながら、私ももし、命がいつまでかわからなかったら・・・、今をもっとかみしめて、目の前の人、風景を愛しく思いながら生きるだろうな・・・そうだ、もっともっと、今を大事にしよう・・・そんなことを思いました。瑞希や、圭介にそれを教わった気がします。みなさんは、いかがでしたか？読んでくださった皆様、毎日輝く日になりますように・・・。

よかったら感想、お待ちしています。

圭介と瑞希の子供、爽太の物語「君は天使」も読んでみてくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1360i/>

愛する君へ

2010年10月8日13時37分発行